伊能忠敬研究

史料と伊能図

二〇二二年　第九十八号

伊能忠敬研究会

史料と伊能図「伊能忠敬研究」

二〇二二年　第九十八号

伊能忠敬研究会

STUDIES OF INOH'S MAP AND WRITINGS

No.98 2022

表紙解説

国立国会図書館蔵 伊能大図98図 甲斐 信濃（韮崎周辺）

表紙の左上から右下に向かう測線は、江戸時代の五街道の一つ、甲斐国と信濃国を繋ぐ「甲州道中」である。甲州道中は、江戸日本橋から信濃国下諏訪、諏訪湖の北で中山道につなぐ総延長五十三里ほどの街道で、江戸時代初期に旧甲州道を基に、江戸と甲府を結ぶ「甲州海道」として整備されたが、正徳六（１７１６）年には、甲府から下諏訪まで延長されて、街道名も「甲州道中」と改められた。

この区間は、甲斐国の西北部に位置し、西は南北に南アルプスの高山が聳え、東はフォッサマグナに噴出した茅が岳などの火山が連なる。街道が通る谷には、火山噴火により北の八ヶ岳が崩壊して流れ出した火砕流が堆積し、七里岩台地を形成している。この台地上には、今も崩壊した山体の一部である「流れ山」という大きな岩が平らな台地の上に多くの小山を形成している。天正九（１５８１）年武田勝頼が躑躅ヶ崎館を廃して新たに築城した新府城は、韮崎駅北側の台地上の大規模な流山の上ある。七里岩台地の両側は、釜無川などにより削られ、険しい崖が続き、さらにその上の流山も周囲が急峻な斜面で囲まれているため、防御には適した地形だった。新府城の北側の穴山にある能見城もこうした地形を利用しており、新府城の外郭といわれている。

甲州道中は台地の下の釜無川沿いを通る。伊能隊がこの地を測量したのは文化八（１８１１）年四月後半、西暦の六月半ばである。梅雨に入る直前なのか晴れ間もあるが、曇天や雨の日が増える。

四月二十一日に蔦木駅（長野県茅野市）を出立して甲斐国に入り、教来石宿を通過して富士川の上流に当たる釜無川を渡って、この日は台ケ原宿に泊まった。翌二十二日は、台ケ原宿を出立して四里ほどの道程を測量して韮崎宿に泊まった。韮崎宿は甲府から下諏訪に向かう最初の宿場で、甲府からは三里ほどのところにあり、本陣はあったが脇本陣はなく、必要な場合は宿役人のうち手広な家をもつ者の家で勤めていた。忠敬等の宿泊先は、本陣問屋兵助、別宿冨屋弥右衛門、若竹屋文蔵の名が記されている。翌二十三日、忠敬一行は、韮崎宿から甲州街道を離れ駿州道を鰍沢まで測り、二十五日には、鰍沢駅から富士川を船で下り、無測で身延山久遠寺まで行き、帰路に測量して下山駅まで戻った。二十六日に鰍沢で測り留めていた杭に繋ぎ、二十七日に甲府城下に入った。その後は、甲州道中を測りながら東に向かい、五月八日に江戸深川に帰着した。

（表紙題字は伊能忠敬の筆跡）　菱山　剛秀

目次　98号

表紙解説
国立国会図書館蔵
伊能大図98図 甲斐 信濃（韮崎周辺）　菱山 剛秀

研究と話題
●東京大学総合図書館所蔵「測地原圖」と三康図書館所蔵「伊能忠敬實測原圖」　星埜 由尚・鈴木 純子・玉造 功・菱山 剛秀・前田 幸子　1
●江戸府内第一次測量の記録（七）―文化十二年二月十一日の『日記』―　玉造 功　12
●深川黒江町から八丁堀亀島へ　玉造 功　20
●伊能図に描かれた「現存十二天守」（四）　河崎 倫代　25
備中松山城　寺口 学　29
丸岡城

資料
●「伊能忠敬測量隊の足跡をたどる」　連載第三十一回　渡辺 一郎・井上 辰男　31

忠敬談話室
●小説「伊能忠敬と四人の妻」を書き終えて　香取 淳（本名 樋口宗司）　52

会員通信
忠敬を詠ふ（二）　伊能 洋　58
忠敬さん二首　齊藤 サダ　58
新入会員自己紹介　土居 正博　58　兒玉 晴子　58　中島 正太　59　水田 清志　59

各地のニュース
「伊能忠敬笹山領測量の道」刊行　加賀尾宏一　60

事務局からのお知らせ　事務局　60

東京大学総合図書館所蔵「測地原圖」と三康図書館所蔵「伊能忠敬實測原圖」

星埜由尚・鈴木純子・玉造　功
菱山剛秀・前田幸子

はじめに

伊能測量隊は、1日の測量が終わるとその日のうちに測量データを和紙の上に展開し、下図を作製した。そのような下図は、伊能忠敬記念館に多数が保存されており、3万6千分1の縮尺すなわち大図の縮尺により描かれたものが大部分である[*1]。下図は、原稿図であり、下図を編集して寄図、突手本を経て大図の完成図が作成されたとされている(大谷1917)。中図・小図は、この過程でそれぞれ6分1、さらにその2分1に縮小されて作成されたとされているが、その過程については、大谷(1917)が縮図尺の使用を指摘しているが、詳細には述べていない。伊能忠敬の測量法を解説した渡邊愼述『伊能東河先生流量地傳習録』(保柳1974)においても、中図・小図の作成法については、縮図尺の使用のことのみが述べられているに過ぎない。最近、野上道男により、伊能図作成手法に関連する研究が精力的に行われ、その中で野上(2021)は、中図・小図は図解的にではなく測量座標値を平面直角座標上にプロットしてそれぞれ独立に作成されたとの見解を発表している。

下図は、伊能忠敬の地図作成手法に関する重要な資料であり、東京大学総合図書館(東京都文京区本郷)と三康図書館(東京都港区芝公園)に中図・小図の下図に相当する地図が所蔵されていることは、以前から知られていた(秋岡1967、渡辺2003)。しかし、これらを詳細に実見し分析した研究はこれまで知られてこなかった。そのような現状の中、筆者らは、令和3年末以降、下記のとおり、これら2種の資料群を熟覧する機会を得た。

東京大学総合図書館所蔵「測地原圖」については、東京大学大学院総合文化研究科石原あえか教授の仲介により、同館情報サービス課の協力を得て、2021年12月22日午後、伊能忠敬研究会会員有志(鈴木純子、玉造功、菱山剛秀、星埜由尚、前田幸子)および石原あえか氏、東京都立大学名誉教授野上道男氏の7名で「測地原圖」を子細に調査した。

三康図書館所蔵「伊能忠敬實測原圖」については、令和4年6月30日、伊能忠敬研究会有志(鈴木純子、玉造功、菱山剛秀、星埜由尚、前田幸子)により三康図書館を訪問し、「伊能忠敬實測原圖」を閲覧する機会を得た。[*2]それぞれの調査結果については、星埜ほか(2022a、2022b)及び星埜(2022)で報告しているが、両者をあわせて伊能忠敬研究会の場で改めて報告したい。

※本稿の図表は、5ページ以降にまとめて掲載した。

1．東京大学総合図書館所蔵「測地原圖」

東京大学総合図書館には、伊能忠敬測量隊による下図「測地原圖」が所蔵されている。この存在は秋岡(1967)により紹介され、渡辺(2003)の報告もあるが、詳細についての報告はこれまで知られていなかった。2020年7月29日からは総合図書館Web上でのデジタル画像公開が開始されている[*3]。

東京大学総合図書館所蔵「測地原圖」は、93枚の地図で構成されている。その来歴については不明であるが、昭和5年の東京帝国大学図書原簿に93枚1セットで「1860円00銭」との購入記録が残っている(同館・情報管理課による)。これは、1図葉当たり20円となる。「測地原圖」の各葉には整理番号が93番まで付されているが、第26番に下図が2図描かれているので、図葉は93枚、下図は94図である。93枚の図葉は、蓋表に「伊能忠敬測地原圖」と墨書きされた桐箱に収められている。

故渡辺一郎氏は、「測地原圖」が東京大学総合図書館に所蔵されていることを紹介し(渡辺2003)、各図の整理番号[*4]、表題[*5]、縮尺[*6]及び紙幅の種別について、その一覧を記している。また、桐箱の寸法を縦53㎝×横38㎝とのみ記載しているが、このたびの閲覧時に厚みを計測したところ5.5㎝であった。

紙幅については、大小の2種類があり、大判のものは、小判の図紙を貼り継いでおり、紙幅の大きさはそれぞれ微妙に異なる。「測地原圖」を調査した秋岡武次郎は、紙幅について「480㎜×335㎜が36枚、315㎜×235㎜が57枚」と記している(秋岡1967)が、1994年に調査した渡辺氏は、大判は概ね32㎝×47㎝で、小判は概ね23㎝×33㎝と報告し、各図の縮尺について大図1枚、中図34枚及び小図59枚から成るとしている(渡辺2003)[*7]。このたびの閲覧時に確認したところ、渡辺(2003)に記されている縮尺別の図紙の枚数には、誤りがあり、正しくは、大図縮尺が1枚、中図縮尺が36枚、小図縮尺が56枚である[*8](表1)。

「測地原圖」のうち、大図縮尺の原図は、江戸深川付近の図であり、大図縮尺の原図はこれのみで

ある。中図縮尺の原図は、関東西部から甲信、瀬戸内沿岸、南九州の図が多く、三陸の図もある。小図縮尺の原図は、本州全般、特に東北地方、中国地方の図が多い（表１）。

２．三康図書館所蔵「伊能忠敬實測原圖」

公益財団法人三康文化研究所付属三康図書館（東京都港区芝公園）には、「伊能忠敬實測原圖」と称する下図が所蔵されていることが知られていた（秋岡１９６７、渡辺２００３）が、これまで閲覧・実見し調査結果が報告されたことはなかった。

三康図書館は、明治35（１９０２）年に出版社博文館の創業者大橋佐平が設立・開館した旧大橋図書館の蔵書を引き継いで昭和39（１９６４）年に発足した図書館である。仏教研究を目的とする公益財団法人三康文化研究所の付属図書館として仏教・宗教関係資料を中心に古典籍資料を多数所蔵し、その中に多数の古地図がある。「伊能忠敬實測原圖」については、購入時の記録があり、それによれば、昭和４年６月14日、日本橋区通１丁目４番地福川方和倉梅から６００円（当時）で購入となっている。これも１図葉当たり20円にて購入した計算となる。この価格は、東京大学総合図書館所蔵「測地原圖」の購入価格と同じで、購入時期も極めて近い時期であり、東京大学総合図書館所蔵「測地原圖」と三康図書館所蔵「伊能忠敬實測原圖」とは、一体として所蔵されていたものがこのときに分割されて売却されたことが推測される。また、戦前に大橋図書館館長を務めていた坪谷善四郎が著した『大橋図書館四十年史』を復刻した『復刻版大橋図書館四十年史』（三康図書館所蔵）によると、安田家寄付特別圖書の一班として「伊能忠敬實測地圖原圖」三十枚が挙げてあり、安田家の寄付金により和倉梅を介して購入されたものと推測される。安田家とは安田銀行創設者安田善次郎の同名の息子安田善次郎である。初代歿後の関東大震災で蔵書一切を焼失した大橋図書館の再建にあたり、図書購入費５万円を寄付した。その購入図書に「安田家寄附特別圖書」印が押捺されているが、「伊能忠敬實測原圖」にはその捺印はない。

「伊能忠敬實測原圖」は、描かれている測線、針穴、地名、図郭線の寸法表記、測量端点間の寸法表記、全体の体裁、小図の範囲が大図図郭と一致することなど、東京大学総合図書館所蔵「測地原圖」と全く同様である。また、両者の間に重複する図はなく、「伊能忠敬實測原圖」が「測地原圖」と一連のものであることを裏付けている。中図縮尺の原図６図葉のうち、５図葉は中国地方の図であり、中部地方の図が１図葉ある。小図縮尺の原図24図葉は、東北から四国まで「測地原圖」の小図縮尺の原図の欠ける部分の図である。（表１）

以後、東京大学総合図書館所蔵「測地原圖」と三康図書館所蔵「伊能忠敬實測原圖」を併せて「測地實測原圖」と総称することとしたい（記載の便宜上単に「原図」とすることもある。）。「測地實測原圖」に相当する下図は、伊能忠敬記念館および神戸市立博物館にも所蔵されている（表１、図１）。

３．「測地實測原圖」の内容

「測地實測原圖」共通の表現事項

「原図」には墨または朱の測線が描かれ、測点には針穴がある。測点には墨の点を打たれている場合があり、ケバのような短線が測点から派出している。これは、測点の位置を読み易くするためにこのような派出する短線を付したのであろう。各測点を結ぶ測線は、定規を当てて引いたようには見えず、微妙に湾曲している。

「原図」には白径が引かれている。白径の確認には、斜めから光線を当てるなど、注意深い観察が必要である。測点を展開するときに基準としたと考えられる東西・南北の白径が各図に引かれていることが多い。但し、白径を図郭線としている場合もあり、墨や朱を重ねている場合には確認が困難な場合も多い。また、交会法の目標とした山頂に向けた方位線は、描かれていないが、ごく少数の方位線が白径により引かれている場合がある[*9]。

測点、山頂の位置等は、針穴を通して展開されている。針穴は、光を当てることにより明瞭に観察されるが、裏面から見ると墨が穴に滲んで黒点の連続として観察され、針穴を展開した後、測点の間を黒または朱の墨線で繋いで測線が描画されている。国名、郡名、村名などの地名が測線に沿って記載されており、それらの境界が明記されているが、その描き方は、点・線記号の場合と界と書かれる場合とがある。測量端点間の図上東西・南北成分距離などの図上寸法が記載されている。（図２）

大図縮尺の原図

大図縮尺の原図は、「測地原圖」のうちに１図葉存在する。整理番号12「葛西川村、亀戸村、小名木川村等」の図[*10]（図３）は、唯一大図の縮尺で描かれている図葉で、測量端点間の東西・南北成分を示す朱線が描かれているが、その寸法などは記載されていない。測量日記の記録から判断して、第二次測量において、深川出立前に洲崎弁天から

中川河口を廻って中川御番所まで測量したときの下図であろう[*11]。紙幅の左隅に6分の1即ち小図縮尺の縮小相似図形が描かれている。

中図縮尺の原図

中図縮尺の原図(図4はその一例)は、各次の測量結果を展開したものである。それぞれ第七次又は第八次の測量成果によるものが大部分であり、一部第二次測量の成果によるものがある。三康図書館所蔵の中図縮尺の原図はすべて第七次の測量成果によるものである。中図縮尺の原図は、東京大学総合図書館に34図葉、三康図書館に6図葉の併せて40図葉である。

中図縮尺の原図に描かれている測線は、同一次の測量における測線の分岐点・閉合点、あるいは一定の測量日までの範囲で描かれている。整理番号34「九州十四自御領村至串木野五反川」と整理番号35「九州第十五自串木野五反川至薩肥国境」において、第七次測量の測線は墨、第八次測量の測線は朱で追記して区別しているもの以外は、単次の測量における一週間から十日程度の期間の成果である。

これらの図は、測量の端点・経過点を記して図名としていることが多い。図名に番号を含むものは、図名の地域の一連の下図であると考えられる。図中には、国名、郡名、村名が明記されるが、それらの境界を「界」と表記し、その両側に村名等が記されていることが多い。天文観測を行った地点には「測処」と記されているが、記入されていない場合も多い。河川名、山名も記入されている。山名は、山頂を表現していると思われるくさび形に描いた三本の短線から成る記号(頂点に針穴がある。)に付記されていることが多い。寺社名も記されている。城郭は、□の記号で表示され、陣屋は楕円形で示されるが、城主名などは記されていない。

測量端点間の距離の東西・南北成分の数値が東西・南北の朱線とともに記されており、寸・分・厘及びそれ以下の端数が八三三、一六七、七五、三三、五毛など、12分の1、6分の1、4分の1、3分の1、2分の1などの倍数の数値で記されている。また、測線上には、測点に打った仮杭の符号と考えられる㋑などが付記されている。

上記の原図記載事項の特徴や東京大学総合図書館整理番号1、3、5～11、13～19、21、22、27、37の「測地原圖」及び三康図書館所蔵番号2、3、4の「伊能忠敬實測原圖」の図名に記された地名から、伊能忠敬記念館に所蔵される大図縮尺の下図とその描画範囲が一致していると見られる[*12]ところから(表1)、中図縮尺の原図は、各次測量のほぼ日々の測量成果から作製された下図を一週間から十日ほどの期間の測量範囲に接合集成した寄図から縮小して作製されたものと考えられる。

小図縮尺の原図

小図縮尺の原図(図5はその一例)には、朱の図郭線が引かれており、この図郭線は、大図の図郭範囲と一致する(表1、図1)。従って、小図縮尺の原図は、大図の図郭範囲に対応して作成されたと考えることができる。図中において国郡界は朱の太線、村界は朱の点で表示されている。ただし、村界は示されていない場合も多い。図郭線と測線との交点間の図上寸法が表示されており、図郭線の図上寸法も表示されている。中図縮尺の原図と同様に、寸・分・厘及びそれ以下の端数が八三三、一六七、七五、三三、五毛など、12分の1、6分の1、4分の1、3分の1、2分の1などの倍数の数値で記されている。

小図縮尺の原図に記されている地名は、国郡町村名及び山島名が大部分であり、数少ない著名な寺社名が表示されている。東京大学総合図書館所蔵の整理番号60「五十八番属」、整理番号67「七十五番下属」及び整理番号89「百二十三番属」は、それぞれ大図119号(白山)、大図106号(青ヶ島)及び大図61号(森吉山)に対応する下図であるが、測線は存在せず、山島名と山頂の位置のみが示されている(図6)。「五十八番属」には、白山と富士社山の図郭線からの図上寸法が記載されている。整理番号45「中國第十三圖」など、「平野縮圖」と書かれたものがあり、これらの図は、忠敬の弟子である平山郡蔵[*13]の手になるものであることを示している。そのほか、描画に関する表示として図化作業日を記したものがある。

おわりに

伊能図の下図は、東京大学総合図書館所蔵の93図葉及び三康図書館所蔵の30図葉のほか、伊能忠敬記念館に国宝に指定された399図葉と無指定の14図葉が所蔵されており、神戸市立博物館所蔵の1図葉と合わせ、伊能図作製過程を明らかにするためには、欠かせない資料である。しかしながら、これまでその分析を行った研究は皆無に近い状態であった。今後下図に関する研究が積極的に行われることを期待したい。

この報告は、日本地図学会機関誌「地図」に「資料」として掲載した報文を利用して執筆したものである。東京大学総合図書館での閲覧に当たっては、東京大学大学院総合文化研究科教授石原あえ

か氏、東京大学同館情報サービス課の中村美里氏に、三康図書館での閲覧に当たっては、同館の新屋朝貴氏、小林はつき氏、浅井真帆氏、早川仁英氏にご懇切なご協力をいただいた。記して感謝申し上げる次第です。

文献

・秋岡武次郎１９６７．伊能忠敬作成の日本諸地図の現存するもの若干．地学雑誌76－６：３１３－３２１．
・伊能忠敬記念館２００５．『伊能忠敬関係資料目録　下図』
・大谷亮吉１９１７．『伊能忠敬』岩波書店．
・佐久間達夫校訂１９９８．『伊能忠敬測量日記第一巻』大空社
・坪谷善四郎２００６．『復刻版大橋図書館四十年史』博文館新社
・野上道男２０２１．伊能忠敬の測量成果の地図化法．地理学評論94(6)：４２７－４４９．
・星埜由尚２０２２．東京大学総合図書館所蔵「測地原圖」に関する若干の考察．　地図60(2)：27－33
・星埜由尚、石原あえか、鈴木純子、玉造功、野上道男、菱山剛秀、前田幸子２０２２ａ．東京大学総合図書館所蔵「測地原圖」について．地図60(2)：34－42
・星埜由尚、鈴木純子、玉造功、菱山剛秀、前田幸子２０２２ｂ．三康図書館所蔵「伊能忠敬實測原圖」について．地図60(3)：19－22．
・保柳睦美１９７４．渡邊慎述、編：伊能東河先生流量地伝習録．保柳睦美編著『伊能忠敬の科学的業績』３３３－３６１．古今書院．
・渡辺一郎２００３．東京大学総合図書館蔵伊能忠敬測地原図．伊能忠敬研究32：30－33．

注

*1 江戸府内図の下図は、６０００分１、１２０００分１の縮尺である。また、第一次測量における下図は、２４０００分１から３３０００分１で様々な縮尺により、第二次測量の伊豆半島の下図の縮尺も６０００分１である。また、第一次測量において測量できず、後に間宮林蔵から資料を提供されたとされる下図には、１２０００分１，１５００００分１などの縮尺のものがある。

*2 伊能忠敬研究会の名義により三康図書館の許可を得て、菱山が「伊能忠敬實測原圖」の写真撮影を行った。伊能忠敬研究会会員は、これらの写真を閲覧できるので、本報告のいずれかの著者に連絡の上閲覧していただきたい、なお、これらの写真を論文・著書などに掲載する場合は、三康図書館の許可と経費が必要である。無断掲載の無いようにお願いしたい。

*3 https://iiif.dl.itc.u-tokyo.ac.jp/repo/s/sokuchigenkozu/page/home
（２０２２年1月現在）。
東京大学学術資産等アーカイブズポータルの解説もある。
https://da.dl.itc.u-tokyo.ac.jp/portal/collection/sokuchigenkozu

*4 番号を記載した円形のシールが貼ってある。

*5 測量の始点・終点・経過点などを記載している場合、九州、西国街道など地域別に付番している場合、単位番号のみの記載の場合とがある。

*6 大図、中図、小図に分けている。

*7 渡辺（２００３）では、整理番号26に、２図幅が描かれているところから、これを2枚に分けている。図紙は1枚である。

*8 渡辺（２００３）は、整理番号１「甲州巨摩郡 自身延山山門之石 至 福士村人家前」、整理番号10「自中山道歴名古屋至岡崎趣甲州街道二」及び整理番号11「自岡崎趣甲州街道三」を小図縮尺としているが、図に描かれた測線の寸法から中図の縮尺であると判断される。

*9 整理番号15「中山道六分之原図 四」には、八ヶ岳に向かう白径と朱線の方位線が見られる。

*10 この地図には、図上に表題が記されていない。

*11 第二次測量において、三浦、伊豆を周回し、深川に戻り、その後房総に向かって出立する間に測量した。伊能忠敬測量日記には、6月15日の項に「朝より曇る．　五ツ後相川町火の見前より洲崎弁天、それより海辺測量．　中川御番所向、又兵衛新田止る」とあり、6月19日の項には、「去る十五日潮干にて、海岸測量も宜しからんと、洲崎弁天より海辺中川尻、それより中川に添て御番所前迄測し…」とある。（佐久間達夫校訂『伊能忠敬測量日記第一巻』による。）

*12 『伊能忠敬関係資料目録下図』（伊能忠敬記念館 平成17年）に図の範囲，縮尺，紙幅の寸法などを記載しており、該当の下図の概要が分かる。「寄済」、「詰済」などと記載されており、大図縮尺の下図を接合して寄図としたものであろう。

*13 平山郡蔵は、第五次測量の際、不行き届きがあったとされ、伊能忠敬から破門されたが、後に、姓を「平野」と改めて測量隊に復帰し、地図作成作業を手伝った。

表１　「測地實測原圖」一覧表

	図名	縮尺	測量次数	同範囲の伊能忠敬記念館所蔵の大図縮尺の「下図」または該当する大図番号
東京大学総合図書館「測地原圖」				
1	甲州巨摩郡 自 身延山山門之石 至 福士村人家前	中図	8	（180）小域下図「甲州巨摩郡〈自身延山山門前・至福士村人家前」
2	自 辻堂村東海道追分 至 大山歴テ田原村制礼	中図	8	
3	従 武州大里郡熊谷宿歴川越 至 入間郡大仙波新田	中図	8	（265）広域下図「従武州大里郡熊谷宿 歴川越 至入間郡大仙波新田〇大印」
4	自 江府深川測処 至 大堀村	中図	2	
5	自信州筑摩郡洗馬宿大門村歴松本至更級郡川中島塩崎江戸善光寺道追分并姥捨山	中図	8	（280）広域下図「従信州筑摩郡洗馬宿同郡大門村 歴松本 至更級郡川中ノ嶋塩崎〈江戸善光寺通〉追分并姥捨山」
6	従 飛州大野郡無敷河村 至 信州筑摩郡藪原宿制札	中図	8	（290）広域下図「従飛騨国大野郡無数河村〇ム印 高山町ヲ歴 至信筑摩郡藪原宿制札ニ至ル」
7	従 信州佐久郡借宿村下仁田通リ 至 武州児玉郡本庄宿制札多胡碑	中図	8	（266）広域下図「従信州佐久郡借宿村下仁田通リ　至武州児玉郡本庄宿制札多胡碑」
8	従 周防国吉敷郡山口道場門前町 至 佐波郡東佐波令制札, 長門阿武郡地福村字口, 周防吉敷郡宮野村口七房, 防芸州界亀尾川峠	中図	8	（333）広域下図「自周防国吉敷郡山口道場門前町 至〈佐波郡東佐波令制札・長門国阿武郡地福村字掛・周防国吉敷郡宮野村枝七房・防芸州界亀尾川峠〉」
9	従 長門豊浦郡小月宿制札 至 阿武郡萩市中入口	中図	8	（334）広域下図「従長門国豊浦郡小月宿制？ 至阿武郡萩市中入口」
10	自 中山道歴名古屋 至 岡崎趣甲州街道 2	中図	7	（294）広域下図「自中山道 歴名古屋 至岡崎趣（赴）甲州街道 二」
11	自 岡崎趣甲州街道 3	中図	7	（286）広域下図「従岡崎より趣（赴）甲州街道 三」
12	[記載なし][葛西川村, 亀戸村, 小名木村 等]	大図	2	
13	岡崎ヨリ甲州街道ニ趣 5	中図	7	（269）広域下図「従岡崎趣（赴）甲州街道 五」
14	従 信州水内郡長野村内善光寺宿善光寺門前飯山須坂松代ヲ歴テ 至 高井郡屋代宿	中図	8	（279）広域下図「従信州水内郡長野村内善光寺宿 善光寺門前飯山須坂松代ヲ歴テ 至高井郡屋代宿旧測印」
15	中山道六分之原図 四　従塩名田宿至贄川宿	中図	7	（263）広域下図「中山道〈従塩名田・至贄川宿〉四」
16	中山道六分之元図 第六	中図	7	（283）広域下図「中山道 〈自三冨(留)野駅字中河原 至本郷村字中〉六 」
17	中山道六分之原図 五　贄川宿－須原宿	中図	7	（281）広域下図「中山道 〈自贄川 至三冨(留)野尻宿字中河原〉五 」
18	従 作州大庭郡下長田村字犬挟峠 至 伯州日野郡二部村字間地, 備中阿賀郡小坂部村, 同上房郡□□村字塩坪, 作州大庭郡久世村歴方中嶋村境	中図	8	（337）広域下図「従作州大庭郡下長田村字犬挟峠〇長印　至〈伯州日野郡二部村字間地・備中阿賀郡小坂部村未年間二月残印・同上房郡片岡村字塩坪前同年残印・作州大庭郡〈久世村原方・中嶋村〉境〇中印勝山城下〉」
19	西国街道五 自 備後安那郡川北村 至 安芸豊田郡本郷村	中図	7	（330）広域下図「西国街道 五 〈自備後国安那郡川北村神辺 至安芸国豊田郡ノ本郷村測処〉又福山町測処」
20	西国街道六　芸州 従 豊田郡本郷村 至 安芸郡上瀬野村	中図	7	
21	西国街道四　従 岡山下町 至 神辺又油木, 八川ニ至ル	中図	7	（338）広域下図「西国街道 四 従岡山下町 至神辺 又〈油木・八川〉ニ至ル」
22	西国街道一 山城淀, 播磨神戸村	中図	7	（302）広域下図「西国街道 一　山城国紀伊郡淀測処ヨリ 播磨国（ママ）八部郡神戸村至ル」
23	従 摂州豊島郡半町止宿 至 播州加西郡坂本村	中図	7	
24	第三十七番 自 田老村 至 唐舟之図	中図	2	
25	第三十八番 自 唐舟 至 岩尻村図	中図	2	
26	第四番 自 白川 至 矢吹, 第5番 自 矢吹 至 清水町図	中図	2	
27	西国街道三　自 播磨揖西郡正条 至 備前御野郡岡山	中図	7	（304）広域下図「西国街道 三 〈自播州揖西郡正条 至備前国御野郡岡山下町〉」
28	自 大隅国桑原郡濱市村野尻ヲ歴テ加久藤, 本庄ニ至ル	中図	8	
29	日向本庄村佐土原, 幸州ヲ歴恒冨村ニ至ル	中図	8	
30	九州第七　日向国 平脇才岩境ヨリ田吉村八手迄	中図	7	
31	九州第八　日向 田吉村字八手 至 贄波海北村界	中図	7	
32	九州第十二 自 廻村牧場 至 牛ヶ嶺	中図	7	
33	九州第十三 自 鹿児島城下街道追分 至 御領村	中図	7	
34	九州十四　自 御領村 至 串木野五反川	中図	7	
35	九州第十五 自 串木野五反川 至 薩肥国境	中図	7，8	
36	九州第十七　甲 自 下松球ヲ村字段 至 有川村	中図	7，8	
37	自 美濃不破郡赤坂宿谷汲山ヲ歴テ 至 山県郡岐阜町及厚見郡東鏡島鏡島村境	中図	8	（293）広域下図「自美濃国不破郡赤坂宿 歴谷汲山 至山県郡岐阜町及厚見郡〈東鏡島・鏡島〉村境」
38	中国第五番	小図	5,6	169柳井
39	中国第六番	小図	5,7,8	173岩国
40	中国第七番	小図	5，7	172浜田
41	中国第九圖	小図	5,7,8	166温泉津
42	中国第十番	小図	5，8	165大田
43	中國才拾壱番	小図	5,7,8	164呉・今治
44	中国十二番	小図	7，8	163三次
45	中国第十三圖	小図	5，8	162出雲
46	中国第十四番	小図	5，7	157福山・尾道
47	中国十五番	小図	7，8	156東城
48	中国才拾六番	小図	5，8	155松江・米子
49	中国才拾七番	小図	5,6,7,8	151倉敷
50	中国第十八圖	小図	5,7,8	150倉吉・新見
51	中国拾九番	小図	5,6,7,8	145岡山

	図名	縮尺	測量次数	同範囲の伊能忠敬記念館所蔵の大図縮尺の「下図」または該当する大図番号
東京大学総合図書館「測地原圖」				
52	中国二十三番	小図	8	128和田山
53	中国弐拾七番	小図	8	127福知山
54	中国廿八番	小図	5,8	123宮津
55	中国廿九番	小図	5,8	122舞鶴
56	中国三十壱番	小図	5	154隠岐島前
57	五十二番	小図	6,8	134奈良
58	第五十五番	小図	5,8	126堅田・園部
59	五十八番	小図	4	120福井
60	五十八番属	小図	4	119白山
61	五十九番	小図	4	86金沢
62	六十五番	小図	5,7,8	114犬山
63	六十六番	小図	8	113郡上八幡
64	七十〇番	小図	7,8	98甲府
65	七十二番	小図	4,5,8	107静岡
66	七拾五番上	小図	9	103新島・神津島・式根島
67	七十五番下属	小図	9	106青ヶ島
68	八十七番	小図	3,7,8	96松本
69	八十八番	小図	3,8	81長野
70	八拾九番	小図	4	79三国峠
71	九十八番	小図	3,4	74出雲崎
72	百〇〇番	小図	3	73新潟
73	百〇一番	小図	3	72村上
74	百〇二番	小図	3	67会津若松・米沢
75	百〇三番	小図	1,2	53白石
76	百零四番	小図	1,2	56福島
77	百〇五番	小図	2	54原町
78	百〇六番	小図	1,2,3	68白河
79	百〇七番	小図	2	55いわき
80	百一十一番	小図	3	66山形
81	百十二番	小図	1,2	52仙台
82	百一十三番	小図	2	48石巻
83	百一十四番	小図	3	71温海
84	百一十六番	小図	3	65新庄
85	百二十〇番	小図	2	46宮古
86	百二十一番	小図	1,2	50盛岡
87	百二十二番	小図	3	63本荘・大曲
88	百二十三番	小図	3	62秋田
89	百二十三番属	小図	3	61森吉山
90	百二十四番	小図	3	60能代
91	百二十五番	小図	1,2	49二戸
92	百二十六番	小図	1,2	45久慈
93	百二十七番	小図	1,2	44八戸
三康図書館「伊能忠敬實測原圖」				
中1	從岡嵜趣甲州街道四 自飯嶌町測処至信甲州界・自飯嶌町測処至伊奈諏方郡界・自伊奈諏方郡界至上原塚原村界	中図	7	
中2	從石州鹿足郡青原村至同那賀郡濱田城下	中図	7	
中3	西國街道二 自攝州八部郡神戸村至播州揖西郡正条止宿	中図	7	
中4	西國街道七 自藝州安藝郡上瀬村一貫田測処至防州玖珂郡関戸宿	中図	7	
中5	西國街道八 周防玖珂郡関戸本陣前ゟ吉敷郡小俣鑄銭司村界ニ至ル	中図	7	
中6	西國街道九 從長州吉田四郎原防州小郡山口通明木ニ至ル	中図	7	
小1	五十三番	小図	5,6	135大阪
小2	六十一番	小図	4,5,6,7,8	118岐阜・大垣
小3	六十二番	小図	4,5,6,7,8	115名古屋
小4	六十三番	小図	4,5,6,7,8	116豊橋
小5	六十七番甲	小図	7,8	110中津川
小6	六十七番乙	小図	8	112高山
小7	六十八番	小図	7,8	109木曽福島
小8	六十九番	小図	7	108飯田・伊那
小9	九十一番	小図	4,7,8	94高崎・秩父
小10	九十二番	小図	4	77湯沢
小11	九十三番	小図	3,4	80糸魚川

	図名	縮尺	測量次数	同範囲の伊能忠敬記念館所蔵の大図縮尺の「下図」または該当する大図番号
三康図書館「伊能忠敬實測原圖」				
小12	九十五番	小図	4	82魚津
小13	九十六番	小図	4	83富山
小14	百十五番	小図	4	84七尾
小15	八拾五番（朱字）	小図	4	85輪島
小16	九十四番（朱字）	小図	4	76長岡・柏崎
小17	九十七番（朱字）	小図	3	70酒田
小18	百十七番（朱字）	小図	3	64横手・湯沢
小19	百十九番（朱字）	小図	2	47釜石
小20	中國第八圖	小図	5,6,7,8	167広島
小21	中國二十〇番	小図	5,7,8	144津山
小22	中國貳拾壹番	小図	5,8	143鳥取
小23	中國貳拾五番	小図	5,6,7,8	137神戸・明石
小24	四國四十一番	小図	6	168松山
伊能忠敬記念館 及川家文書				
1	五十番	小図	5,6	117鳥羽
2	第五十四番	小図	5,6,7,8	133京都
3	七十五番中	小図	9	104三宅島・御蔵島
4	七拾五番下	小図	9	105八丈島
5	七十六番	小図	4,5,6,8,9	99小田原
6	七拾七番	小図	7,8	97大月
7	七拾八番	小図	1,2,3,4,5,6,7,8,9	90東京
8	七拾九番	小図	2,4,5,6,8,9	93横浜・横須賀
9	八〇番	小図	2	92館山
10	八拾壱番	小図	2	91木更津
11	八二番	小図	2	89船橋
12	四国三十九番	小図	6	152観音寺
13	四国四十四番	小図	6	161宿毛
神戸市立博物館「測量図」				
	百一十八番	小図	1,2	51一関

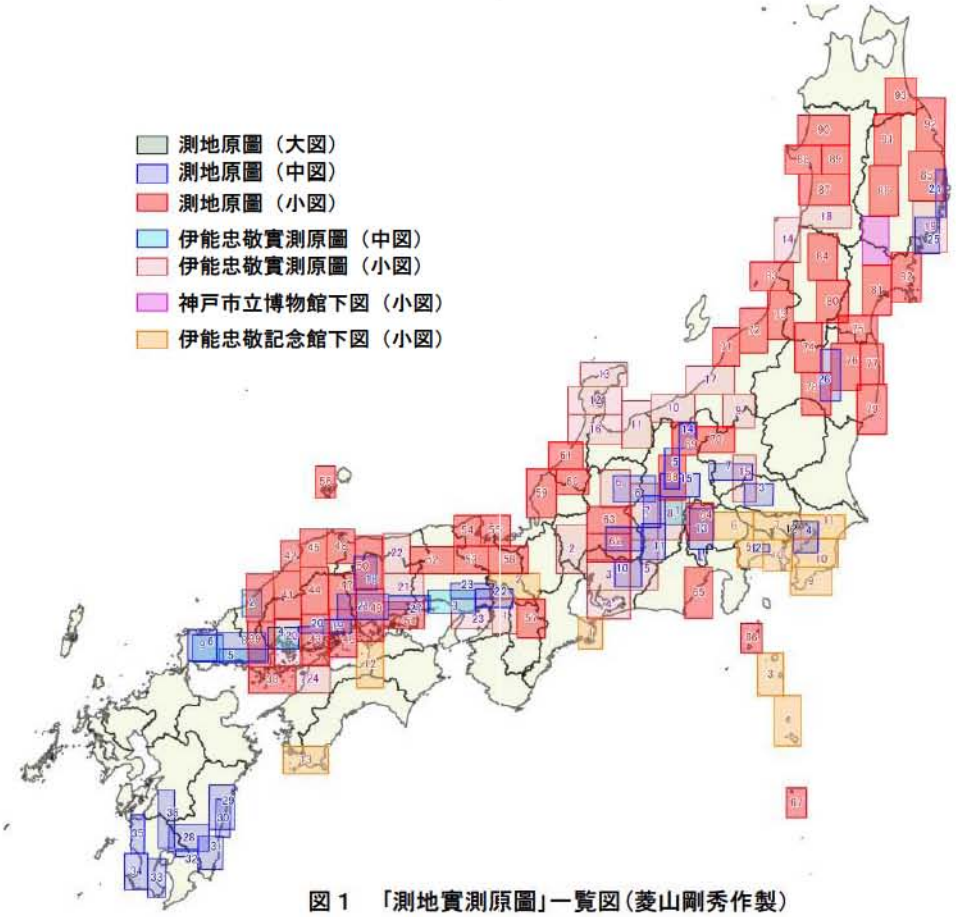


図１　「測地實測原圖」一覧図（菱山剛秀作製）

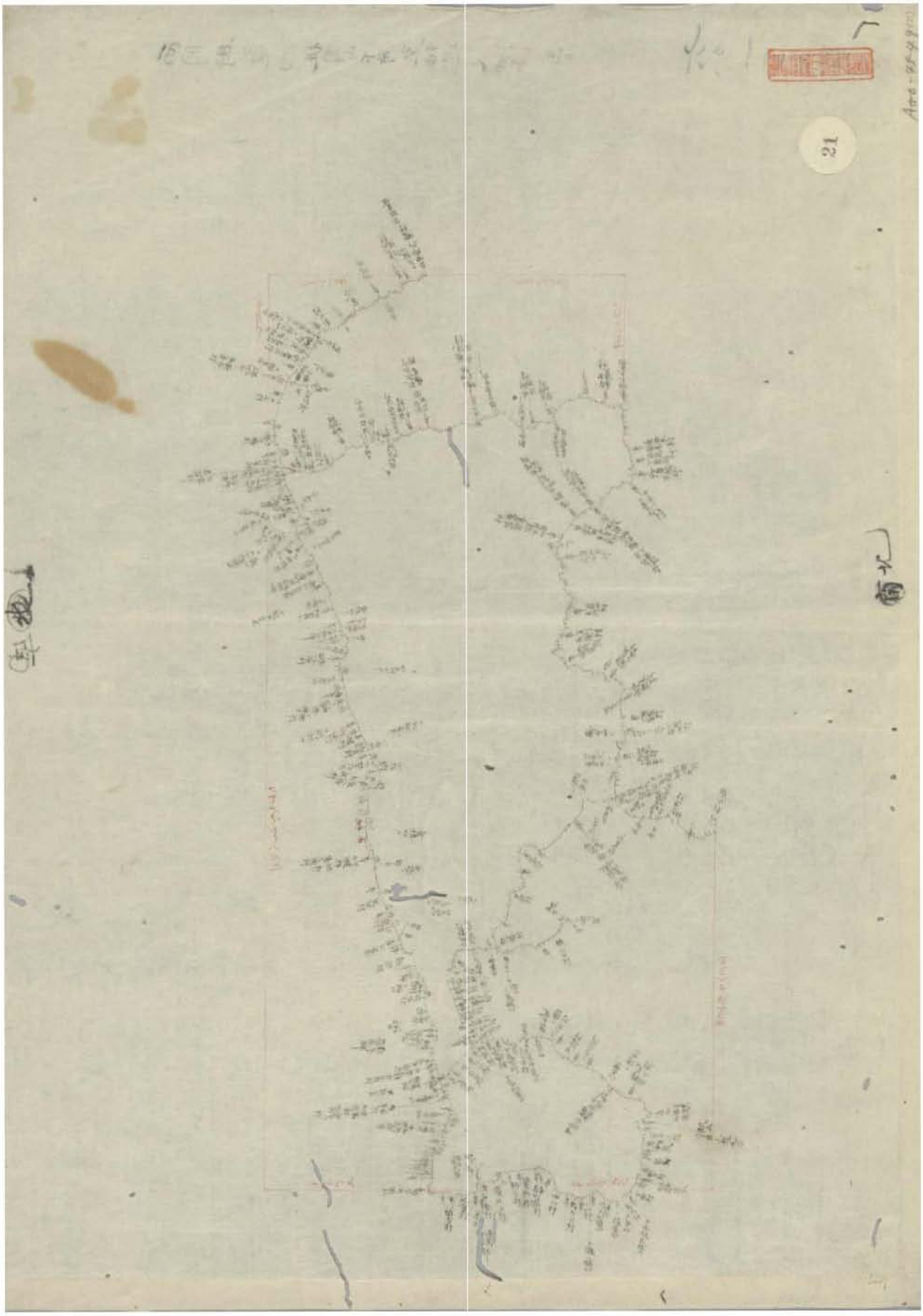


図２　測地原圖（中図）　整理番号 21 西国街道 4 「従 岡山下町 至 神辺又油木，八川ニ至ル」
（東京大学総合図書館所蔵、東京大学学術資産等アーカイブズポータルから引用）

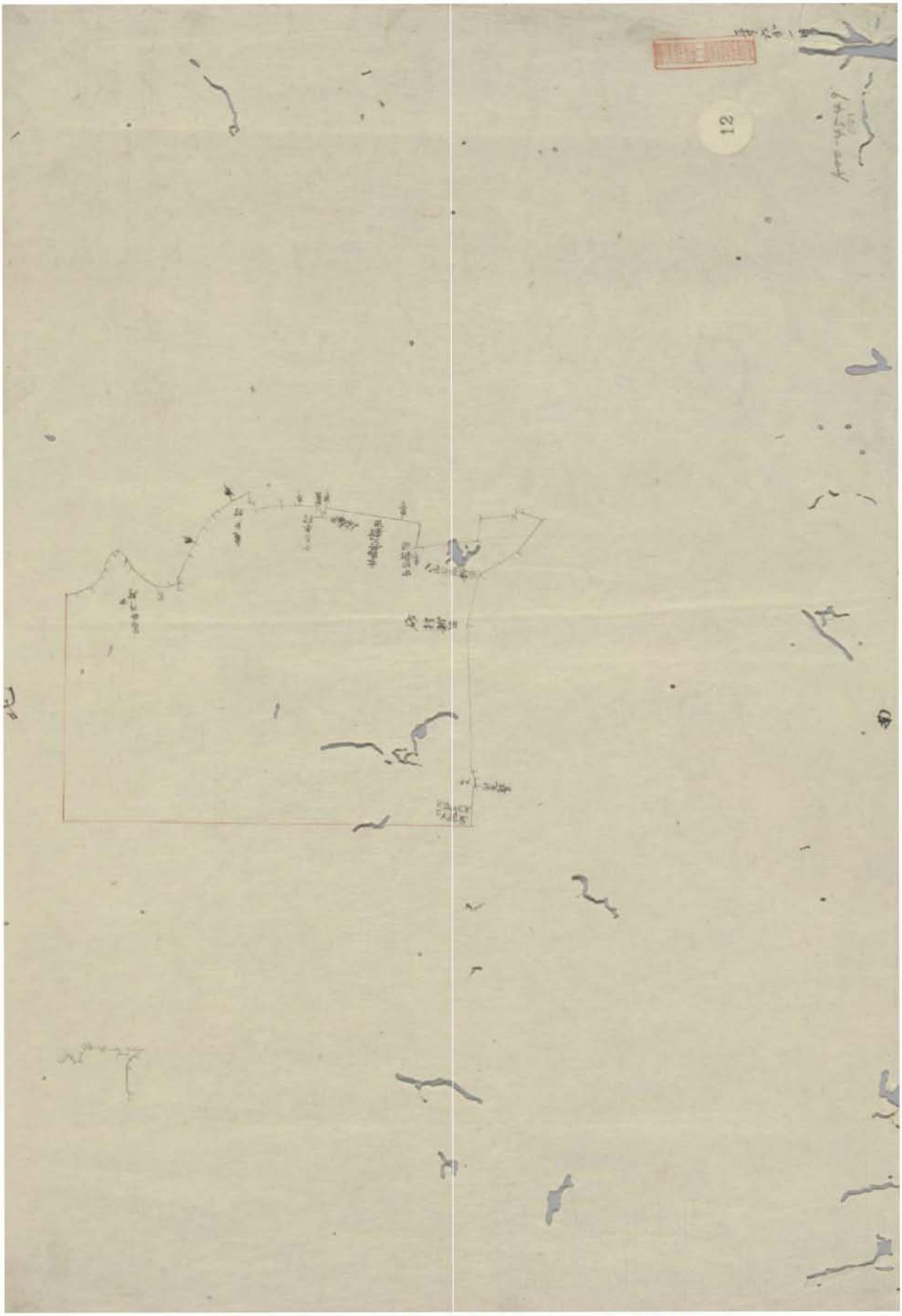


図３　測地原圖（大図）　整理番号 12「葛西川村，亀戸村，小名木川村等」
（東京大学総合図書館所蔵、東京大学学術資産等アーカイブズポータルから引用）

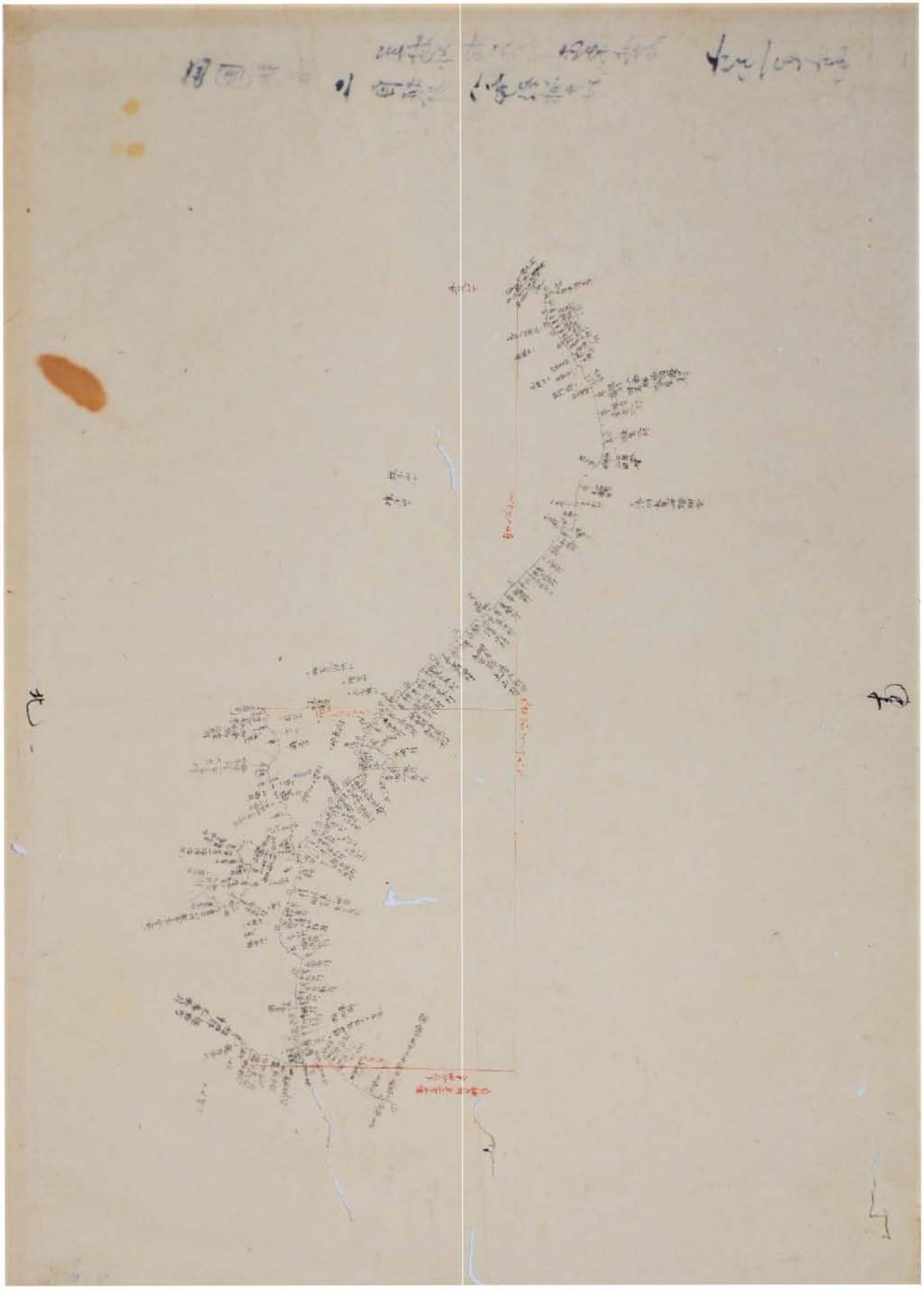


図４　伊能忠敬實測原圖（中図）　整理番号　中図３　「西国街道二」
（公益財団法人三康文化研究所附属三康図書館所蔵、菱山剛秀撮影）

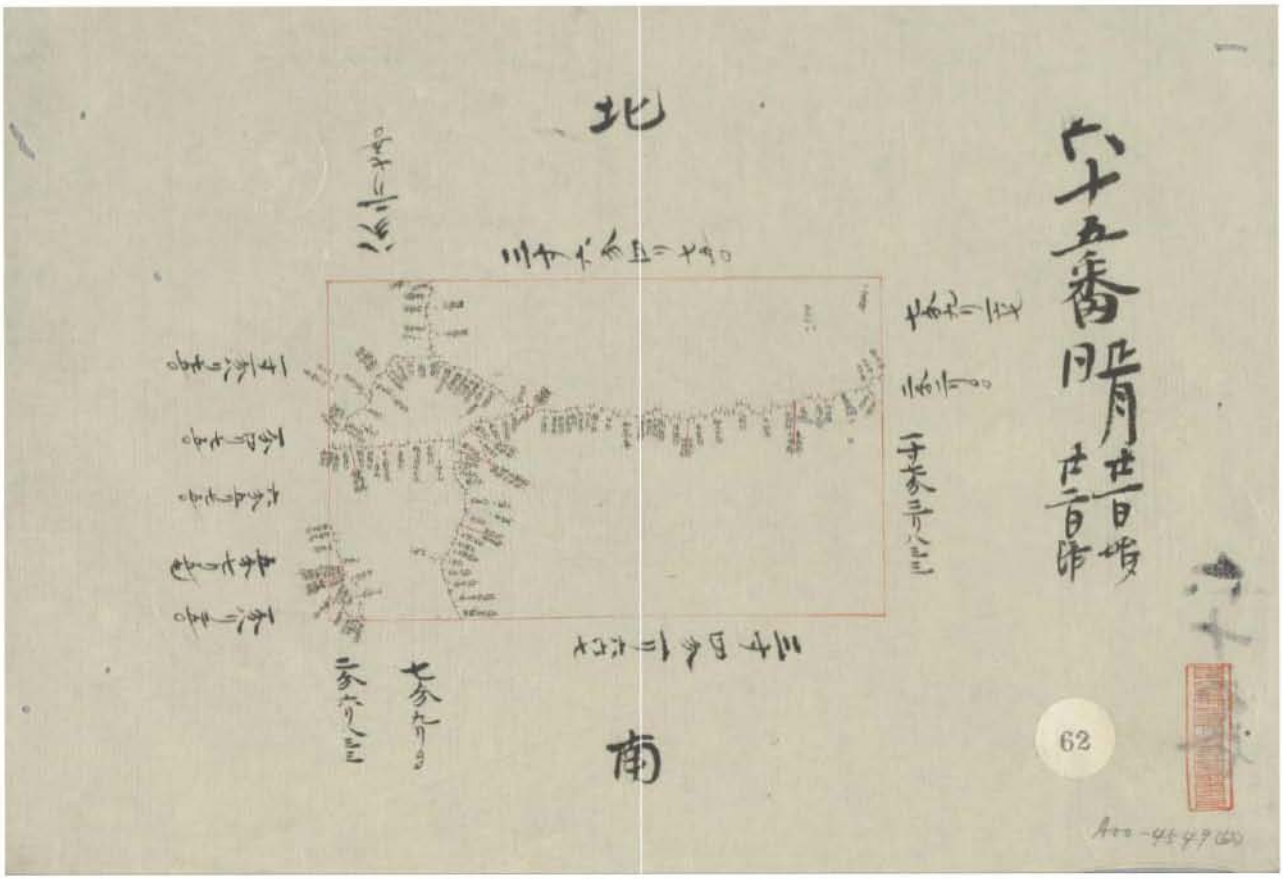


図５　測地原圖（小図）　整理番号 62　「六十五番」　（大図 114 番「犬山」の範囲に相当）
（東京大学総合図書館所蔵、東京大学学術資産等アーカイブズポータルから引用）

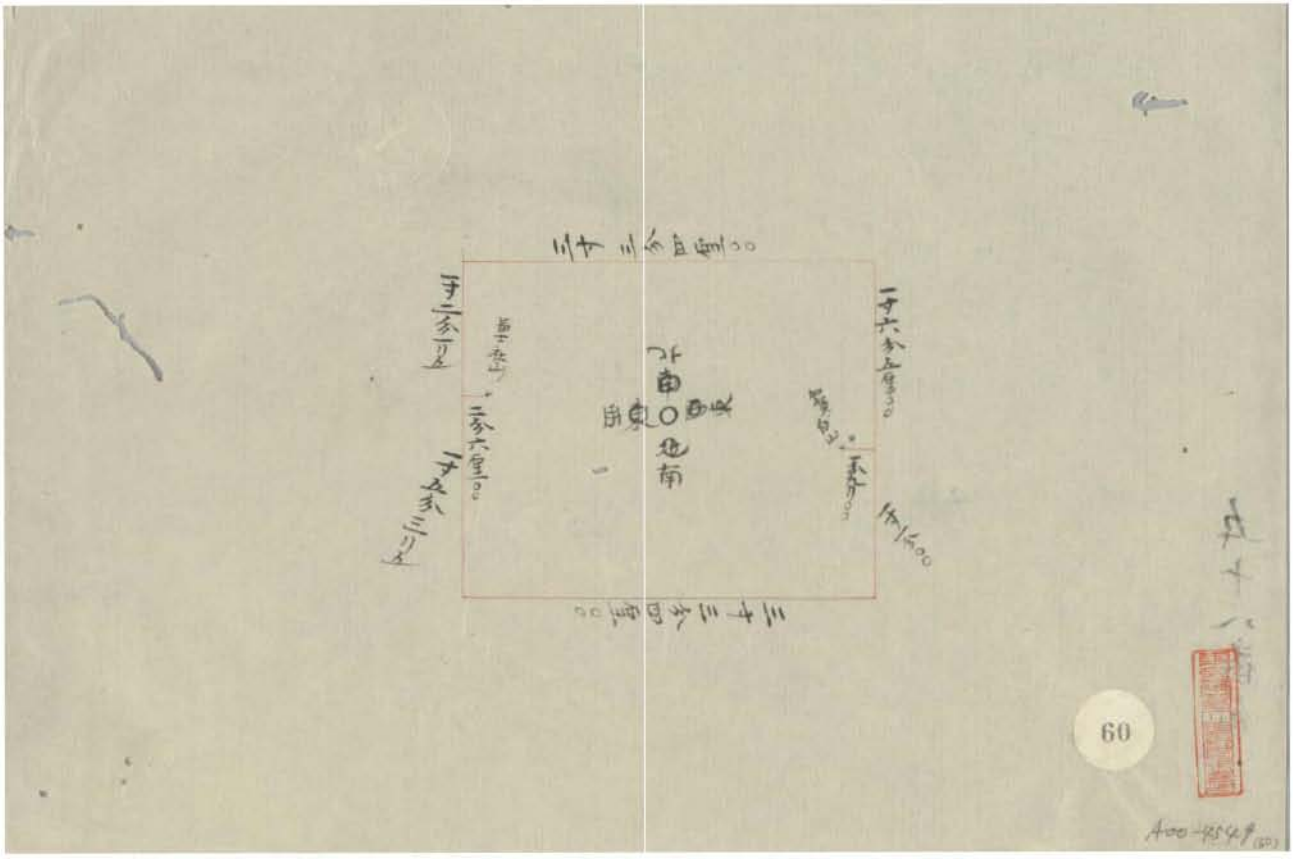


図６　測地原圖（小図）　整理番号 60　「五十八番属」　（大図 119 番「白山」の範囲に相当）
（東京大学総合図書館所蔵、東京大学学術資産等アーカイブズポータルから引用）

江戸府内第一次測量の記録（七）

― 文化十二年二月十一日の『日記』―

玉造　功

十一日の測量は日本橋から永代橋を渡り深川の黒江町までの測量である。この日の『日記』の記述で特異なのは、途中亀島町の地図御用所で「象限儀柱に繋ぐ」、終着地点の黒江町の忠敬旧宅で「象限儀旧跡に繋ぎ畢る」と記していることである。黒江町は寛政七（１７９５）年に江戸に出てきてからの、亀島町は文化十一（１８１４）年に第二次九州測量から帰着してからの忠敬の住まいであり、地図御用の作業場であり、天体観測の場所であった。この日の測線は天体観測を行った二地点、それも象限儀を支える柱に繋ぎ、伊能図に位置づけるものであった。

図１『大日本沿海輿地全図』第 90 図に加筆

二月十一日　曇天風烈

日本橋前　通り一町目　當月三日残　㋑印始め　右ばかり　萬町　左側　元四日市町　左右　萬町

横町　左右　側萬町　青物町　青物町　本材木町一町目　左右　横町一丁目　横町という　海賊橋　渡長二十五間　坂本町一町目

右に　辻番（左牧野豊前守屋鋪　右横町　坂本町　川岸通り　又右横町）　左　鐙之渡場　表茅場町（又南茅場町ともいう）　左　河岸端　右

・**日本橋前**…図２の日本橋南詰の㋑印から測量は始まった。㋑印は測量初日の二月三日に通一町目の終わりに残したものである。江戸府内測量では各町の出入り口に設置された木戸に測線を繋ぐことが多い。図３の左上の通一町目の出入り口には立派な木戸と火の見櫓をのせた自身番屋が設けられている。木戸の左右のどちらの柱が㋑印であろうか。

・**右ばかり萬町、左側元四日市町**…図４は伊能忠敬記念館所蔵の国宝：地図絵図類４６２『自通一丁目至黒江町・自大番町至麹町一町目下図』（以下『下図４６２』と略す）の一部であ

図２『江戸実測図（南）』に加筆

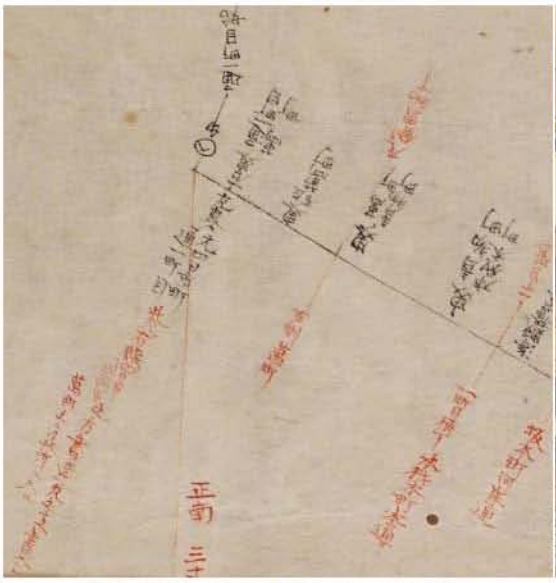


図４　下図462　日本橋〇印～海賊橋

図３　日本橋南詰（広重『東都名所　日本橋真景并ニ魚市全図』）

る。この下図は縮尺六千分の一で、５９・２×６４・８cmという用紙の上部に二月六日の測量結果の下図を描いている。その日に測量した分だけを地図化した小区域下図であり、寄図以降では訂正されてしまう誤記や測線の修正も目立つ。伊能図作成の最初の段階であるだけに、下図の中でも最も情報量が多く興味深いものである。

図４の下図ではいきなり左右の町名を誤記している。通一町目の〇印から始めて、進行方向右側に「左界〔通一町目・元四日市町〕」、左側に「右界〔通一町目・萬町〕」と墨書してしまったので、朱書きで「此左右誤〔四日市ニ通一町目〕之方書違、左之方へ書ベシ、萬町之方此所へ入ル」と修正した。

・**海賊橋**　…　橋の名前は『御府内備考』によると、昔は海賊を取り締まる幕府の船手頭の向井将監の屋敷があったことによる。

・**鎧之渡場**　…　奥川筋船積問屋や米問屋を始め諸問屋が集積する小網町と南茅場町を結ぶ渡船で、日本橋川という江戸湊の舟運の要路を横切るものであった。南茅場町の渡場は丹後田辺藩牧野豊前守以成の上屋敷の東隣（図５の左端）に、小網町側の渡場は図６の林立する白壁の土蔵のうち〇印と井桁印の土蔵の間に描かれている。その手前を八丁櫓の船が先を急いでいる。

名前の由来について、『御府内備考』では源頼義が奥州下向の際、風波が激しかったので鎧を沈めて竜神に祈って渡ることが出来たという里談を紹介しながら、このような説はよくあることであり「いかんともいふべきなし」としている。

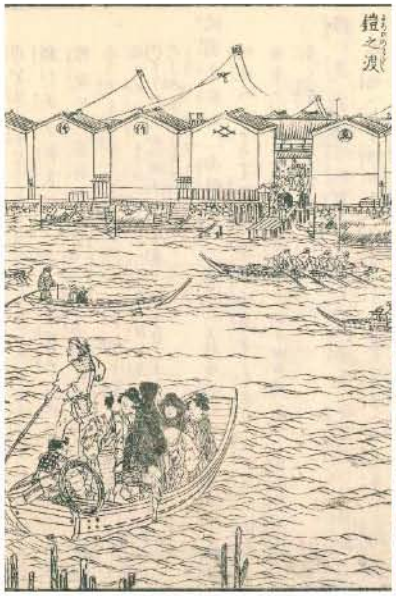


図６　小網町側を望む
（『江戸名所図会』鎧之渡）

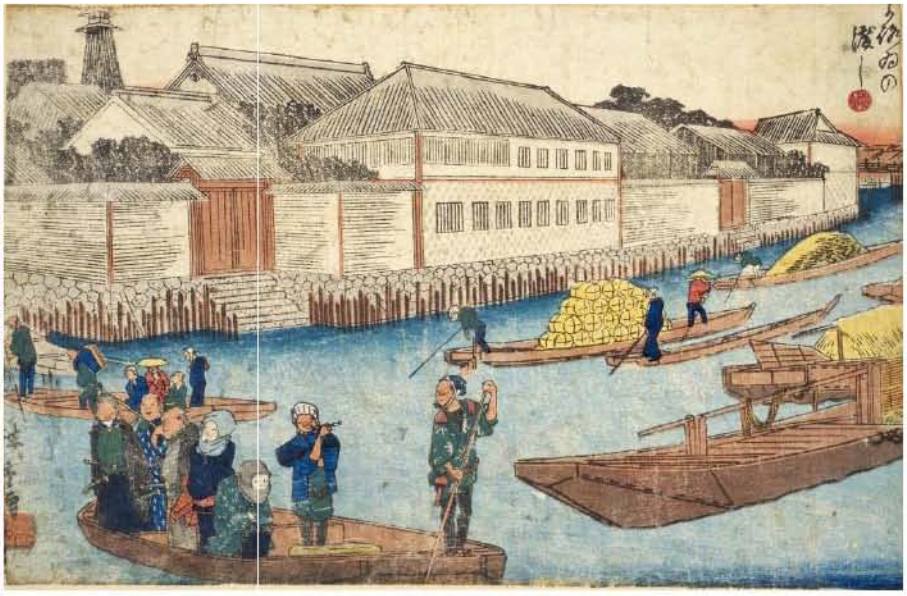


図５　茅場町側の丹後田辺藩上屋敷を望む（広重『江都勝景　よろゐの渡し』）

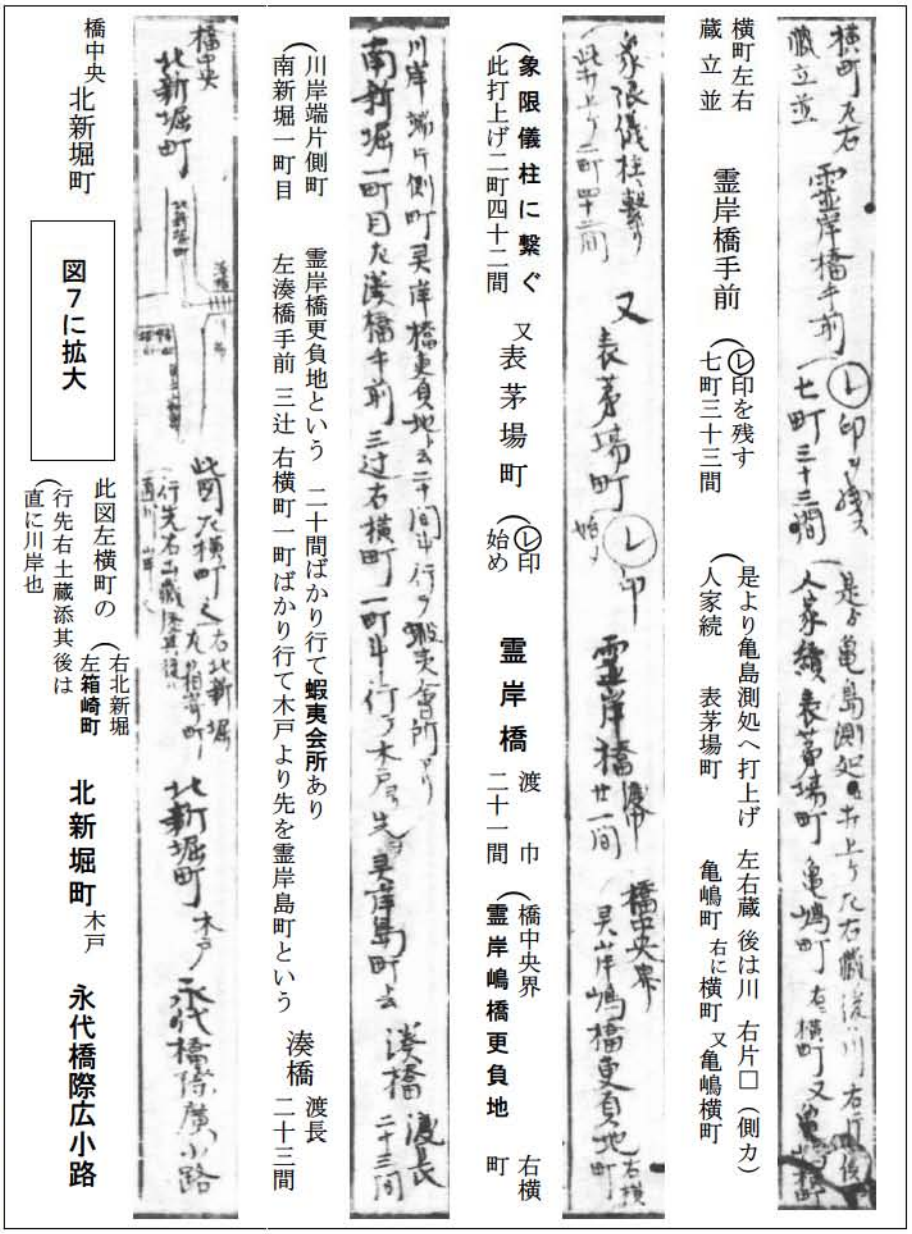


図7に拡大

図7『日記』拡大

図8のように南茅場町を進んだ測量隊は霊岸橋の手前にⓁ印を残して右折し、八丁堀の亀島川沿いの蔵地と町家の間を進み、途中で横町に入って亀嶋町測処の前で測線は終わっている。

測量隊はⓁ印に戻りそこから、霊岸橋を渡って霊厳島へ進み、湊橋を渡り右折して箱崎の北新堀町に入り、永代橋へと向かった。

・**象限儀柱に繋ぐ** … 図8では測線は八丁堀亀島の地図御用所前の道路上で終わっているが、『日記』では「象限儀柱に繋ぐ」と記され、図9でも測線は横町からさらに屋敷内にまで延び

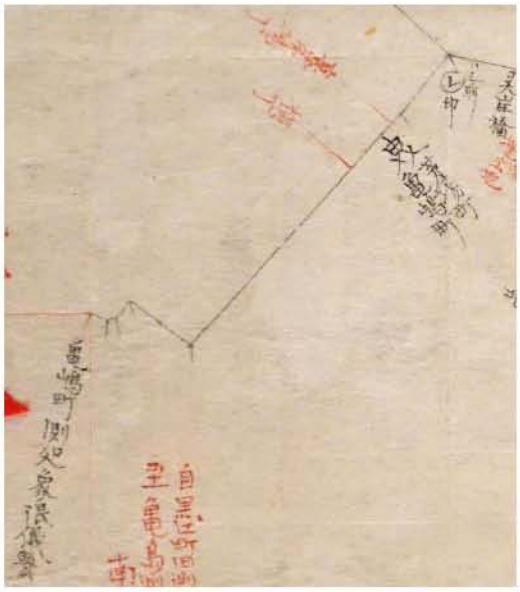


図9 下図462 亀島町測処

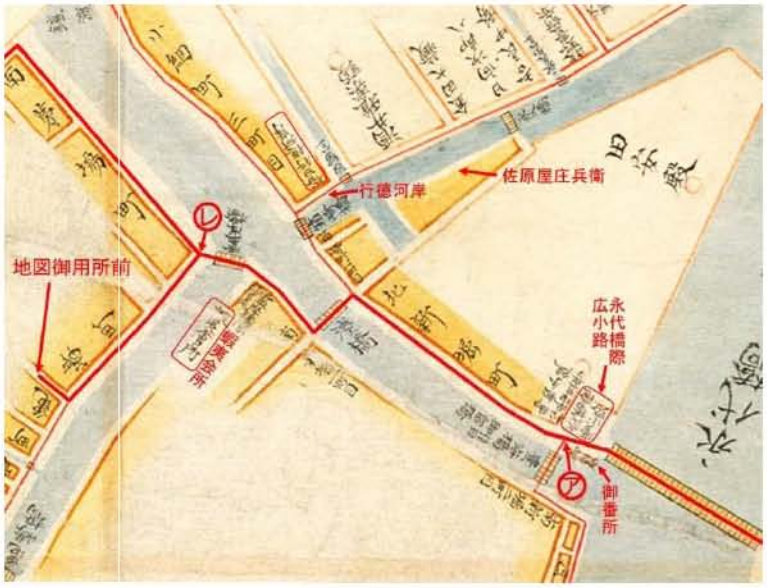


図8『江戸実測図（南）』に加筆

ている。屋敷内の二箇所で方向を変えたその先端が象限儀の柱の位置であろう。

・**霊岸橋**…霊巌上人が創建した霊巌寺（明暦の大火後に深川に移転）に由来するが、「霊巌」「霊岸」「霊岩」が混用される。

・**霊岸嶋橋更負地**…『御府内備考』に「箱崎より霊巌島辺の町名」として記載されている「霊岸橋際請負地」のことか。

・**蝦夷会所**…寛政十一年に東蝦夷地が幕府の直轄地となるにともない、江戸にも会所を設け、御用取扱の町人である栖原屋角兵衛、田中屋伊助らが蝦夷地の産物の売却や蝦夷地への仕入を取り扱い、また江戸の蝦夷掛りの役人の詰所とした。最初は伊勢町の商家の蔵を借り、後に霊巌橋際を埋め立てた土地に会所を建てた。

　忠敬は第一次測量をめぐりこの蝦夷会所に呼び出され、幕府の蝦夷掛りの御徒目付の細見権十郎等と折衝したこともあった。

・**箱崎町**…箱崎町二町目の佐原屋庄兵衛は佐原河岸を取引相手とする奥川筋船積問屋で、佐原との船荷や飛脚便の窓口であった。

・**北新堀町**…箱崎と霊巌島の間に埋め残された水路が新堀川で日本橋川の最下流部にあたる。その北岸の北新堀町は播州赤穂などからの下り塩を扱う問屋や仲買が多い地域であった。「右土蔵添其後は直に川岸也」と記されているように川添いに土蔵が建ち並びその後は船着き場となっていた。

・**永代橋際広小路**…橋を火事の延焼から守るための火除明地として設置された。撤去の可能な床店や葭簀張の小屋が密集する盛り場となった。

　下の図10を見ると、二月十一日の測量結果の下図を日本橋側から作図していく中で、湊橋を渡ってから右折する測線の角度を三十度間違えて引いてしまった。そのまま永代橋から深川へ入り、ゴールである黒江町の「伊能勘解由旧宅象限儀」まで測線を延ばし続けてしまった。作図が終わった段階で間違いに気づき、測線上に○を書き加えて取り消している。さらに修正した測線を朱で記入して、最後に「朱引ヲ用」と記している。

　深川黒江町測処と八丁堀亀島測処の東西方向を示す朱線が正誤二本引かれ、図上の寸法「正」の字を付して記されている。

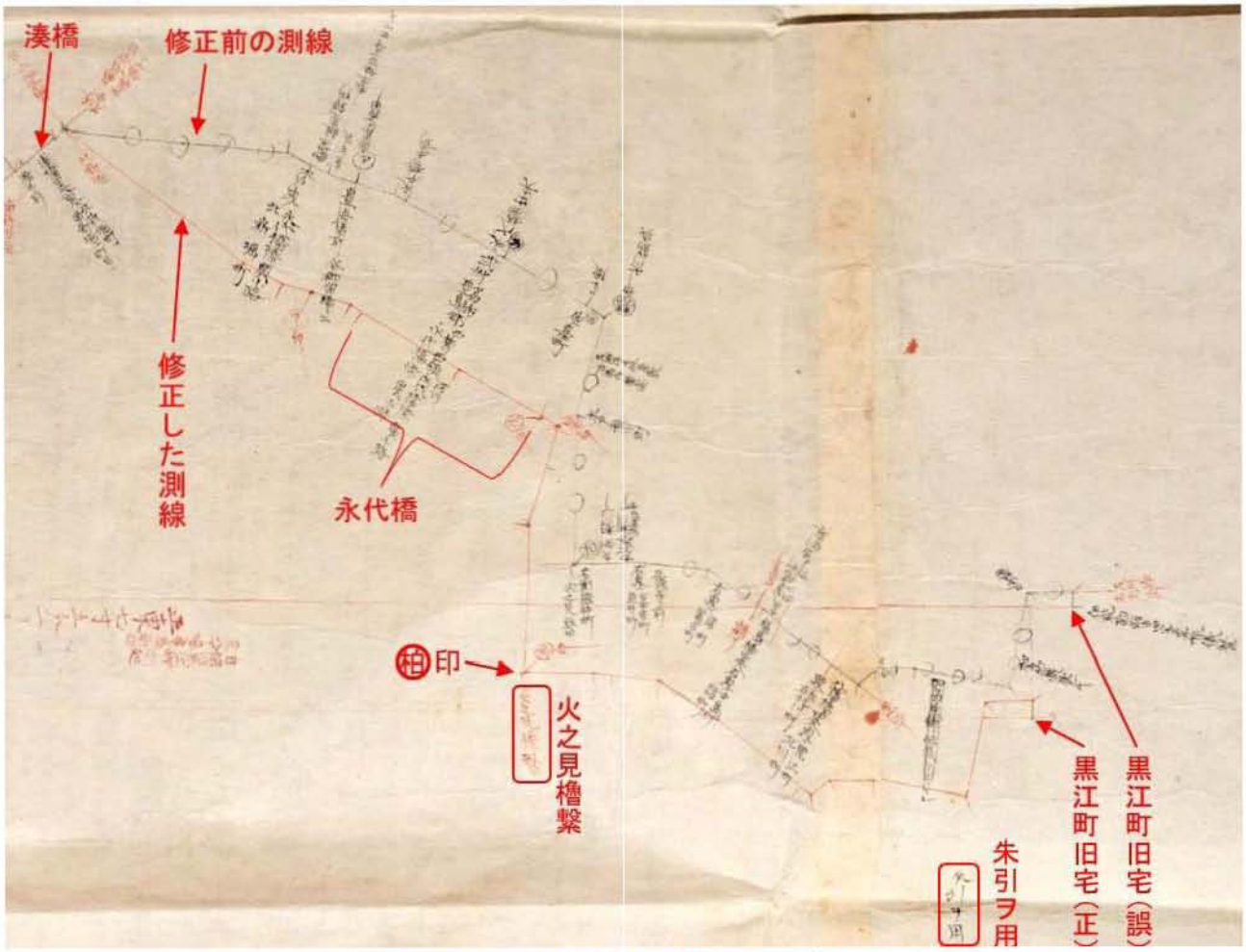
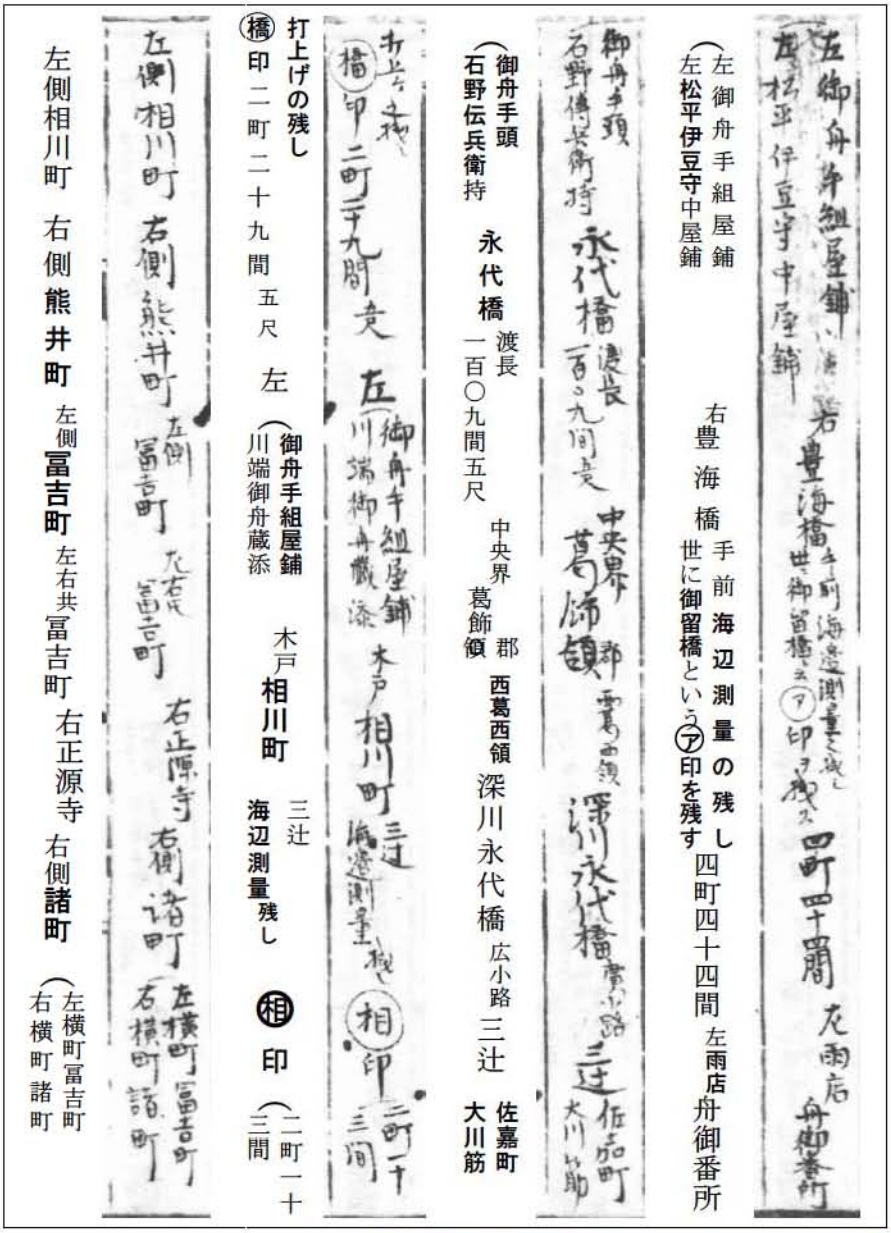


図10 下図 湊橋・永代橋・深川黒江町旧宅



測量隊は永代橋を渡って深川に入り、黒江町旧宅へと向かった。深川の名前の由来について『御府内備考』は次のように記している。深川は海辺で一面の萱野であったが、摂津出身の深川八郎右衛門らが開発に当たっていた。徳川家康が鷹狩りに来たときに八郎右衛門に地名を尋ねたところ、萱野ばかりで村里も離れているので地名も無いと答えた。そこで家康は「その方苗字を以て、深川と名付け、新田開発致すべき旨」命じたという。

- **松平伊豆守** … 松平伊豆守信明は三河吉田藩の藩主で時の老中首座。
- **「海辺測量の残し」** … **㋐印を残す** … 二月十七日の測量で、船松町から海岸線を北上し、豊海橋を渡り㋐印に測線を繋いだ。
- **御留橋** … 豊海橋は乙女橋や女橋とも呼ばれたことから「御留」と誤記したか。
- **雨店** … 里俗の呼称と思われるが不詳。
- **御舟手頭石野伝兵衛** … 幕府の用船を管理する御舟手組は五組あり、武鑑によると石野伝兵衛は文化八年から文化十二年三月まで御舟手頭を勤めた。その船見番所は永代橋際、組屋敷は新堀川口であった。
- **永代橋** … 永代橋は隅田川の四番目の橋として河口にかけられた。図12の右奥は佃島で、その手前に帆を降ろした大型の弁財船が停泊している。『江戸名所図会』の本文には、ここは諸国の廻船が輻輳する重要な港で、橋上は至って高い。そのため、「東南は蒼海にして房総の翠巒（緑の山々）斜めに開け、芙蓉（富士）の白峰は大城の西に峙ち、筑波の遠嶺は墨水（隅田川）に臨んで朦朧たり。台嶺（寛永寺）金龍（浅草寺）の宝閣は緑樹の蔭に見えかくれて、自ずから丹青を施すに似て、風光さながら画中にあるがごとし。」と記している。

文化四年（１８０７）八月十九日に深川富岡八幡の祭礼見物の人波で永代橋が落下し、多く

図11 『江戸実測図（南）』に加筆

の死者が出る惨事となった。これは忠敬の『江戸日記』にも「往来過分に付、永代橋崩れて大勢のもの横死に及べり」と記されている。

図12 広重『東都名所 永代橋全図』

図13 『夢の浮橋附録』

白酒で有名な酒屋の豊島屋十右衛門の実見録『夢の浮橋附録』に富岡八幡の祭列や永代橋危難の図と共に、翌年再建された永代橋の渡り初めの図がある。図13の先頭を歩く杖をついた二人のあとに裃姿の人物以下が続いている。上の文には「ふたゝたびあらたに　かけかはりて　文化五年辰十一月廿八日　わたりそめせし人は　神田富松町庄右衛門店　長兵衛百六歳　妻はつ　八十三歳　夫婦ともに至て　すこやかに在しとぞ」とある。

・**葛飾郡西葛西領**…武蔵国では郡と村の間に、ときには郡をまたいで○○「領」という地域区分を用いることがある。『新編武蔵風土記稿』では葛飾郡については二百九十ヶ村を六領に分けている。西葛西領は六十九ヶ村からなる。

・**佐嘉町、相川町、熊井町、冨吉町、諸町**…佐嘉町は佐賀町のこと。『御府内備考』によると何れも寛永六年（1629）深川猟師町として起立した。この場合の「猟師」は「漁師」のことで、八人の者が潮除け堤外の干潟を築立て開発して漁師の居住地とし、八つの町が生まれた。その総名を深川猟師町といい、一ヶ月に三度、キス、フッコ、セイゴ等を将軍に献上した。後には富岡八幡の門前町、仙台藩や加賀藩の蔵屋敷が立地する蔵の町へと変貌した。

・**大川筋打上げの残し㊒印**…翌二月十二日の測量は㊒印から始め、隅田川から立川筋を中川まで測量している。

・**御舟手組屋敷**…舟手組五組の内、御舟手頭松浦忠右衛門の組屋敷。

・**海辺測量残し㊐印**…二月十九日の測量は㊐印から始め、深川の海辺を洲崎弁天まで測量した。なお、図10には㊐印のところに「火之見櫓繋」と記されているが、この相川町と熊井町の境界に設けられた火の見櫓が図12の左上に描かれているので図14に拡大してみた。

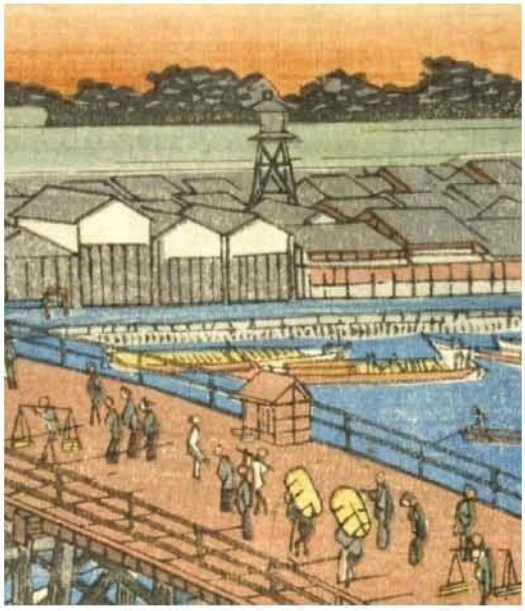
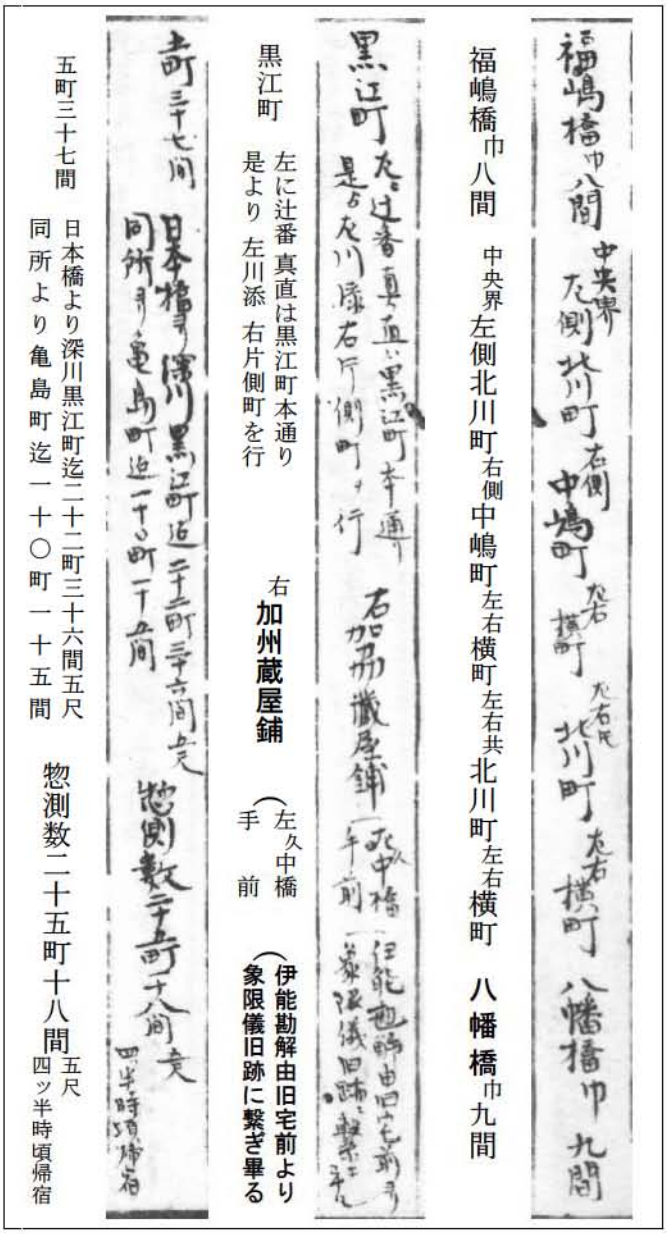


図14 広重『東都名所 永代橋全図』



測量隊は福嶋橋と八幡橋を渡り深川猟師町の一つ黒江町に入った。真っ直ぐ黒江町本通りを進むと、忠敬が必ず参拝してから全国測量に出発した富岡八幡宮へと向かう。この日の測量隊は八幡橋を渡ると左折して黒江川添いに進み、加賀藩屋敷から久中橋手前で右折して忠敬旧宅まで測量した。この日の測量は距離が前日の半分以下と短いので昼前には終了した。

黒江町は深川猟師町の一つであるが、開発が進むにつれ、堀割の開削や代地の支給によって、道路や堀割で複数箇所に分かれ、図15では六箇所に黒江町と記されている。

・**八幡橋** … 永代橋の方から富岡八幡宮に向かう入口にあたることからその名が付いた。橋の長さが七間、幅は二間あった。図15には黒江町と永代寺門前仲町の境に富岡八幡宮の一の鳥居が描かれている。

・**加州蔵屋鋪** … 図15には「加賀中将○」と記されている。この図の記号では「○」は幕府から拝領した中屋敷・下屋敷か購入した抱屋敷である。黒江町の加賀藩の施設は『日記』に「加州蔵屋鋪」とあるように、江戸で消費・販売する米などを収納する加賀藩の蔵屋敷であった。黒江町が幕府に提出した『町方書上』によると間口が十七間余で四百三十一坪の広さがあり、町並御年貢地として年貢を負担する抱屋敷であった。

・**象限儀旧跡** … 図15では旧宅前の路上で測線が終わっているが、図16の下図では道路からさらに旧宅の中へと測線が延びている。

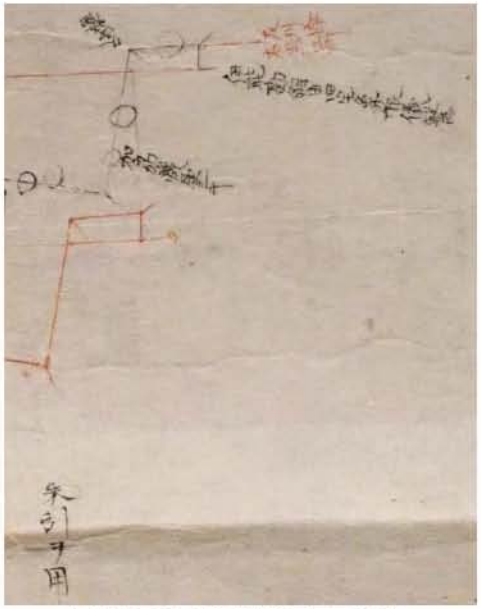


図16 下図462 深川黒江町旧宅

図15 『江戸実測図（南）』に加筆

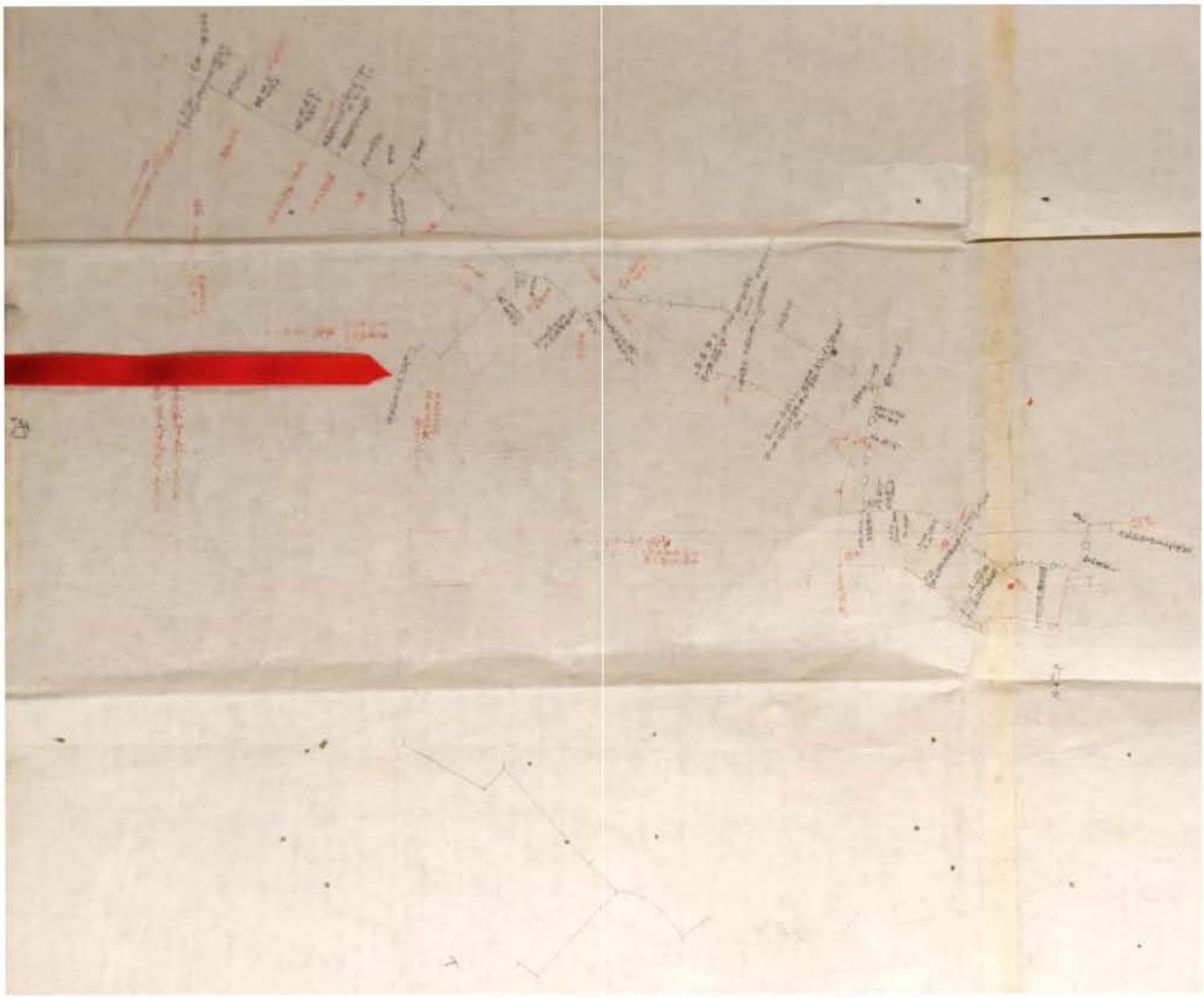


図17　下図462のうち『自通一丁目至黒江町』の全体

【図版の出典】

・『日記』の図版は伊能忠敬記念館に架蔵されている写真帳による。無断流用禁止。

・図4、9、10、16、17は伊能忠敬記念館所蔵の国宝の地図絵図類462『自通一丁目至黒江町・自大番町至麹町一町目下図』の一部に加筆したものである。無断流用禁止。

・『江戸実測図（南）』は国土地理院ウェブサイトの古地図コレクションによる。

・図1、3、5、6、12、13、14は国会図書館デジタルコレクションによる。

【参考史料】

・『町方書上』　国会図書館

・『御府内備考』　国会図書館

・『新編武蔵風土記稿』　国立公文書館

・『江戸名所図会』　国会図書館

・『休明光記』函館市中央図書館デジタル資料館

・『夢の浮橋附録』　国会図書館

【参考文献】

・『江戸・町づくし稿下巻』岸井良衛　青蛙房

・『江戸名所図会を読む』川田壽　東京堂出版

・『新撰北海道史　第5巻』　北海道庁

・『深川区史』上下　深川区史編纂会

・「東蝦夷地の会所」堀江敏夫（『会報』第38号）

・「江東区域の加賀藩前田家屋敷」

『下町文化』269号

・「文化四年　永代橋落ちる（一）（二）」

『下町文化』295号、298号

深川黒江町から八丁堀亀島へ

玉造　功

一　黒江町隠宅

隠居した伊能忠敬が江戸深川黒江町に居を構えたのは寛政七年(1795)五十歳の時であった。文化元年（１８０４）九月十日に幕臣に登用されたことにより、黒江町の隠宅には内弟子に加えて浅草暦局の天文方下役も地図仕立てに従事することになった。その結果、文化四年（１８０７）五月六日付の忠敬書状(注1)には第五次測量結果を地図に仕立てるために「先月より二階ニて八七人、下座敷ニて八高橋善助、下河辺政五郎大盤ニて日々地図ヲ仕立申候間、日々混雑」とあり、かなり手狭になってきたようである。

もう一つ課題となるのが、幕臣となったがゆえの居住地規制である。江戸は武家地、寺社地、町人地に分けての身分別の居住を前提としており、身分の低い御家人であっても、町人地に居住することは原則的に禁じられていた。

忠敬の『江戸日記』の文化五年（１８０８）一月十九日によると、小普請組支配の根来喜内あてに第六次四国測量の出立届と共に先祖書と明細書を提出している。明細書に「当分深川黒江町名主斉藤助之丞地面借地」と記載している。古文書用語辞典によると「当分」とは「今は、一時的に、臨時に」というニュアンスであり、武家地への転居を前提とした表現である。明細書のように黒江町隠宅は黒江町の町名主の斉藤助之丞から借地したものであったが、地代については「深川宅地代之儀も、年二金壱両増ニて、金四両ニ相成候よし、致方も無之候」と文化十年（１８１３）三月五日付の忠敬書状(注2)にあり、地代が年三両から四両に引き上げられたことがわかる。

二　転居先が見つからない

記録として残っている範囲では、文化七年（１８１０）十二月に高橋作左衛門（景保）が提出した願書(図1)が最初の武家地への転居への動きである。それによると、「去々辰年」（文化五年）には、黒江町の家作を浅草測量所内の空き地に移築し、その経費の半金を下賜されたいと願ったが許されなかった。そこで「昨巳年」（文化六年）と当年（文化七年）の六月には移築経費の半金三十両の無利子借用を願ったが、これも却下された。そこで今回は、測量所内に他の下役と同様な役宅の新築を願い出た。地図仕立てのための十畳敷一間を増やすように要望している。

以上の願書の内容を九州小倉城下で知られた忠敬は、景保宛ての返信(注3)で、ほかの下役並みの台所共六畳二間、八畳二間に加えて十畳一間分を増やして頂いたのは有りがたいが、それでも内弟子の部屋を考えると、深川黒江町での地図仕立よりも少し狭いので、部屋をさらに追加してほしいと要望している。

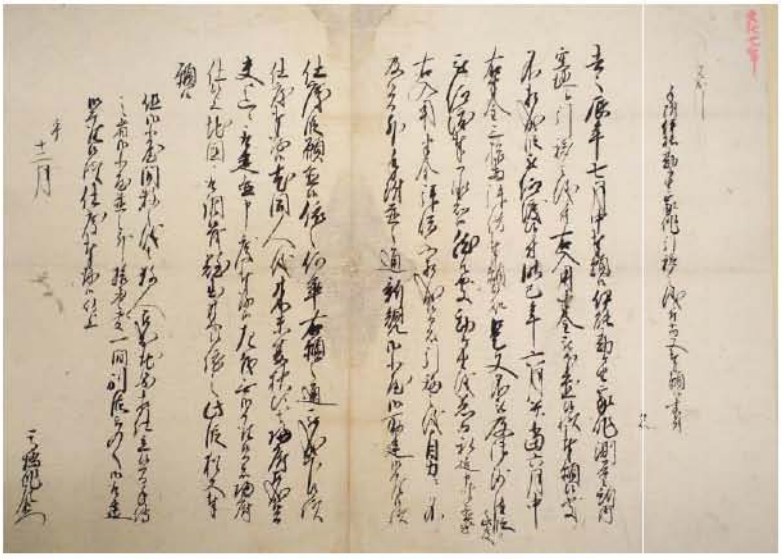


図１「手附伊能勘ケ由家作引移之儀ニ付尚又奉願候書付」
伊能忠敬記念館所蔵　国宝：文書記録類 316　無断流用禁止

【図１の書き下し文】

見出し

手附伊能勘ヶ由家作引き移しの儀につき、なおまた願い奉り候書付

名

去々辰年七月中願い奉り候、伊能勘ケ由家作、測量所内空地へ引き移しの儀につき、右入用、半金下し置かれ候様願い奉り候処、相成らざる段仰せ渡され候につき、昨巳年六月並びに当六月中、右半金三十両拝借願い奉り候処、これまた御沙汰に及ばざる段、このたび仰せわたされ、承知奉り候。しかるところ、勘ケ由儀、兼ねて私まで申し聞き置き候趣、右入用半金拝借相成らず候ては引き移しの儀、自力に及ばず候間、ほか手附並みの通り、新規御小屋御取り建て御座候様仕りたき段願い置き候。これにより何卒右願いの通り成し下され候様仕りたく存じ奉り候。もっとも、同人儀、来る未（ひつじ）夏秋頃は帰府なされ候間、それまでに取り建て置き申したく存じ奉り候。左も御座無く候ては帰府仕り候上、地図取り調えも出来難く候。これにより此の段なおまた願い奉り候。

但し御小屋間数の儀は数人罷り出で、地図相仕立て候間、手伝の者御小屋並の外、十畳敷一間、別段多く御取り建て御座候様仕りたく存じ奉り候。以上

午
十二月

高橋作左衛門

ところが幕臣は禄高、禄の支給形態、相続形態、着服の区別(注4)、拝領屋敷の面積等様々な序列が設けられていた。浅草測量所内の役宅についても「ほか手附並みの通り」の部屋数のままでは地図仕立には狭いが、地図仕立に必要だからといって十畳一間を追加すれば「ほか手附並みの通り」ではなくなり、不相応なものになりかねない。このようなこともあり「新規御小屋御取り建て」も実現しなかったようである。

そこで浮上したのが、老朽化している黒江町隠宅を修繕して地図仕立を続けられるようにしておき、その一方で武家地に手頃な売家があれば買い取り、黒江町は売却するという考えである。文化八年（1811）閏二月二十三日の忠敬の書状(注5)では、親族の伊能七左衛門に対し、深川留守宅の屋根の葺き替えに始まり、「座敷床ノ脇ヲ押入ニ致し、雪隠ヲ坐敷縁より相回」すなどと、こと細かに修繕を依頼している。忠敬の書状(注6)によると、この修繕には三十五、六両かかっている。

一方、高橋景保は隠宅を修繕するくらいなら、測量所に全額自費で移築してはどうかと伊能七左衛門を通して佐原の伊能三郎右衛門家当主の伊能景敬に掛け合ってもらったところ、「金子入用之少キ方」が良いということで承知してもらえなかった(注7)。この景保の書状には「主たる三郎右衛門殿（景敬）」が承知の上でないと取り計らい出来ないとし、さらに「三郎右衛門殿金主に候」と記している。なお、自費での移築について忠敬は五、六十両かかると見積もっていた(注8)。

三　秀蔵が北町奉行所同心見習いとなる

移転先の候補として八丁堀亀島の地名が登場するのは第八次測量（九州二次測量）に向かう途中の文化九年（1812）一月中に送った三通の忠敬書状である。佐原に住む娘の妙薫と景敬の妻のリテにあてた一月二日付けの書状（注9）では深川黒江町の家作の売却や八丁堀亀島あたりで「下直なる売家」があれば買い取るように、桜井秀蔵と舅の桜井八十右衛門に頼んでおいたと伝えている。忠敬の庶子の秀蔵は前年に桜井家の婿養子となっていた。

同じ一月二日付けで秀蔵にあてた書状（注10）では出立前に御養父様と其許へも相談したように「御近所ニ相応ノ売家」があったら佐原表へ相談して世話をするようにと依頼している。

一月二十六日付けの秀蔵宛ての書状(注6)では、「御近所其外勝手向き宜候所」で売り家を買い整えてから、深川宅は売るようにと指示している。さらに、八丁堀亀島に住む桑原隆朝（養好、如則）からの「八町堀本材木町辺格好なる売地面、時ニより有之」という情報を伝えている。

これらの桜井秀蔵あての書状では「御近所」の売り家という表現がなされている。秀蔵が婿養子となった桜井八十右衛門は八丁堀に住む町奉行所の同心であり、「御近所」とは八丁堀を指している。

町奉行所が作成した与力同心の名簿『南北姓名帳』(注11）のうち『北組性名書』には、北町奉行所の四番組に所属する同心の中に桜井八十右衛門が記載されている。さらに、『北組性名書』の文化九年の四番組の同心名簿の最後に右の図2のように三人の見習の名前が記されており、その中に「四月廿三日ヨリ桜井秀蔵」とある。秀蔵は北町奉行所の同心の見習いになっていた。文化十年にも「見習　桜井秀蔵　勤二　二十六」とあるが、文化十一年には「見習　桜井秀蔵　〃(勤)三　二十七」と記載され、その上に「四月八日見習御免」と朱書されている。

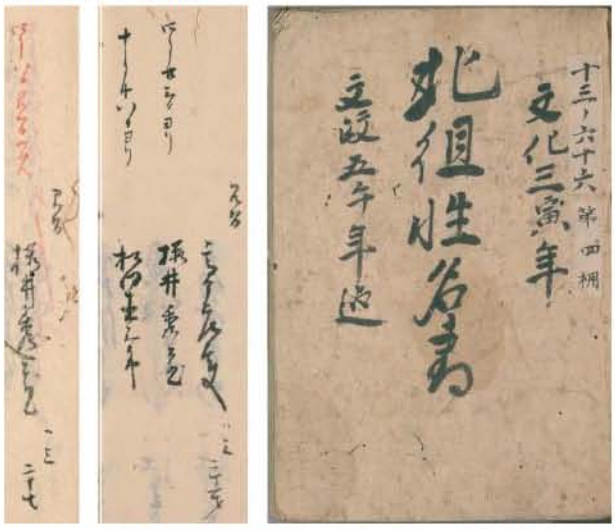


図2『北組性名書』から表紙、文化9年、文化11年部分

同年十一月二十八日の『江戸日記』に秀蔵が今日より自分の方へ引っ越すとあり、桜井家から離縁されていた。

四　八丁堀亀島への転居

第八次測量の後半になっても転居先は見つからなかった。そのため「格好なる売家これ無く候はば、矢張り深川旧宅にて、地図も仕立て申すべく候」(注12）と覚悟せざるを得なくなってきた。第八次測量からの帰路につくと、帰着の予定と深川黒江町隠宅の準備を指示する書状が続く。江戸帰着の一ヶ月足らず前に信州松本城下から出した書状（注13）でも「深川宅御待ち請けの御支度頼み

入り候」と記しており、亀島転居が決まったのは帰着する直前のことであった。

文化十一年（１８１４）五月二十二日に江戸に帰着すると、二十四日には「八丁堀亀島桑原隆朝明屋敷に参り一覧、家内普請手入れ等の差図」、六月三日には「深川より亀島へ引越す」と『江戸日記』に記しているように、八丁堀亀島への急な転居は桑原隆朝の屋敷が空いたことで実現した。桑原隆朝の転居先は、芝口の仙台藩上屋敷や愛宕下の中屋敷に至近の芝新銭座（注14）であった。

仙台藩では第八代、第九代の藩主が相次いで早逝し、文化九年（１８１２）に第十代藩主となった伊達斉宗も五年後に二十四才の若さで亡くなっている。これらのことが仙台藩医としての桑原隆朝が藩主の近くに転居した背景であろうか。

五　八丁堀亀島とは

八丁堀は基本的に町奉行所の与力や同心に組屋敷として一括して与えられた大縄拝領地で武家地である。八丁堀の与力は拝領した屋敷地の一部あるいは全部を儒者、医者などの武士の周縁的身分の者に貸して、自身は別の幕臣の屋敷地を借りて地代の差額を収入とすることが珍しくなかった。亀島町は亀島川に沿って米穀商が多いことで知られていたが、忠敬は町人地である亀島町に住んだわけではない。武家地である八丁堀のなかの亀島町に近接する場所に居を構えたのである。

八丁堀亀島の地図御用所は忠敬と嫡孫三治郎の生活の場でもある。小網町三町目の行徳河岸は行徳船の発着場所である。早朝に行徳船で小名木川を東に向かい行徳（市川市）で上陸。陸路、利根川河畔の木下に着く頃に日が暮れ、木下茶船に乗

図３『江戸切絵図　築地八丁堀日本橋南絵図』に加筆
国会図書館デジタルコレクション

ると翌朝には佐原河岸に着く。行徳河岸は妙薫や大川治兵衛を初めとして佐原と江戸を行き来する人々にとって交通の要衝であった。箱崎町二町目には奥川筋船積問屋の佐原屋庄兵衛が店を構え、米、味噌、薪から三治郎の素読に使う『春秋左氏伝』に至るまで様々な物資や書状を佐原から届けていた。八丁堀亀島のごく手近な場所に忠敬にとっての人、物資、情報の窓口が立地していた。

六　所有者・敷地・地代

三代目桑原隆朝如則の屋敷は藤田熊太郎が拝領した屋敷地にあった。藤田熊太郎は北町奉行所の一番組に属する高百八十石の与力である。『北組性名書』によると文化十一年（１８１４）一月に藤田六郎右衛門から十五才の熊太郎に代替わりし、後に熊太郎は助十郎、さらに介十郎と改名している。天保三年（１８３２）には介十郎から岩五郎へと代替わりした。町奉行所関係者や町名主などを記載した『江戸町鑑』の嘉永七年（１８５４）版（注15）を見ると更に藤田六郎右衛門に代替わりがあったようである。そのため文久二年（１８６２）版の『八町堀細見絵図』（注16）には藤田六郎右衛門と記載されている。

転居にともなう手続きについては文化十一年（１８１４）五月二十九日の『江戸日記』に記事がある。小普請組組頭の渋江新之助と面談した結果、八丁堀亀島桑原隆朝跡借地の件については「五十坪借り受け候方然るべき旨に付」地主の藤田熊太郎に伝えた。但し「実は百五十坪程の借地に候得共、最初より多く申立候も如何に付、表向計五十坪の積り也」と附記している。渋江新之助のアドバイスもあり、表向きは幕臣としての序列に従って少なめに届けを出すことにしたようである。そのためか、六月十四日に借地替願を提出すると、十五日には小普請組支配の松平石見守が承認し、忠敬は請書を提出して一件落着となった。

地代については文化十一年七月三十日の『江戸日記』に、地主の藤田へ当月分の地代として金一両を遣したという記事がある。黒江町の地代が年間二両（三両に値上げ）に対し亀島は年間十二両と随分と開きがある。なお、文政五年十月一日の『忠誨日記』に「此度伯母死去ニ付、桑原御屋敷ノ御思召ハ、早々引払候様ニトノ事」とあり、桑原隆朝から退去を求められていることから、家屋についても買い取った訳ではなく借家であったことがわかる。

七　『文化五年七月竹嶋町外絵図』

国会図書館所蔵の旧幕府引継書『文化五年七月竹嶋町外絵図』(以下『竹嶋町外絵図』と略す)は、八丁堀の各与力・同心の名前に加えて敷地の面積、間口、奥行を記しており(注17)、国会図書館デジタルコレクションで閲覧できる。この絵図は作成時期と作成事情が明記され、八丁堀に関する各種地図のなかで、忠敬の八丁堀亀島時代に近い時期に作成されたものとして貴重である。

この絵図を作成した事情については、町奉行所の同心に与えられた拝領町屋敷の家作と道幅等について調査するように指示され、併せて与力の拝領屋敷についても普請奉行所からの文書に記載された間数、坪数などと突き合わせた上で「両御組屋敷惣絵図」をつくり、今日、文化五年七月六日に南北両町奉行に提出したと記している。

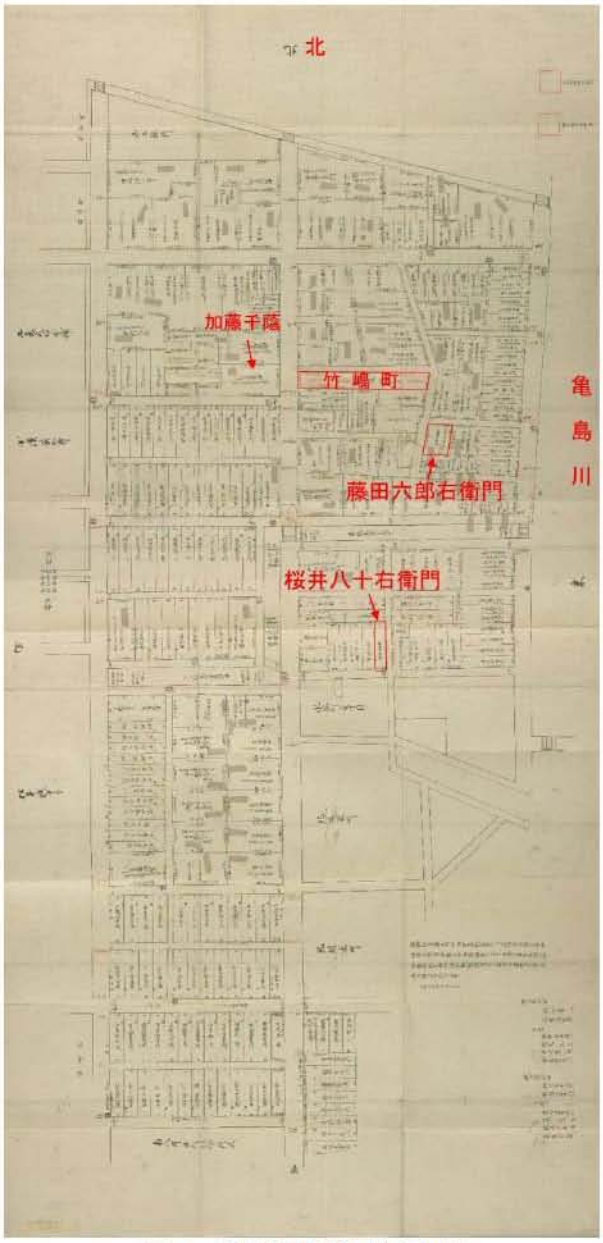


図４　『竹嶋町外絵図』に加筆

この絵図の資料名となっている「竹嶋町」は、『御府内沿革図書』(注18)によると元禄十五年にこの一角だけが武家地から町人地とされた。この絵図の頃には江戸城中で案内や給仕を職務とする御坊主二名の拝領町屋敷であった。竹嶋町西側には加藤又左衛門(千蔭)が住んでいた。彼は北町奉行所与力にして、賀茂真淵門下の国学者、歌人、書家として知られ、忠敬の長女稲(剃髪して妙薫)の師でもあった(注19)。

図５は藤田六郎右衛門の屋敷周辺を拡大したものである。藤田の屋敷についての記載内容は、坪数百九十七坪二合六夕三才余、敷地北側の道路側は十一間一尺三寸、西側の道路側は十六間二尺六寸、東側の金子源左衛門との境界は十六間四尺六寸、南側は付箋のため十二間三尺までしか確認できない。藤田は百九十七坪余の敷地の内の百五十坪余りを桑原隆朝、次いで忠敬に貸したことになる。町奉行所の与力は平均して三百坪を拝領したので、藤田家は他に足地があったのであろう。

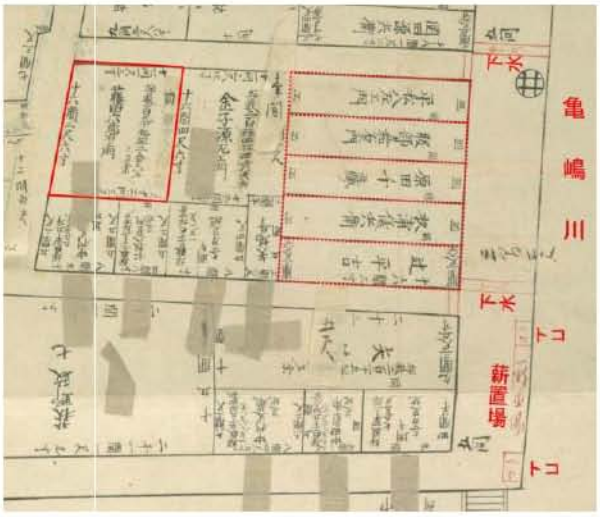


図５　『竹嶋町外絵図』の藤田六郎右衛門家付近に加筆

亀島町の通りには井戸、下水、薪置場が朱書されている。「トコ」は髪結床か。通りの西側に短冊状に並ぶのは同心に与えられた拝領町屋敷である。

辻、杉浦ら五人の同心の屋敷は河岸通りに面して間口が四間二尺六寸で奥行きは十六間三寸と細長い。河岸通りに面した所は商家に貸し、その裏手に長屋や同心の住居が配置された。亀島川添いの亀島町は町人と同心の住居が混在するという例外的で独特な地域を形成していた。

八　地図御用所の終焉

忠敬が八丁堀亀島の地図御用所で暮らしたのは文化十五年(１８１８)四月十三日までの三年十

ヶ月であった。忠敬の死後も妙薫と忠誨の亀島での暮らしは続き、また高橋景保の下役と内弟子によって地図御用は続けられ、文政四年（１８２１）に『大日本沿海輿地全図』が上呈された。その後も、元服した忠誨は高橋景保の手付手伝として星図の作製に取り組んだ。文政五年（１８２２）の妙薫の死を契機に、忠誨は佐原村に戻り在所で天体観測の御用を務める道を選択した。

『忠誨日記』から地図御用所の終焉に関係する記事を引用して稿を終える。

十月廿二日　荷物ヲ清兵衛船ニ積ム。
廿三日　家見来ル、解家屋来ル。
廿五日　象限儀、子午線儀、取払フ。
廿七日　善兵衛船ニ荷物ヲ積マス。
十一月七日　朝五ッ半時頃、予、帯刀、治兵衛、久兵衛、又蔵、江戸亀嶋出立ス

【注】

1 文化４年５月６日付け大川治兵衛あて忠敬書状
国会図書館デジタルコレクション
『伊能忠敬未公開書簡集』60頁

2 文化10年３月５日付け妙薫あて忠敬書状
伊能忠敬記念館所蔵　国宝：書状類番号７
『伊能忠敬書状』（千葉県）11頁

3 文化８年１月18日付け高橋景保あて忠敬書状
『三交会誌』第35号第13書簡

4 尾脇秀和『お白洲から見る江戸時代』（ＮＨＫ出版新書）によると、国宝『伊能忠敬像』には熨斗目を着用するという、幕臣としての重要な身分標識が示されているという。

5 文化８年閏２月23日付け伊能七左衛門あて忠敬書状
宮内敏「文化の開拓者　伊能忠敬翁（二）」（『会報』第45号）

6 文化９年１月26日付け桜井秀蔵あて忠敬書状
伊能楯雄「桜井秀蔵あて伊能忠敬書簡」（『会報』第69号）

7 文化８年12月22日付け伊能忠敬あて高橋景保書状
伊能忠敬記念館所蔵　国宝：書状類番号２５９
上原久・小野文雄「高橋景保の書簡について」（『埼玉大学紀要』人文科学篇第17号）

8 文化８年１月18日付け高橋景保あて忠敬書状
『鹿児島県史料集10』『三交会誌』第35号第12書簡

9 文化９年１月２日付け妙薫とリテあて忠敬書状伊能忠敬記念館所蔵　国宝：書状類番号５
『伊能忠敬書状』（千葉県）６頁

10 文化９年１月２日付け桜井秀蔵あて忠敬書状
柏木隆雄『伊能忠敬と柏木家の人々』所収

11 国会図書館所蔵（国会図書館デジタルコレクションで閲覧できる）

12 文化10年４月27日付け妙薫あて忠敬書状
伊能忠敬記念館所蔵　国宝：書状類番号８
『伊能忠敬書状』（千葉県）12頁

13 文化11年４月25日付け妙薫とリテあて忠敬書状
伊能忠敬記念館所蔵　国宝：書状類番号１１９
『伊能忠敬書状』（千葉県）１６３頁

14 『江戸日記』文化十一年五月二十七日の記事に、「芝新銭座伊達家内桑原隆朝宅へ立寄り」とある。

15 東京大学附属図書館所蔵（新日本古典籍総合データベースで閲覧できる）

16 国会図書館所蔵（国会図書館デジタルコレクションで閲覧できる）

17 『竹嶋町外絵図』と同一内容の絵図が国会図書館所蔵の『古組屋敷絵図』である。北と南の所属で色分けしているが、記載内容や作製事情、関係者の名前は同じである。北町奉行所の年番が使用していたようで『竹嶋町外絵図』よりも劣化している。国会図書館デジタルコレクションで閲覧できる。

18 『御府内沿革図書 第二篇上』東京市役所編纂国会図書館デジタルコレクションで閲覧できる

19 伊能楯雄『香とりの日記』の頃」（会報第66号）

【参考文献】

・中村静夫「新作　八丁堀組屋敷図１６００分の１嘉永６年　解説」『参考書誌研究』第22号
・中村静夫　「江戸八丁堀組屋敷図二図」『地図』17巻４号
・中村静夫　「伊能忠敬終焉の地」『地図ニュース』３７５号
・待野貞雄　「隠宅と地図御用所跡考証」『江戸の伊能忠敬―伊能忠敬銅像建立報告書保存版』
・前田幸子　「桑原隆朝」会報80号
・戸森麻衣子　『江戸幕府の御家人』　東京堂出版
・高柳金芳　『御家人の私生活』　雄山閣
・安藤優一郎　『江戸の不動産』　文春新書
・川名登　『河岸』　法政大学出版局

伊能図に描かれた現存十二天守（四）

石川県支部会員が会報九十四号から始めたリレー式連載の四回目である。「伊能図に描かれた城はまるでドローンを飛ばして得た空撮写真を見て描いたように俯瞰的である。伊能隊が城下の街路から見上げて描いた構図ではない。」と書いた。まさに今回はドローンを飛ばして俯瞰写真を撮りたかった備中松山城と、伊能測量隊が実際には見たことも測ったこともない丸岡城を紹介したい。まだ終息を望めないコロナ禍の中、今回もちょっとした紀行文を楽しんでいただければ幸いである。

備中松山城（岡山県高梁市）

河崎　倫代

伊能忠敬一行が備中松山城下に宿泊したのは、第七次測量（九州一次）の帰路、文化八年閏二月（一八一一年五月）だった。『測量日記』によると、測量隊は閏二月五日に三次五日市町（広島県三次市）を出立し、二隊に分かれて手分測量。忠敬本隊は十二日箱田村（広島県福山市）の庄屋園右衛門宅に宿泊した。隊員箱田良助（榎本武揚の父）の「親の家」である。良助も本隊の一員として実家で一夜を過ごした。二十一日、新見町（岡山県新見市）で支隊と合流。二十二日、本隊は新見から井倉村まで測り、その後、高橋川（現、高梁川）を船で下り松山城下に入った。途中の長谷村（長屋村の誤記）は「難所舟測。即ち川端を堀貫て用水を引く」と『測量日記』にある。本隊は本町の平松与七郎（家号大坂屋）宅に三泊したが、天文測量は二十四日にのみおこなった。この日は朝からの「微雨」で測量作業は無く、江戸へ書状を出した。その中に二十三日付の伊能七左衛門宛書状があり、宮内敏会員の家に伝わっている。本誌第四十五号（二〇〇六年）の「文化の開拓者　伊能忠敬翁（二）」に書状の全文が翻刻紹介されている。

アメリカ議会図書館蔵伊能大図151号部分
（広域図は第93号表紙を、解説は表紙裏を参照）

※高梁川では中世から高瀬舟による舟運が行われていた。忠敬一行もこの舟で松山城下へ下ったのだろう。

高瀬川を北へ航行する高瀬舟（現・高梁市本町沖）
撮影年未詳（元仲田邸くらやしき蔵）

坂部貞兵衛らの支隊は、高山市村（岡山県川上町）を経て十六日に松山城下に一泊。その後北上して小坂部村（新見市）まで測り、二十一日本隊に合流。二十二日は井倉村から松山城下まで測量して、十六日と同じ藤井鎮右衛門（家号藤屋）に三泊した。『測量日記』には「家作よし。但し山中谷合の所」とある。

二十五日、松山城下を出立。松山東村枝広瀬で「柳井播磨と申す者、御用にて大中小高檀紙を漉く。今は一軒のみと云う」と『測量日記』に記している。岡山県ホームページ「備中和紙」の項に、「良質の楮を産する備中地方は和紙の一大産地となった。特に大高檀紙（おおたかだんし）を代々

上：観光駐車場に設置された復元高瀬舟（長くて深い）
左：航行する高瀬舟（駐車場の展示パネルより）

製造してきた柳井家などは、江戸時代には宮中や将軍家の御用をつとめるまでになった」とある。さらに、「明治時代になり、洋紙に押され細々と漉かれていたが、昭和三十九年の新成羽ダムの建設によりその歴史は閉じられた。しかし、その技術・技法は倉敷市の丹下氏により〝備中和紙〟としてよみがえった」と記す。忠敬が『測量日記』に記した「大中小高檀紙」が所と形を変えて現代に生き続けている。

※「コトバンク」によると、「檀紙は楮を原料として作られた縮緬状のしわを有する高級和紙」。

城はその立地から、山城・平山城・平城に分類される。国重要文化財である備中松山城は、「天守が現存する唯一の山城」であり、鎌倉時代、有漢郷（現、高梁市有漢町）の地頭となった秋庭重信が延応二年（一二四〇）、臥牛山系（大松山・天神の丸・小松山・前山）最北の大松山（四八〇ｍ）に砦を築いたことに始まると伝わる。この地域は山陰と山陽を結び、東西の主要街道が交差する要所であったことから、戦国時代には争奪戦が繰り広げられ、目まぐるしく城主交代が繰り返された。

関ケ原の戦い（一六〇〇年）後は、徳川家康が派遣した備中国奉行小堀正次・政一（遠州）父子が城番を務め、荒れ果てた砦跡にあったとされる天守と麓の御根小屋を修築した。その後、元和三年（一六一七）に池田家が因幡鳥取より入封。次いで、寛永十九年（一六四二）に水谷勝隆が五万石の城主として入城。現存する城郭は、天和三年（一六八三）に水谷勝宗によって三年がかりで大改修したもので、天守、二重櫓、土塀の一部が重要文化財に指定されている。水谷家が無嗣改易となって断絶後、播州赤穂浅野家預かりとなり、筆頭家老の大石内蔵助が城代として一年間在番。次いで安藤家、石川家、と藩主が交替。延享元年（一七四四）に伊勢亀山より入封した板倉家八代が明治維新まで治めた。

明治六年（一八七三）の廃城令によって、全国の城郭の多くが取り壊しの対象になった。松山城はわずか七円で売りに出されたが、険しい山上にあったため取り壊されずに辛うじて残ったという。約六十年間忘れられて崩壊寸前だった松山城を再生させたのは、昭和初頭に岡山県立高梁中学校に赴任し、歴史を教えていた信野友春だった。詳細を記すスペースがないのは残念であるが、信野の熱意と努力によって、地元住民たちが山頂に眠っていた「郷土の宝」に気付かされ、昭和十五年（一九四〇）の修復へとつながった。しかし予算は十分とはいえず、山城での工事は難航した。そんな中、二万枚の瓦の搬入に活躍したのが地元の子どもたちだった。夏休みには、小学生から高校生まで一枚二キロの瓦を何枚も背中に背負い、急な山道を登ったそうだ。その後、昭和の大改修（一九六〇年完了）、平成の大改修（二〇〇二年完了）を経て、現在に至っている。

この秋九月二十四日、瀬戸内市立図書館友の会「せとうち・もみわフレンズ」に招かれて、伊能忠敬について話をさせていただいた。その後、高梁市に向かい備中松山城下に一泊。「現存十二天守」の連載には松山城訪問が欠かせなかった。伯備線高梁駅の改札を出てまもなく、真正面に急峻な山がそびえていた。「あれが備中松山城？」コンパクトカメラの望遠機能を最大にしてみた。天守が見えた。「登れるだろうか？」と不安になった。

翌朝は晴れて、気温も快適な登山日和になりホッとした。一週間前の予報では雨だった。登城口の「ふいご峠」（標高二九〇ｍ。臥牛山八合目）まではタクシーを使った。足を悪くしていたのでバスを乗り継ぐよりは良かったと思う。宮内敏会員からいただいた情報を参考に、登城口に用意されていた竹製の杖を借りて、いざ出発！天守のある小松山（標高四三〇ｍ）までは「七百ｍ。徒歩二十分。」と書かれていたが、無理はできない。ゆっくり行こう。結果的には約二倍の時間をかけて山路を登った。所々に「登城心得」の高札があり、

高梁駅付近から見える小松山。　山上に天守が見えた。

三の平櫓東土塀

大手門跡の石垣群

修復前の二重櫓（天守内の展示パネルより）

昭和初期の崩壊寸前の天守（高梁市教育委員会提供）

現在の天守内部

復興なった現在の天守

「この辺りがちょうど中間地点である。しばし休まれよ。」など城主からの声掛けが有り難かった。大手門跡に着く。右手には天然の岩盤上に石垣群がそびえている。さらに、重要文化財指定の三の平櫓東土塀が続き、矢狭間（やざま）・筒狭間が開けられている。三の丸、二の丸跡へと至る石段は直角に何度も曲がり、敵の進軍を遅らせる工夫がされている。いよいよ本丸に到着。二層二階の天守は高さ約十一ｍで、現存天守の中では最も低い。明治期廃城後の荒廃を物語る写真と同じ角度からの撮影を試みた。

天守内部は展示スペースとなっていた。一階には籠城戦を想定して囲炉裏や装束の間が設けられており、二階には御社壇（神棚）があり三振りの宝剣をご神体として祀っていた。この宝剣を造るために大きな「ふいご」が設置されていたのが、「ふいご峠」の由来である。

二階の壮大な小屋組み

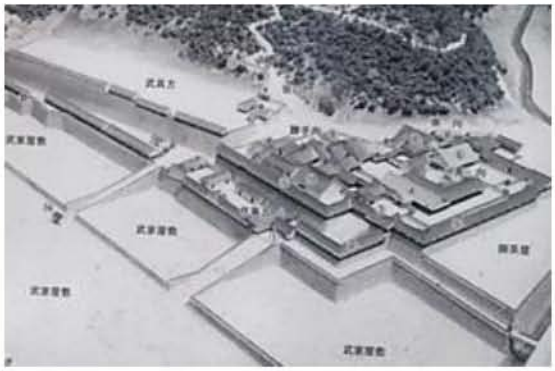
にも目を奪われたが、ふと目にした二本の柱には心を奪われた。どこから手を付けていいのか分からないほどに荒廃した天守を壊して、一から築造・復元する道もあったかも知れない。しかし、現存する部材を最大限に生かして修復・復元したからこそ、重要文化財の指定を受けて、今日、「現存十二天守」としての備中松山城があるのだと実感できた。

急峻な山上にある松山城は戦時の籠城のためのものだが、平時にはどうしていたのだろうか。疑問に思っていたが、山裾に「御根小屋」があり、城主の日常生活の場である御殿と政庁を兼ねていたという。天守に設置されていた展示パネルの中に御根小屋が描かれていた。山を下りた麓に、石垣を築いて土塀で囲った広大な敷地がある。現在は県立高梁高等学校の校舎・グランドとなっている。山中に「下太鼓の丸」と「中太鼓の丸」があり、御根小屋と天守の間の伝達手段として太鼓が使われていたという。

御根小屋周辺の武家屋敷を過ぎて高梁川沿いの商人町に来ると「本町」の表示があった。伊能本隊の宿所大坂屋（平松与七郎）の情報を得ようと「高梁市商家資料館」を訪れたが、人気がなく来訪目的をメモに残して出た。帰宅後、姫井眞さんから連絡があり、大坂屋は藩札発行を任された札座で、大工町の正善寺が菩提寺だと教えていただいた。正善寺に電話をしたが詳細は分からなかった。

コロナ禍の中で久し振りに県外に出かけた。まだまだマスクが外せない三日間だったが、瀬戸内の海旅、備中松山城の山旅を楽しませていただいた。

二の丸から見える高梁市街と高梁川



御根小屋復元模型（天守内の展示パネルより）

御根小屋跡地を示す土塀

忠敬一行が宿泊した本町付近の町並み

参考文献

・西ヶ谷恭弘『日本の城 ポケット図鑑』主婦の友社 一九九五年
・『岡山県の歴史散歩』二〇〇九年 山川出版社
・山下景子著『現存12天守閣』幻冬舎新書２０１１年
・島崎晋・東京地図研究社『凸凹地図で読み解く日本の城』二〇一六年 技術評論社
・『るるぶ岡山 倉敷 20』二〇一九年 ＪＴＢパブリッシング
・『古地図で読み解く城下町の秘密』サンエイムック 二〇二一年
・男の隠れ家ベストシリーズ『古地図で読み解く城下町の秘密』三栄 二〇二一年
・nippon.com 日本情報多言語発信サイト

丸岡城（福井県坂井市）

寺口　学

この連載は、「現存十二天守」を伊能図と『測量日記』から見ていくものであるが、唯一、未測量、伊能図に描かれていないのが、福井県の丸岡城である。それを承知の上で、丸岡周辺における伊能忠敬一行の動きを追ってみたい。

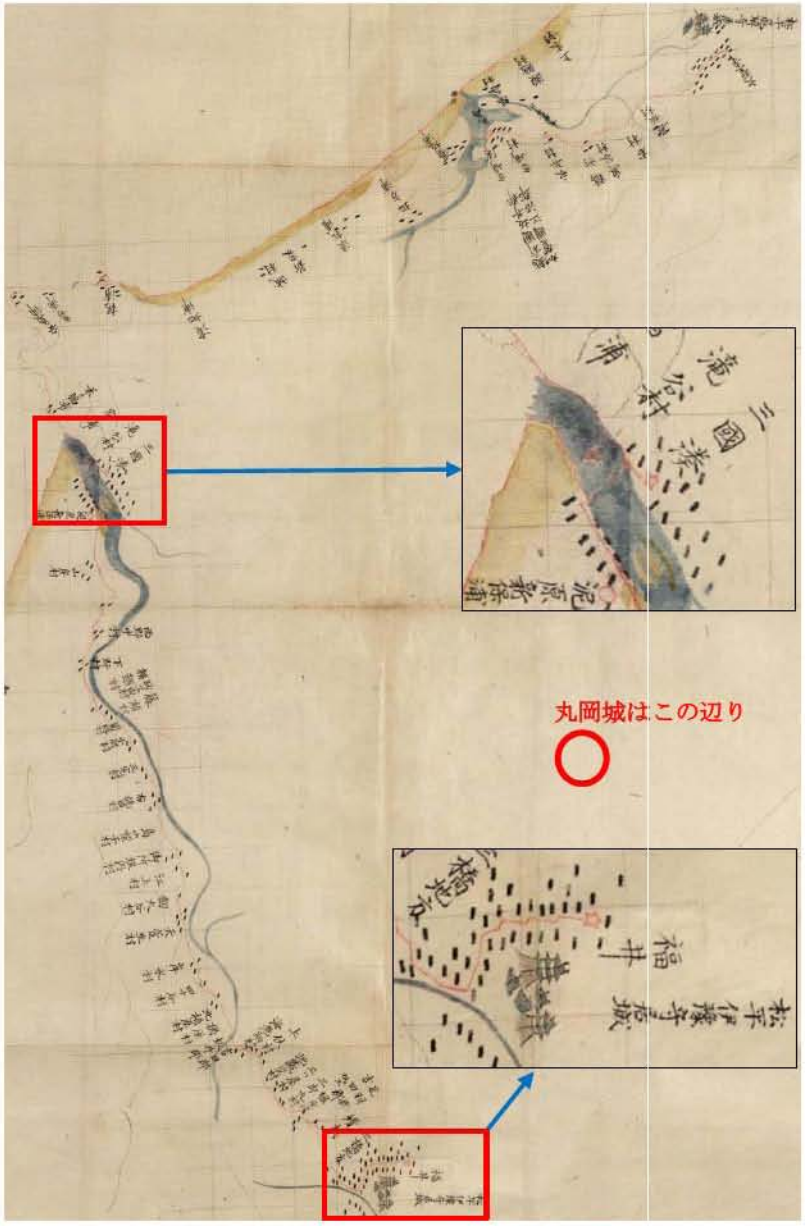
三国湊～福井城下

福井県域を伊能忠敬一行が訪れたのは、第四次測量のことであった。享和三年二月二十五日（一八〇三年四月十六日）、内弟子五人、下僕二人を連れて江戸を出立。この時、忠敬満五十八歳。五月末からの福井県域測量は麻疹（はしか）と道連れの日々で隊員が代わる代わる病に倒れた。

六月十七日、朝から晴天に恵まれ、順調に測量を進め、松平越前守居城の福井城下境町へ九ツ頃に到着した。止宿先は松屋嘉右衛門、夜には天文測量を実施している。当時の福井藩主は松平治好で、文化四年（一八〇七）に医学所である済世館を創設した人物である。

十八日朝、福井城下を船で出立し、十六日に測量を終えた三国湊まで戻っている。『測量日記』には三国湊は家数一三七〇軒と記され、九頭竜川（『測量日記』では「三国大川」）河口に開け、北前船交易の一大集積地として大きく発展した町であった。

一行は二十一日まで同地に滞在しているが、それは麻疹による病気逗留のためであり、忠敬は福井藩の金津奉行（九頭竜川以北を管轄した奉行）が派遣した金津医師井代養伯の診察を受けている。二十二日になってようやく全員が快復し、八人そろって測量作業を再開している。三国湊を出立した一行は、順調に測量を進め、二十四日に加賀藩の支藩大聖寺藩領に入ることとなる。



アメリカ議会図書館蔵　伊能大図120号部分

伊能図に描かれなかった丸岡城

さて、本題の丸岡城であるが、三国湊から直線距離で十三km内陸部に位置し、独立丘陵（標高二七m）を本丸としてつくられた平山城である。その始まりは、柴田勝家の甥で養子となった柴田勝豊によって築かれ、江戸時代には福井藩の附家老として城主をつとめていた本多成重が城主となった。その後、福井藩主・松平忠直の隠居に伴い本多家が独立し、丸岡藩が成立。本多家が改易となったのちは、有馬氏が入封し、以後八代が丸岡藩藩主となっている。

当時の藩主は有馬誉純で、幕府奏者番、寺社奉行を経て江戸城西の丸若年寄に就任している。藩政については、その財政立て直しを図りつつ、藩校・平章館の創設、『国乗遺聞』や『藤原有馬世譜』など藩史・地誌の編纂に力を注ぎ、文教振興にもつとめた。

「現存十二天守」の一つである天守は、北陸唯

一の現存天守でもあり、小さな望楼を載せた古式の外観から現存最古の天守とも呼ばれていた。しかし、坂井市教育委員会の調査で、江戸期の寛永年間（一六二四～四四）に建造されたことが判明している。

明治四年（一八七一）廃藩置県により廃城となり天守以外は全て解体・破棄された。残された天守は、明治三十四年（一九〇一）、丸岡町（当時）により買い戻され解体を免れ、城跡は公園となった。本丸を囲んでいた堀は、大正後期から昭和初期までの間に徐々に埋められ消滅した。昭和二十三年（一九四八）の福井地震で天守は倒壊したが、昭和三十年（一九五五）に部材を七十％以上再利用し組み直して、修復再建された。

独立式望楼型二重三階で、一階平面を天守台に余分を持たせて造られているため、天守台を被せるような腰屋根が掛けられている。建築当初は、屋根は柿（こけら）葺き、木製漆塗りに金箔押しの鯱であった。のちに屋根瓦は笏谷石（しゃくだにいし）製の石瓦に変更された。寒冷地であるという気候事情により葺かれているといわれる。

※笏谷石は、デイサイト軽石火山礫凝灰岩で、福井市の足羽山で採掘される。柔らかくて加工しやすい。

丸岡城天守閣

丸岡城天守内部

筆者が丸岡城を訪れたのは、まだ学生だった二〇一〇年のことである。駐車場から坂道を上り天守が見えてくると、小ぶりながらも堂々とした佇まいに感激した覚えがある。天守内部の急な階段を友人たちと慎重に上り、最上層から一望できる福井平野を、高所恐怖症の筆者は恐々と眺めた。

丸岡城の存在については、忠敬一行も情報としては持っていたのかもしれないが、残念ながらそのような記録は見受けられず、この天守を目にしていない。三国駅観光案内所の方にも尋ねてみたが、三国周辺から丸岡城を見ることはできないという。

【参考文献等】

・文化遺産オンライン「丸岡城天守」https://bunka.nii.ac.jp/heritages/detail/146031

・坂井市教育委員会 丸岡城国宝化推進室『知られざる丸岡城』No.5（令和元年）

・福井県文書館「デジタル歴史情報」https://www.library-archives.pref.fukui.lg.jp/bunsho/category/digitalrekishi/147.html

「伊能忠敬測量隊の足跡をたどる」連載第三十一回

伊能忠敬銅像報告書「伊能忠敬の足跡」の改訂増補版

【第八次測量】（九州第二次）　米子～鳥取～津山～岡山～姫路　自　文化10年閏11月9日　至　文化10年12月30日

監修　渡辺一郎　編著　井上辰男

【本隊】

文化10年閏11月（1813）

宿泊日・旧暦	（西暦）	宿泊地	現・市町村名	宿泊宅	特記・天体観測	大図番号
9＊	昼休	今在家村	同　米子市	勇八	米子町出立。大手分。【支隊】作州勝山津山へ向て測。【本隊】米子麹町止宿前より、博労町、勝田村勝田社華表前を歴て、神前迄測る。華表前より車尾村、米川土橋、日野川堤、日野川仮橋、日野川東端先手の初、津山・鳥取追分、豊田村・熊堂村界に繋。熊堂村、蚊屋村、今在家村、赤井手村、佐田川、尾高村（我等は赤松村止宿差支に付、長持共に此所止宿）、【門谷他三名】同村人家中二印を残。此より式内大神山神社へ打上。二印より、赤松村、精進川、字一ノ谷に打止。	一五五
	伊能	尾高村	同　米子市	西古兵四郎		一五五
	（31）	赤松村	同　大山町	日光御門主御抱 伊沢次左衛門 広右衛門		一五〇
10＊	（1814・1・1）	大山	同　大山町	天台宗角盤山大山寺 中門院坊舎成就院	赤松村字一ノ谷より、字別茶屋、大山境内幡屋街道追分を残街道打止。此より中門院谷を本社へ打上け、止宿成就院門前を歴て、それより本社前に打止。天台宗角盤山大山寺、金蓮上人開基、本社額大智明大権現（日光御門跡一品法親王御染筆）、本堂廻廊十八間、本坊西楽院。南光院谷ノ内式内大神山神社。境内四十二坊、中門院坊舎、南光院坊舎、西明院坊舎。本坊より使者、此仁母屋迄来、此度も案内。大山に古書あり、宝物数品あり、略之。	一五〇
11＊	伊能	御厨村	同　大山町	庄屋角田吉郎右衛門	大山出立。我等は羽田井村止宿差支に付、直に御厨村へ越。【門谷他三名】大山銅華表前羽田井道追分より羽田井道を測、字上野原、字木地、精進川、左側汗入郡別所村、右側八橋郡羽田井村、安田川、甲川、八橋郡羽田井村、同本村人家中迄測。	一五〇
	（2）	羽田井村	同　大山町	百姓徳兵衛 百姓林左衛門		一五〇
12＊	（3）	赤碕村	同　琴浦町	本陣（医）伊藤忠四郎 百姓定三郎	羽井田村人家中より、光村、双西川、竜田川、赤崎村字福富、同村地蔵町、米子道追分、字八軒屋、化粧川板橋、赤崎本村止宿迄測る。それより仕越。赤崎・松谷村界迄測。我等は御厨村より直に当所へ着。	一五〇

宿泊日・旧暦	(西暦)	宿泊地	現・市町村名	宿泊宅	特記・天体観測	大図番号
13＊	伊能	中河原村	同　倉吉市	百姓佐左衛門	赤崎村出立。我等は上伊勢村止宿差支直に中河原村行。【門谷他三名】赤崎村と八橋村枝松谷境より、別所村、八橋村、金洗川、菊里村（当村人家迄街道海辺付）、金市村、上伊勢村伺人家前を歴て、測所打上。人家前より仕越。加勢市川右河原、中尾村槻下村地内に打止。	一五〇
	（4）	上伊勢村	同　琴浦町	百姓政右衛門 百姓源蔵		一五〇
14＊	昼休	下福田村字出合	同　倉吉市	庄左衛門	【門谷他三名】上伊勢村出立。槻下村より、岩坪村、下種村、種川、久米郡今在家村、上福田村、下福田村、字出合、下米積村、横田村字植木場、国分寺村を歴て伯州惣社へ打上。又国分寺村より、国府村を歴て曹洞宗護国山国分寺へ打上。国府村より、国分川土橋、秋喜村、岡田村、小鴨川端、倉吉・久世道追分にて街道終。此より久世街道横切測。生田村、北野村、市場村久世街道打止。此より止宿へ打上。	一五〇
	（5）	中河原村	同　倉吉市	百姓佐左衛門 百姓丈左衛門 百姓孫右衛門		一五〇
15＊	伊能	中河原村	同　倉吉市	百姓佐左衛門	中河原村出立。我等は湯関村止宿差支に付、中河原逗留。【門谷他三名】市場村より湯関村道測、上古川村、石塚村、上松神村、中田村、大鳥居村字山陰、金谷村、金谷川土橋、湯関村、湯関川土橋、同村人家中に打止。	一五〇
	（6）	湯関村	同　倉吉市	百姓新三郎 百姓助四郎		一五〇
16＊	伊能	中河原村	同　倉吉市	百姓佐左衛門	湯関村逗留測。我等は中河原に逗留。【門谷他三名】湯関村人家中より、作州界迄打越、湯関川、郊家村、田中村、山口村字矢櫃、枝大河原、字犬狭峠、下長田村地津山御預所国境迄測る。	一五〇
	（7）	湯関村	同　倉吉市	百姓新三郎 百姓助四郎		一五〇
17＊	伊能	倉吉町	同　倉吉市	山懸兵三郎	我等は中河原村出立、直に倉吉町着。荒尾氏より国産被贈。【門谷他三名】湯関村出立。無測、岡田村地内小鴨川端より鳥取道を測、小鴨川土橋、又小鴨川枝川渡土橋、倉吉町、河原町、小屋町、鍛冶町、越中町、岩倉町、止宿前迄測る。西町、東中町、倉吉陣屋、横町三ッ辻、鳥取街道・橋津街道追分迄測る。此より橋津街道を測。神坂村、三明寺村、田内村、河村郡上井村、竹田川土橋、字出茶屋、湖水・橋津道追分迄測る。此より湖水道を測。右側山根村、千坂峠、埴見村字佐美、長和田村東郷湖の端に至。此より東郷湖を左山に測。門田村、長江村、上浅津村地内に打止。それより乗船、橋津村（本名湊村）着。	一五〇
	昼休	上井村字出茶屋	同　倉吉市	文七		一四三
	（8）	橋津村（湊村）	同　湯梨浜町	天野与兵衛 久世屋太兵衛		一四三

宿泊日・旧暦	（西暦）	宿泊地	現・市町村名	宿泊宅	特記・天体観測	大図番号
18＊	伊能（9）	倉吉町	同　倉吉市	山懸兵三郎	湊村逗留測（我等は倉吉逗留）。【門谷他三名】湊村人家中より、寅年止宿前（重測）を歴て湖水へ打上、江川端を測、上橋津村、南谷村、同人家前迄測。此より湖水側横切、東郷端に至る。又湖水端上浅津村地内より左山に測、下浅津村、江川端迄測る。此より南谷村（江川端を片測して）に繋。又湖水端より、南谷村に繋。宮内村字宮津浜一ノ宮（湖辺より引込山道難所、殊に積雪に付遠測）式内倭文神社。宮内村にて打止。暮に帰宿。	一五〇
	（9）	橋津村（湊村）	同　湯梨浜町	天野屋与兵衛 久世屋太兵衛		一四三
19＊	（10）	倉吉町	同　倉吉市	本陣山懸兵三郎 遠藤善五郎	橋津村（本名湊村）出立。（我等は倉吉町逗留）。【門谷他三名】宮内村地内東郷湖より湖水測、藤津村、松崎村松崎町、中奥寺村、引地村、野花村、長和田村に繋、東郷湖終。又橋津村より倉吉街道を測、江川土橋、布河村、長瀬村新田、久富村、長瀬村（駅場）、田後村字茶屋、清谷村字茶屋、福庭村、同村内二ノ宮波々伎神社（往来より引込遠測）。海田村、上井村字出茶屋湖水道追分に繋。	一五〇
20＊	伊能昼休	湊村	同　湯梨浜町	天野屋与兵衛	倉吉町出立。美徳街道は往来難所にて長持、井荷物通行難成に付、長持荷物我等は当所より惣名青谷の内芦崎村へ行、湊村昼休、芦崎村着。西青谷を青屋村、上青谷を潮津村、下青谷を芦崎村と云。	一四三
	伊能	芦崎村	同　鳥取市	石井世左衛門	【門谷他三名】倉吉町、魚町横町界より旧の鳥取街道美徳越を測、神坂村、駄経寺村、少林寺村、円谷村、円谷川小流土橋、竹田川仮橋、郡界、河村郡大原村字茶屋、大瀬村、山田村、湯村（温泉あり、外に三笹と云）、湯場、片柴村字増野、糸見川小流土橋、坂本村字坪谷、黒川小流土橋、字市条、美徳川馬場橋、門前村字馬場美徳山門前打止。それより本坊前迄打上。	一四三
	昼休	湯村湯場	同　三朝町	惣右衛門		一四三
	（11）	門前村	同　三朝町	天台宗美徳山三仏寺 本坊正善院		一四三
21＊	昼休	河内村	同　鳥取市	五左衛門	我等は芦崎村出立、直に志加奴町着。【門谷他三名】門前村美徳山門前より、字成、美徳川、字吉原、美徳川、俵村佐谷峠国界、気多郡河内村、河内川、河内村・鷲峯村界に打止。暮に志加奴（又鹿野）着。恒星測定	一四三
	（12）	志加奴町	同　鳥取市	草屋恵助		一四三

宿泊日・旧暦	（西暦）	宿泊地	現・市町村名	宿泊宅	特記・天体観測	大図番号
22＊	（13）	志加奴町	同　鳥取市	草屋恵助	志加奴町逗留測。河内村・鷲峯村界より、鷲峯村字来日を歴て鷲峯大明神へ打上。式内志加奴神社。字来日より、志加奴、大工町、山根町測所迄測る。此より仕越。下町、水谷川板橋、紺屋町、末用村、気多郡末用村・高草郡洞谷村界打止。恒星測定	一四三
23＊	（14）	湯村（吉岡町）	同　鳥取市	湯中屋権兵衛	志加奴町出立。気多郡・高草郡界より、洞谷村字一ッ橋、瀬田倉村字景平、字下瀬田倉、長柄村、湯村字湯谷、湯村本村（吉岡共吉岡町共）止宿前に打止（此所温泉あり）。それより仕越。湯ノ峠字茶屋、三山口村字米山に打止。	一四三
24＊	昼休	徳尾村	同　鳥取市	大庄屋岡田庄兵衛	吉岡町出立。三山口村字米山より、野坂村、嶋村、徳尾村を歴て式内大野見宿称神社へ打上。徳尾村より、古海村、野坂川土橋、千代川舟渡、郡界、邑美郡古市村、行徳村、鳥取城下市中、本地町袋川端に街道打止。此より止宿へ打上、鋳物師町鋳物師橋前に繋。	一四三
	（15）	鳥取城下鋳物師町	同　鳥取市	本陣加路屋九兵衛 米屋佐兵衛		一四三
25＊	（16）	鳥取城下鋳物師町	同　鳥取市	本陣加路屋九兵衛 米屋佐兵衛	鳥取城下逗留測。鋳物師橋前より一ノ宮測、鋳物師町、茶町、二階町、若狭街道若狭町通上魚町、元大工町、御弓町字ドンド三辻を歴て、それより押屋敷立川町、法美郡在分立川村、石井川土橋、卯垣村、岩倉村、奥谷村、宮下村一ノ宮神前に打止。式内宇信神社。それより無測にて大風雪に鳥取市中御弓町三ッ辻へ引帰、字ドンド三辻よりドンド通袋川添を測。若狭橋板橋、川外大工町、地頭街道に打止終。昼後より大風雪、帰宿。此夜鳥取侯より一同へ国産被贈。	一四三
26＊	昼休	円通寺村字茶屋	同　鳥取市	伝治郎	鳥取城下出立。市中本地町袋川端より、河原町、河原町外大工町に繋、河原町、今町、古市村、富安村、吉成村、吉成川土橋、清水川、叶村字茶屋、国安村、八上郡円通寺村字茶屋、千代川舟渡、布袋村、稲常村、袋河原村、長瀬村、谷一木村新田川原村人家中止宿前に打止。恒星測定	一四三
	（17）	谷一木村新田川原村	同　鳥取市	百姓太兵衛 百姓源七		一四三
27＊	昼休	釜口村枝六日市	同　鳥取市	半兵衛	谷一木村新田川原村止宿前より、渡一木村曳田村を歴て八上神社へ打上。曳田村式内賣沼神社。曳田村より、智頭川舟渡、徳吉村、高津原村、釜口村枝六日市、智頭郡下鷹狩村、赤波川土橋、上鷹狩村、用瀬村（駅場）人家中に打止。恒星測定	一四三
	（18）	用瀬村	同　鳥取市	百姓只吉 百姓長四郎		一四三

宿泊日・旧暦	（西暦）	宿泊地	現・市町村名	宿泊宅	特記・天体観測	大図番号
28＊	（19）	智頭宿	同　智頭町	笹屋仁右衛門 土屋作兵衛	用瀬村人家中より、金屋村、樟原村、古城跡、川中村字鳥居野（立場）、市ノ瀬村、同新田、湯屋村字中嶋、字鳥ノ巣、智頭宿（駅場）、田中町、下町、上町、津山街道追分（即測所）迄測る。此より仕越。鳥取より江戸行、姫路道を測、字上市、篠坂村字桜瀬、智頭川端に打止。恒星測定	一四三
29＊	伊能	智頭宿	同　智頭町	笹屋仁右衛門	智頭宿出立。我等は駒帰村止宿差支に付此所に逗留。【門谷他三名】篠坂村字桜瀬より、毛谷村、毛谷橋土橋、字坂清水、大内村字小又、尾見村、中原村、白坂川小流、中原橋板橋、入道原村字福原、駒帰橋板橋、駒帰村字奥駒帰人坂峠、国界を歴て吉野郡坂根村地内に打止。	一四三
	昼休	中原村	同　智頭町	清右衛門		一二八
	（20）	駒帰村	同　智頭町	文五郎 幸三郎		一二八

文化10年12月	（1814）					
1＊	昼休	智頭村	鳥取県智頭町	笹屋仁右衛門	【門谷他三名】駒帰村出立。無側にて智頭村へ引帰、智頭宿の内津山道追分より津山街道を測、本谷川備前橋、河原町、山根村、川戸村、木平村に古城跡あり、長瀬村枝三明、大坪村、慶所村（口留番所）、竹内村、野原村（駅場）、止宿前に打止。恒星測定	一四三
	（1・21）	野原村	同　智頭町	長治郎 徳右衛門 尚右衛門		一四三
2＊	（22）	馬桑村	岡山県奈義町	年寄新左衛門 庄屋七右衛門	昨夜より大雪、朝も降、昼後止。野原村止宿前より、栃木村、奥早野村、黒尾峠国界、勝北郡御料所、馬桑村、字木地山、本村測所に打止終。恒星測定	一四三
3＊	昼休	沢村	同　奈義町	庄屋李兵衛	馬桑村測所より、小坂村、関本村字前ヶ谷、字杉ヶ峠、関本村（駅場）、黒谷川小流、高円村、西田川小流、沢村、広岡村、北野村字古縄手、上町川村字ニッ木、新野庄東村、広戸村市場分、字日本野測所に打止。恒星測定	一四三
	（23）	広戸村市場分日本野	同　津山市	庄屋弥兵衛 五兵衛		一四三
4＊	昼休	野村	同　津山市	肝煎平作	広戸村内市場分日本野測所より、新野東村、新野東村字丸山、新野西村下分、広戸川、勝加茂東村坂上分、勝加茂西村上分、俵川小流、字婦路、楢村、加茂川土橋、此所に金毘羅参詣の川船あり又旅籠屋あり、東南条郡野村、本郷村字上田、押入村下分、右因州街道横道口早野村へ行追分、蟹児川土橋、字飯縄、野介代村字飯縄、枝太田分、播州街道追分を歴て、播州街道を津山城下へ測。野介代村枝太田分、林田村、津山市中入口東新町木戸に打止。両手出会一宿。恒星測定	一四三
	（24）	津山城下堺町	同　津山市	玉置源五兵衛		一四四

【支隊】　勝山津山向測

宿泊日・旧暦	（西暦）	宿泊地	現・市町村名	宿泊宅	特記・天体観測	大図番号
閏11月9日	昼休	岸本村	鳥取県伯耆町	又四郎	米子町出立。会見郡四日市村新田、豊田村日野川端、大山道・勝山道追分より勝山道測、左荒神社、字地田、高田村、馬場村、右日野川、向は八幡村、左正八幡宮鳥居前を歴て本社迄測る。鳥居前より水浜村、遠藤村、左大山道追分、馬心村新田、押口村、岸本村、別所川尻、細見村、清山川尻、上細見村、河下川尻歩行渡、日野郡溝口村字河下（本村駅場）、字溝口宿、右に制札、左止宿前打止。	一五五
	（31）	溝口宿	同　伯耆町	本陣伊左衛門		一五五
10	（1814・1・1）	二部宿	同　伯耆町	本陣足場唯蔵	溝口宿本陣前より、右上方・左谷川村追分、日野川（船渡し）、宇代村、右に鎮守大森大明神、古市村字中曽、野上川、父原村（馬立場）、野上川、三部村、右米子道追分、右に曹洞宗野上山長竜寺、二部宿字堂ノ谷、二部宿、右に稲荷社、左禅伝灯寺、右制札、左本陣前打止。	一五五
11	（2）	根雨宿	同　日野町	本陣梅林弥四郎	二部宿本陣前より、左に王子権現社、間地川、又間地川土橋、字間地、間地川土橋、字間地山（鉄山。タタラ一ヶ所、鍛冶屋二ヶ所）、字間地坂峠、舟場村、舟場川九度渡る、日野川舟渡、根雨宿（駅場）、左大山道追分、左曹洞宗延暦寺、同本陣前打止終。	一五〇
12	（3）	板井原宿	同　日野町	新屋嘉六	根雨宿止宿前より、左に制札、高尾村、金力持村、金持川土橋、根雨川、板井原宿、板井原川土橋、右に制札、左止宿本陣前打止終。	一五〇
13	小休	板井原村字峠根	同　日野町	和平	板井原宿止宿前より、板井原川二度渡土橋、字峠根、字四十曲り坂峠、国界、美作国真嶋郡新庄村字二ッ橋、二橋川土橋、字嵐ヶ峠、字戸嶋、左大山道追分、戸嶋川土橋、新庄宿（駅場）、右領主の茶屋、左止宿前打止。	一五〇
	昼休	新庄村字二ッ橋	岡山県新庄村	勘左衛門		一五〇
	（4）	新庄宿	同　新庄村	進三左衛門		一五〇
14	（5）	美甘宿	同　真庭市	魚屋平右衛門	新庄村新庄宿止宿前より、右小坂部道、字大所、新庄川土橋、美甘村字谷、字山路、字平島、字長田、字ノブ、字松末、左古城跡字麓山、枝麓、美甘宿（駅場）左制札止宿前打止終。	一五〇
15	昼休	延風村字小芝	同　真庭市	菊治	美甘宿止宿前より、字首切峠、字寄合、田口村、延風村字小芝神代村、左大絶壁名所鬼ノ岩屋（奥行三十間計、中央より左へ曲穴十五間計、その外横穴六間計数ヶ所二階穴もあり）、右小坂部坂追分碑に繋。それより無測、勝山城下町へ着。	一五〇
	（6）	勝山城下	同　真庭市	本陣金田弁右衛門		一五〇

宿泊日・旧暦	（西暦）	宿泊地	現・市町村名	宿泊宅	特記・天体観測	大図番号
16	昼休	高田山上村字才峠	同　真庭市	四郎左衛門	勝山町出立。本郷村字名草より（左に今見堂）、字寺河内、字杉ヶ峠、神代村追分打止の碑に繋。此より小坂部道を測。神代川駄渡橋、高田山上村字才峠、小川土橋、字小坂峠、字大平、野村、若代村、左三尾寺道追分印を残、下岩村字桑原、下岩川土橋、清谷村、清谷川土橋、字橋詰、清谷川、字傍璽ヶ峠、国界に打止。美作国真島郡清谷村、備中国阿賀郡小坂部村界也。それより清谷村へ着。	一五〇
	（7）	清谷村	同　真庭市	庄屋市右衛門		一五〇
17	昼休	下岩村	同　真庭市	百姓五郎兵衛	清谷村出立。小坂部村制札右柱より勝山道測、左小坂部川西端に陣屋有、小坂部川土橋、左秋葉権現社その並に八幡宮社、枝長富、右天満宮あり、字傍尓ヶ峠国界打止に繋終。それより無測、下岩村、真島郡若代村追分より三尾寺道測、字市場、字二ッ木、字森、字寺尾、左真言宗普門寺、字向側、字笛井、字野田、岩井谷村、若代川、字則行、字津ノ原、止宿前に打止終。	一五〇
	（8）	岩井谷村	同　真庭市	庄屋三十郎 百姓四郎右衛門		一五〇
18	昼休	阿口村	同　真庭市	庄屋弥太郎	岩井谷村止宿前より、字王子、字片山、上村字大谷、字二ッ見堂、国界、備中国阿賀郡阿口村、（新見より中津井回松山街道に出る、十文字此街道測量相済）、追分迄測り、三尾寺道碑に繋。此より三尾寺道測。屈曲に山を登、赤馬村、字三尾寺山本堂前迄測る。真言古義高野山末如意山三尾寺千手院、本堂本尊千手観音行基作、脇立（不動明王、昆沙門天）弘法大師作、本堂後に八社権現社、（本堂の右に並）大師堂（本尊弘法大師）。此より式内神社へ打上、左に十王堂二王門、日呼宮鳥居前より随神門、拝殿、神殿前に打止終。式内比売坂鐘乳穴神社、別当如意山三尾寺。	一五〇
	（9）	赤馬村三尾寺	同　新見市	如意山三尾寺		一五〇
19	昼休	中津井村	同　真庭市	室貞吉	赤間村如意山三尾寺出立。無測にて亀山領中津井村、領主より国産贈物あり、それより片岡村へ着。	一五〇
	（10）	片岡村	同　高梁市	新屋文三郎 問屋周蔵		一五一
20	昼休	有漢上村	同　高梁市	禅宗保寧寺	上房郡片岡村出立。同村字塩坪、左大山道・右湯原道追分碑より湯原道を測、字長尾鼻、有漢下村字笛竹、字岡寺、字信清、有漢（中下）村、有漢上村、字有漢市場、左中津井道追分、左真言宗宝妙寺、右川向中村の内古城跡字産の城、右備前道追分、左に茶堂、長代川土橋、左中津井道追分字大陰、長代村止宿前打止。	一五〇
	（11）	長代村	同　高梁市	岡崎柳蔵		一五〇

宿泊日・旧暦	(西暦)	宿泊地	現・市町村名	宿泊宅	特記・天体観測	大図番号
21	昼休	井尾村枝井戸野	同　真庭市	伝兵衛	長代村止宿前より、長代川土橋、字呼岩、字武蔵峠、阿賀郡井尾村（此村に水田の住国重の刀鍛治あり、その子孫はあれと刀は不打）、右備前道追分、枝井戸野を歴て、式内井戸鐘乳穴神社へ打上ケ、木華表、（右に桜古木あり、周六囲、字蒲桜と云）、随神門、社前迄測る。又枝井戸野より、穴印を歴て、井戸鐘乳穴へ打上る、穴入口迄測る。（此より篝火にて一覧す、口の高五丈、奥行曲曲四十二間、その外横穴行詰十五間程、二階穴も有、往古此穴に井戸鐘乳穴神社在しを中古岩山大明神と勧請すと云）、穴中の名所（神前小田、陣笠、鬼ノ豆、四重塔、釣鐘岩、魚ノ棚岩、瀬戸口、千畳敷二階、釜ノ段、飯鉢汁釜、鬼ノ力石）、穴の高十四五丈。又穴印より、宮地村、右に竜王ノ社、宮地川木橋、同村内字水田新町（駅場、町並人家八十軒）、左中津井道追分、山田村、水田川歩行渡、水田川端に打止終。	一五〇
	（12）	宮地村字水田新町	同　真庭市	小坂屋八太郎 久米屋新五郎		
22	昼休	鹿田村字鹿田宿	同　真庭市	庄屋宮川太左衛門	宮地村字水田新町出立。山田村、水田川端より、字境村、関川木橋、国界、美作国真島郡関村、一色村、水田川板橋、中央界、栗原村、字和田、字古市場、与河内川、鹿田村字鹿田宿（駅場、町並人家八十八軒）、右尾原道追分、竹谷川土橋、水田川土橋、下方村、越谷川、字横郡、垂水村、左木山道追分、左禅宗仏土寺、左国師ノ宮、字落合町（町並続人家百五十七軒）、右岡山道、左久世道追分三辻に打止。右岡山道人家続山添にて水田川、勝山川落合あり、故に此所を字落合町と云。	一五〇
	（13）	垂水村字落合町	同　真庭市	酒屋金田四郎太夫		
23	昼休	中村	同　真庭市	勇吉	垂水村字落合町三辻追分より久世道測、下市瀬村、上市瀬村、開田村、福田村、大鹿川歩行渡、右勝山川、川向は大庭郡大庭村なり、中村、左竜野出張の陣屋、富尾村、惣村、大庭郡久世村原方、久世川（舟渡、勝山領にては高田川、又勝山川とも云）、字久世町（駅場）、津山街道に出四ッ辻迄測る。此より津山街道仕越。東川石橋、久世村原方・中島村界に打止。	一五〇
	（14）	久世町	同　真庭市	下見屋佐治兵衛		

宿泊日・旧暦	（西暦）	宿泊地	現・市町村名	宿泊宅	特記・天体観測	大図番号
24	（15）	勝山城下上町	同　真庭市	塚谷屋金田市郎右衛門	久世村原方字久世町四辻より勝山道測、右横町引込法華宗興善寺、右伯州街道追分、右典学館あり、右引込御役所あり、字河本、字山根、字黒尾、右上に牛頭天王社在、真島郡高田村字杉ヶ河原（馬立場）、字原方、高田村、同村内勝山城下市中、字新町横町（右に制札）、中町、右横町、化生寺道、此より引込曹洞宗玉雲山化生寺、旧跡殺生石（長二尺五寸計、幅八寸計）、境内に玉雲権現ノ社、左へ並て法花宗妙円寺云あり、真直に大手入口、勝山川上ノ橋渡、本郷村湯原道追分を歴て、右上に天満宮、字怒組、寺河内川土橋、字名草に繋終。それより勝山城下上町へ帰宿。	一五〇
25	昼休	柴原村	同　真庭市	庄屋貞吉	勝山城下出立。本郷村米子道追分より湯原道測、横部村、左引込一宮大明神社、神庭村、神庭川、正吉村、岡村、柴原村、真賀村、見尾村、仲間村字湯真賀止宿前に打止終。	一五〇
	（16）	仲間村字湯真賀	同　真庭市	本屋藤吉		一五〇
26	昼休	釘貫小川村	同　真庭市	喜助	仲間村字湯真賀止宿前より、枝上分、右大谷淵（深十尋）、枝牧分、土居村、左大山道追分、高田川土居橋、中央界、大庭郡釘貫小川村（駅場）、右久世道追分、瀬戸川、字横岩、久見村、社村、社川土橋、湯原道打止。此より式内神社へ打上。左八社別当神宮寺跡あり、本堂あり、大御堂と云、十一面観音。イ印を歴て式内横見神社打上、社前迄測る。又イ印より外式社へ打上、社前迄測る。式内長田神社、又式社小兎上神社、同合殿（壱粟神社、大笹神社、）。久刀神社、又イ印より、神社へ打上、枝本谷社前迄測る。式内二座合殿俗曰大社（刑部神社、佐波良神社）、それより社村へ着。	一五〇
	（17）	社村	同　真庭市	百姓九郎左衛門		一五〇
27	小休	田羽根村字古屋	同　真庭市	庄屋平右衛門	昨夜より雪、終日風雪（積一尺五寸程）。社村追分より湯本道測、下湯原村字ヤクリ、字山根（右に地蔵堂）、湯本村（温泉あり、湯壷四ツ、春夏秋は諸国より湯治人群集三線の音不絶と云）、湯壷上ノ山古城跡にて字湯山城と云、左に地蔵堂、田羽根川土橋、田羽根村（名産ロクロ細工）、字古屋（左に観音堂）、右に国師大明神社、字熊居坂、初和村、左古城跡字丸山、字橋向、別所川木橋、字田中、下長田村、枝野田、枝栃木、右に向田大明神社、右に地蔵堂、日暮に打止雪印を残。それより無測、下長田村枝西原へ着。	一五〇
	昼休	初和村字田中	同　真庭市	庄屋綱右衛門		一五〇
	（18）	下長田村枝西原	同　真庭市	庄屋十右衛門 百姓文蔵		一五〇

宿泊日・旧暦	(西暦)	宿泊地	現・市町村名	宿泊宅	特記・天体観測	大図番号
28	小休	下長田村字峠茶屋	同　真庭市	竜蔵	大雪。下長田村枝西原出立。下長田村字隠狭峠（別手伯州より横切来）より湯本道測、字峠茶屋（大雪風見合）、長橋川土橋、枝西原、枝山根ヶ市、本村打止雪印に繋終。それより無測、初和村、湯本村へ着。	一五〇
	昼休	初和村	同　真庭市	庄屋綱右衛門		一五〇
	(19)	湯本村	同　真庭市	玉屋嘉兵衛		一五〇
29	小休	針貫小川村	同　真庭市	喜助	湯本村出立。無測、針貫小川村、三坂越難所、十石峠、久世町着。	一五〇
	昼休	十石峠	同　真庭市	茶屋弁蔵		一五〇
	(20)	久世町	同　真庭市	下見屋佐治兵衛		一五〇
12月1日	(1・21)	上河内村字中村分	同　真庭市	酒屋忠左衛門	久世町出立。久世村原方・中島村界より津山街道測、中島村、又久世村原方、字下原、大庭村、大庭川土橋、三崎河原村、目木村、小川土橋、枝中原、名所高清水、字大内原、三崎河原村分郷中原分、字榎峠、上河内村、西谷川土橋、西谷分（立場）左制札前打止。此より右へ引込上河内本村字中村分へ着。	一五〇
2	(22)	坪井宿	同　津山市	大庄屋福本善兵衛	上河内村字西谷分制札前より、右備中道追分、久米北条郡（左側中北上村、右側坪井上村）、字梨木、字楽満、中北川、坪井下村枝鶴坂、左森の中に吉村大明神・高村大明神合社あり、字坪井宿（駅場）、左に出張陣屋、止宿前迄測る。此より仕越。坪井川木橋（字大渡と云）、又中北上村、坪井川、右側南方中村、左側中北下村打止。それより坪井宿へ帰着。	一四四
3	昼休	宮尾村字中須賀	同　津山市	酒屋林蔵	坪井宿出立。久米北条郡、左中北下村、右南方中村、昨日打止より、左右共南方中村字緑り場、坪井川、左側領家村、右側久米上村字茶屋、左側宮尾村、久米中村、左右宮尾村字中須賀（馬立場）、西西条郡神戸村、中川土橋（此川船通行）、院ノ庄村迄測る。此より後醍醐天皇旧跡打上。神戸村、右に古城跡字構ヶ城と云。左田地周八町計、堤の形あり、後醍醐天皇御皇居跡と言伝。備後三郎高徳碑前に打止。碑の後に桜古木跡あり。往古は院ノ庄村、中古神戸村と分る。又院庄村より、右八幡宮社、二宮村、右中川の中に名所ヲノコロ岩、二印迄測り、此より二ノ宮式内高野神社へ打上、社前迄測る。又二印より、字桜町（右側計人家続）、左名所宇那提森、碑有、後に椋木あり、周五囲計。西北条郡小田中村枝新田分、右並木外に徳守大明神旅所、紫竹川筋違橋、中央界、津山市中安岡町三辻、木戸向左柱に繋。それより津山城下堺町へ着。	一四三
	(23)	津山城下堺町	同　津山市	大年寄玉置源五兵衛		一四四

宿泊日・旧暦	（西暦）	宿泊地	現・市町村名	宿泊宅	特記・天体観測	大図番号
4	昼休	西一ノ宮村	同　津山市	百姓要助	津山城下堺町逗留測。市中限、字高石垣木戸右柱より、一ノ宮へ測、山北村、右畑中に字イバ山、左天台宗地蔵院、左八幡宮あり、山印を歴て惣社へ測。右に惣社の旅所字客舎と云、惣社村惣社、社前迄測る。正一位惣社大明神、中山太神宮即一ノ宮、高野大明神即二ノ宮、当社と一宮と二宮、此を作州三社と号す、三神会する所を客社と云、又南に烏帽子崎と云あり、小田中村と惣社村の界にあり、北に鉾立の石あり、小原村にあり、此往古祭礼の遺跡なり。又山北村山印より、小原村、西一ノ宮村字竜ノ口、右の宮川向は東南条郡東一ノ宮村なり、大華表高（二丈三尺）、倉吉道追分、左社坊天台宗真応寺、左馬場、右末社惣社殿、名所宮瀬川石橋、左名所児呼坂、一ノ宮神前に打止。式内中山神社、正一位中山太神宮と号。昼休西一ノ宮村、それより津山城下堺町へ帰宿。大手分一同出会。	一四三
	（　２４）	津山城下堺町	同　津山市	大年寄玉置源五兵衛		一四四

【本隊】

宿泊日・旧暦	（西暦）	宿泊地	現・市町村名	宿泊宅	特記・天体観測	大図番号
１２月５日	（　２５）	津山城下堺町	同　津山市	大年寄玉置源五兵衛	逗留測。一同一手津山市中測。西北条郡津山安岡町木戸より、芽町寺町、左天台宗高徳山大円寺、同真言宗愛染寺、右法花宗妙法寺、左禅宗寿光寺、西今町、左引込真言宗光岩寺、左臨済宗東海山本源寺、宮脇町を歴て、備前街道へ打出。右片側西今町、左田中川添、寺町、右浄土宗成道寺、同成覚寺、鉄炮町（市中限）、在分小田中村界に打止。又宮脇町より、田中川田中橋、右に制札、左に番所、右市中鎮守徳守宮、坪井町、左右三町目、二町目、元魚町を歴て、倉吉街道一ノ宮打上。田町、右堀端に添、右城内入口田町門、左一面藩中屋敷、市中田町限、字高石垣木戸、一宮測初に繋。 又元魚町より、ウ印を残、此より中川端へ打出。新魚町、右引込浄土宗妙願寺、吹屋町（人家限）中川端へ出打捨る。又元魚町より、二階町、堺町、左止宿測所、京印を残、比より備前岡山街道へ打出。小姓町（人家限）、中川端今津屋橋手前に打止。又京町京印より、左大手入口、伏見町、材木町、右引込一向宗本林寺、木戸、右に番所左に制札、宮川土橋、中央界、東南条郡橋本町、林田町、勝間田町、中町、左引込日蓮宗蓮光寺、西新町、東新町（市中限）に繋。帰宿。此所より江戸表へ用状を出。	一四四

宿泊日・旧暦	（西暦）	宿泊地	現・市町村名	宿泊宅	特記・天体観測	大図番号
6 ＊	昼休	押淵村字小谷	同　津山市	庄屋六郎右衛門	又手分。永井他三名、西川添岡山へ測。伊能他四名、津山城下堺町出立。小姓町中川端今津屋橋手前より岡山道を測、直に久米南条郡横山村、中川今津屋橋、字塚原、字塚原尻、小桁村、右古城跡字神原山。右天台宗小桁山極楽寺、金屋村、右歯岩宮小社、右屏風岩あり、押淵村、左中川の内に絶壁の巌島あり、字川中山王と云、頂に山王の社あり、押淵川土橋、字小谷、字下組、塚角村字大戸原、小谷川板橋、左中川の向、周佐村、大戸下村枝原、本村止宿入口に打止。此より測所打上。恒星測定	一四四
	（２６）	大戸下村	同　美咲町	庄屋又十郎		一四四
7 ＊	昼休	吉ヶ原村	同　美咲町	庄屋平左衛門	大戸下村出立。本村止宿入口より、大戸川歩行渡、栗子村、小瀬村、小瀬川土橋、久木村、右山根に八王子権現ノ社、久木川、藤原村字土居尻、字丸山、右に八幡宮社、左に国師ノ社、中川舟渡、中央界、勝南郡吉ヶ原村（人家百十軒町並家続）、左森中に八幡ノ社、左引込山添に法花宗永昌山本経寺、川端に吉ヶ原御番所、往来船運上所なり、左倉敷街道迫分、枝坂、字川戸、飯岡村、中川舟渡、中央国界。備前国赤坂郡周匝村、右古城跡字本丸城。周匝本村字周匝町（駅場、人家続百二十軒）、三辻岡山街道へ打止（即測所）。	一四四
	（２７）	周匝町	同　赤磐市	上町名主八郎左衛門 九郎右衛門		一四四
8 ＊	昼休	来光寺村	同　赤磐市	庄屋円治郎	周匝町出立。同所三辻より岡山道を測、右横町行当と当所陣屋の中門也、左倉敷街道追分を歴て、右に法花宗蓮現寺、右に諏訪宮あり、福田村（駅場）、枝小枝分、左吉備川筋、和気道追分を歴て、高田川歩行渡、磐梨郡稲蒔村枝高田（馬立場）、来光寺村、石村枝二軒屋、八島田村街道打止。此より測所打上。恒星測定	一四四
	（２８）	平山村	同　赤磐市	組頭次惣右衛門 百姓才九郎		一四四
9 ＊	昼休	出屋村	同　赤磐市	平兵衛	平山村出立。磐梨郡八嶋田村より、赤坂郡山手村、左佐伯道追分、枝堀切、惣分村字大上、字北浦、字本堂、字宮ノ前、右に鎮守八幡宮、字宗信、字下分、惣分川、右金川誕生寺道追分、小原村、右森中に天満宮ノ社あり、出屋村、多賀村、西軽部村枝鳴戸、字鍛治屋、砂川、枝保志田、町苅田村（駅場）止宿前に打止。恒星測定	一四四
	（２９）	町苅田村	同　赤磐市	庄屋喜太郎 百姓庄吉		一四四

宿泊日・旧暦	（西暦）	宿泊地	現・市町村名	宿泊宅	特記・天体観測	大図番号
10＊	（30）	弁佐村	同　岡山市北区	大庄屋安藤佐平治	町苅田村止宿前より、苅田川石橋、東窪田村、西窪田村字赤根ヶ原、字高塚、字重友、下仁保村、西中村横井尻、字光善寺、小川、善応寺村字三池、和田村枝口和田、馬屋村枝片山を歴て、旧国分寺跡へ打上。右に国分八幡宮、国分寺旧跡に至て打止（跡に五重石塔高一丈計）。又馬屋村枝片山より、右新義真言宗金光山善教寺円寿院（当時の国分寺代にて六部納経所）、牟佐村ム印を歴て止宿測所打上。又ム印より仕越、朝日川端に出る、字渡場（右に番所船運上所）、岡山街道打止を歴て、川筋打上、枝大久保、字大戸、字下分にて打止。それより牟佐村へ帰着。	一四五
11＊	昼休	北方村中井	同　岡山市北区	百姓時之助	牟佐村出立。同村字渡場より、朝日川船渡、御野郡河本村内宮本字二ノ樋、河本村平瀬、原村、宿村、三野村字鶴茶屋を歴て、八幡八幡宮へ打上。朝日川、川中島、又朝日川分水、上道郡中島村、八幡村、八幡宮社前に打止。又三野村字鶴茶屋より、北方村内四日市、同中井、金川街道に出、碑に繋。それより無測岡山城下下ノ町へ着。手分と合宿。	一四五
	（31）	岡山城下下ノ町	同　岡山市北区	福岡屋吉郎兵衛		一四五

【支隊】　福田通岡山測

12月6日	昼休	下打穴中村	同　美咲町	庄屋銀左衛門	津山市中限小田中村より福田通岡山へ測、枝広原分、広原橋（中川に掛）、川中郡界、久米南条郡北村、一方村、皿村、名所久米皿山（古城跡）、字細間、高尾村字安広、福田村、古城跡、新城川土橋、高清水坂、枝河内田、父呼坂、久米北条郡下打穴ノ中村、久米南条郡原田三ヶ村組原田、字関屋、字亀ノ甲（立場）、字持長、字蕨、稲荷山、古城跡。西幸村人家下に打止。	一四四
	（26）	西幸村	同　美咲町	庄屋新右衛門		一四四
7	（27）	下弓削村	同　久米南町	大庄屋河原弥治郎	西幸村より、右側西幸村、左側小原両村（南村田畑、北村人家）入会、北庄里方村（左引込坪井湖あり）、江戸ヶ峠を歴て、誕生寺へ打上、京都知恩院末浄土宗律栃社山誕生寺、本堂、円光大師自作座像一丈四尺、什物釈迦文殊普賢三軸、円光大師画像（蓮生法師刻）、その外略之。江戸ヶ峠より、片目川小流、南庄両村（東村西村）入会、片目川土橋、上弓削村字大屋、字河原、下弓削村、塩内川土橋、汐外川土橋、下弓削村・上二ヶ村界に打止。	一四四

宿泊日・旧暦	（西暦）	宿泊地	現・市町村名	宿泊宅	特記・天体観測	大図番号
8	昼休	下神目村	同　岡山市北区	庄屋万治郎	下弓削村出立。下弓削村・上二ヶ村界より、上二ヶ村、字橋本、下二ヶ村、全間川土橋、字屋敷平、宮地村、神目中村字西畑、字松尾、下神目村、福渡村字峠、芭蕉塚（さまざまのこと思い出すさみしかな）、福渡村（市場駅、本駅に非）、西川舟渡、中央国界、備前国津高郡建部上村地内川端に打止。	一四四
	（２８）	福渡村市場	同　岡山市北区	庄屋丈四郎	福渡村出立。建部上村西川端より、字八井、茶臼山（古城跡）、宮地村、市場村、田地子川土橋、桜川土橋、中田村、建部新町、西原村字江尻、字簑地坂峠に打止終る。	一四四
9	（２９）	中田村建部新町	同　岡山市北区	本陣友太郎 惣五郎	西原村簑地峠より、宇甘上村枝下畑村、菅村字簑地、右建部・左宇甘道追分碑に繋。（此追分は去未閏二月廿八日足守より金川へ測量の時、此碑に繋、仍て此より先重測）。下田村、宇甘川、金川村、又宇甘川、左古城跡臥竜山玉松城と云。金川村（本村、立場）、去る未年止宿河内屋喜代太前測所に至る、宇甘川仮橋、河内村枝富谷、枝原、小山村、十谷道追分重測限。此より朝日川端測。野々口村、中牧村枝十谷人家下に打止終る。	一四四
10	昼休	金川村	同　岡山市北区	百姓孫右衛門		一四四
	（３０）	中牧村枝十谷	同　岡山市北区	本陣百姓伝治郎 百姓武助		一四四
11	昼休	鍋谷村	同　岡山市北区	庄屋伝三郎	中牧村枝十谷人家下より、枝湯須、朝日川郡界湯須ノ渡と云、赤坂郡大鹿村、鍋谷村、枝河瀬、牟佐村枝大久保、同村内字上分、字下分人家前（別手岡山街道渡場より川筋を打上残す）に繋終る。同所より乗船旭川を乗下し岡山城下へ着。両手出会。	一四四
	（３１）	岡山城下下ノ町	同　岡山市北区	福岡屋吉郎兵衛		一四五

【本隊】

宿泊日・旧暦	（西暦）	宿泊地	現・市町村名	宿泊宅	特記・天体観測	大図番号
12月12日	後手小休	門田村枝峠	同　岡山市中区	伯耆屋儀兵衛	岡山城下下ノ町出立。【後手】岡山市中西中島、京橋、東橋詰より、（巳年の重測）、中嶋橋、東中嶋町、小橋、小橋町三辻追分迄重測。是より西大寺村道新測。字蛇谷、門田村、左臨済宗岡山三友寺、真直上に東照宮の御神廟（別当天台宗東光山少寺利光院）、左浄土宗光照山台崇寺円月院、左引込玉井宮社、左真言宗幣達山大徳院能満寺、左五百羅漢道、枝峠、湊村、左天台宗瑞光山仏心寺、枝池ノ内、円山村、枝四軒屋、山崎村、倉安川土橋（舟往来あり）、字新橋、福泊村、右畠中に沖新田人家あり。右山添円山村に臨済宗護国山曹源禅寺、国主の菩提寺。海面村、字出村、先手初に繋。昼休庄屋安太郎、それより無測西大寺村着。	一四五
	後手昼休	海面村字出村	同　岡山市中区	庄屋安太郎		一四五
	（2・1）	西大寺村掛ノ町	同　岡山市東区	坂口屋松左衛門 五明屋惣治郎	【先手】海面村字出村より、中川村、悪水川土橋、枝益野、松崎新田村、枝小林、広谷村、古川用水土橋、中野村、砂川土橋、枝新橋、西大寺村、新町、西町、一日市通・川端道追分、西大寺門前に打止。左に真言宗金陵山西大寺、本堂十一面観音、坊中六院（観音院、安楽院、普門院、円満院、千手院、持命院）。此より掛ノ町、止宿坂口屋松左衛門前測所迄測る。恒星測定	一四五
13	（2）	坂根村	同　備前市	庄屋三郎右衛門 百姓吉右衛門 百姓庄治郎 百姓源五郎	西大寺村出立。【後手】西町西大寺門前より、西大寺川通、向一日市測、市場町、福田町、上福田町、川端、原村、字河本、久保村、左八幡宮、枝鴨越、鴨越峠、西隆寺村、百枝月村、枝岡、同中、百枝月・内ヶ原村界、先手初に繋。【先手】百枝月・内ヶ原村界より、吉備川筋、津山道測、内ヶ原村、寺山村枝本庄、右吉備川向に邑久郡福岡村殿屋敷と云あり、往古黒田筑前守居所、その後筑前に城を築故、筑前城下を福岡と云と、西祖村、一日市村、長崎街道へ出迄測る。是より巳年重測。一日市村（長崎街道馬立場）、左本陣難波勇吉前、吉井村街道渡場追分を歴て石津宮へ打上、社前迄測る。石津宮、黒田家建立と云。黒田家寄進の鎧拝殿にあり。境内に嵯峨天皇腰掛石あり、石津宮へ行幸のときのよし。又街道渡場追分より、倉安川水門、磐梨郡大内村、左二古城跡、和気郡坂根村枝宇治、津山道渡場打止。比より測所打上。吉備川舟渡、止宿前測所に打止。	一四五

宿泊日・旧暦	(西暦)	宿泊地	現・市町村名	宿泊宅	特記・天体観測	大図番号
14	後手昼休	吉原村	同　赤磐市	幾之助	坂根村出立。【後手】坂根村渡場より、磐梨郡大内村枝鵜居、南方村枝三谷、二日市村枝下村、梅保木村内枝保木、字熊野、保木・徳富村界、先手の初に繋終。左に熊野社、それより無測吉原村、昼休。【先手】梅保木村・徳富村界より、左熊野山古城跡、字熊野、字山ノ谷、津山・倉敷道追分あり、小川土橋、釣井村、河田原村、吉原村本村、原村、元恩寺村、又原村、吉備川舟渡、川中郡界、和気村和気町（駅場）、三ッ石道追分に打止。恒星測定	一四四
	（3）	和気村和気町	同　和気町	本陣秋山十右衛門 丸屋源助		一四四
15	先手昼休	苦木村字三門	同　和気町	庄屋平吉	和気村和気町出立。【後手】和気町三ッ石街道追分より、益原村、右天神山古城跡、天瀬村字吹上、河本村竜ヶ鼻村、矢田村人家前先手の初に繋終。【先手】矢田村より、左吉備川、向佐伯郷、米沢村、字堀、字井ノ口、谷川、苦木村字三門、塩田村、塩田川土橋、吉備川舟渡、中央界、赤坂郡福田村岡山道追分に繋終る。恒星測定	一四四
	（4）	周匝町	同　赤磐市	本陣上町名主八郎左衛門 六郎兵衛		一四四
16 *	（5）	津山城下堺町	同　津山市	大年寄玉置源五兵衛	手分。永井他三名、周匝町より、倉敷向測。伊能他四名、周匝町より乗船、塚角村より上陸、津山城下着。止恒星測定	一四四
17 *	昼休	福力村	同　津山市	庄屋太左衛門	津山城下出立。東南条郡野介代村枝太田分、播州・因州街道追分より播州道測、河崎村字金田（馬立場）、勝南郡河辺村、加茂川金田橋、右国分寺道、字尾鼻、西吉田村、左側計新田村字大橋、字一里塚、広戸川土橋、西吉田村字大崎、左側計福力村大崎、右側計金井村、左側福力村、昼休、右側計中原村（立場）、字半明、左側計池ヶ原村、左山添池ヶ原村枝義経、（往古新宮城に平家籠城の節源義経攻寄、此所に陣を取、その所を義経の陣場跡と云、今義経大明神の小社あり）、黒坂村字下芝、字押田、畑屋村、勝間田村、左に西王子権現社、滝川土橋、勝間田村（本村駅場）、勝間田宿止宿前打止。恒星測定	一四四
	（6）	勝間田村	同　勝央町	庄屋富右衛門 明石屋半兵衛		一四四
18 *	（7）	楢原上村	同　美作市	年寄佐七郎 百姓政治郎 百姓只治郎	勝間田村止宿前より、右倉敷道追分、左加茂道追分、字立石、右側岡村、左右岡村字茶屋平、左に溜池、上相村字大畑、中尾村、又上相村字四ッ辻、左因州道追分、北山村西分、右倉敷道追分、右に古城跡字三星山。北山村東分、小川土橋、梶並川土橋、字日ノ神、別手残に繋。此より別手昨日測量場所重測。英田郡楢原中村字日ノ神、左田殿道追分に繋（重測、是より新測也）。楢原上村（馬立場）、止宿前測所に打止終。恒星測定	一四四

宿泊日・旧暦	(西暦)	宿泊地	現・市町村名	宿泊宅	特記・天体観測	大図番号
19 ＊	（8）	土居村字土居町	同　美作市	本陣良之助	楢原上村測所より、左に山王七社権現社あり、字上宿、右に溜池、字近庄、下福原村枝市ノ峠、峠村、川北村枝今在家、吉野川土橋、川崎村枝江見（立場）、右倉敷道追分、左小原道追分、上福原村、左杉坂越追分、字蔭平、字益田、竹田村字快長、枝脇田、字久門、芳尾川木橋、枝岩戸、土居村枝平坂、一里塚、山家川木橋、字西ノ惣門（駅場）、字土居町止宿前測所に打止。	一四四
20 ＊	昼休	力万村	兵庫県佐用町	常助	昨夜より雪、終日雪降。土居村止宿前測所より、字東惣門、名所万能ヶ原（郭公近く聞つる万能ヶ原、秋は山田になく鹿の音）、右に梅ヶ香塚、芭蕉塚（梅が香にぱっと日の出る山路かな）、字万能ヶ峠国界、播州佐用郡西大畠村、大畠川木橋、枝判官、字樫ヶ淵、大畠川木橋、須安村、大畠川、力万村（立場）、大畠川、金屋川、上月村枝上在所、右に古城跡太平山、早瀬村、姫路道・赤穂道追分、佐用川端を歴て佐用川に添赤穂道を測、佐用川仮橋、又上月村、安志領仁位村、佐用川仮橋、円光寺村、佐用川仮橋、久崎村（川岸場、仮立場）、止宿入口打止。此より測所打上。	一四四
	（9）	久崎村	同　佐用町	百姓藤治 庄屋又左衛門		
21 ＊	昼休	苔縄村字中村	同　上郡町	久右衛門	久崎村止宿入口より、佐用川、左に熊見川・佐用川落合（当村より川下は舟通行）、赤穂郡小赤松村、千種川、平水船渡（旅人舟賃三銭）、大酒村字間原、左に鎮守大酒大明神社、国見村、楠村、赤松村、左山添に真言宗松雲寺、左に赤松円心屋敷跡、今は畑也。左山添に鎮守八幡宮ノ社、左山上に古城跡字白旗山（本丸、二ノ丸、三ノ丸）、千種川舟渡、苔縄村字中村、右川向に古城跡字駒山、千種川船渡、苔縄村・大枝新村界（論所）、大枝村、上郡村、鞍位川、上郡村（津出場）人家続二百五十三軒、止宿入口打止。此より測所打上。恒星測定	一四四
	（10）	上郡村	同　上郡町	本陣西脇甚十郎 庄屋七兵衛		
22 ＊	（11）	有年宿	同　赤穂市	本陣柳原与惣左衛門	上郡村止宿入口より、与井村字殿本、与井新村枝土手、釜島村字下山、原村枝西川（西国街道有年川渡場）に出る。此より西国街道巳年の重測。有年川船渡、赤穂郡有年宿人家入口右に制札前に打止終。	一四四

宿泊日・旧暦	(西暦)	宿泊地	現・市町村名	宿泊宅	特記・天体観測	大図番号
23 ＊	(12)	久崎村	同　佐用町	百姓藤治 庄屋又左衛門	有年駅出立。無測、大酒村（昼休）、久崎村着	一四四
24 ＊	(13)	佐用宿	同　佐用町	本陣岡田与一右衛門 津山屋六郎兵衛	久崎村出立。無測、早瀬村、赤穂道・姫路道追分、佐用川端より、字茶屋、右側山脇村、又早瀬村、真盛村、山脇村、佐用村、佐用川、枝山平、字佐用宿（駅場）、左杉坂越道追分、止宿測所前左佐用姫社道追分打止。此より佐用姫神社へ打上。枝大願寺、円応寺村、又大願寺、又佐用村、佐用川仮橋、塩川、式内佐用姫神社社前に打止。恒星測定	一四四
25 ＊	昼休	林崎村	同　佐用町	庄屋善治	佐用宿測所前より、右引込陣屋、字佐用坂峠、下徳久村、右赤穂道追分、枝北山、枝大田井（立場）、左因州道追分に繋。此より子方引込東徳久村内式内天一神玉神社、熊見川仮橋、林崎村、新宿村字卯峠、左引込十二社権現ノ社あり、乃井野村、左引込陣屋、スクヒ川、三ヶ月村枝折口（本郷川仮橋）、三ヶ月（本村駅場）、字新町、中町止宿前打止終。	一四四
	(14)	三ヶ月村字中町	同　佐用町	本陣宇田五郎兵衛 百姓市左衛門		一四一
26 ＊	(15)	千本宿	同　たつの市	本陣内海茂右衛門 庄屋五郎左衛門	三ヶ月駅出立。字中町測所より、上町、左山頂に妙見社、揖西郡下芥原村枝小谷、字相坂峠、鍛冶屋村枝相坂（馬立場）、枝矢ノ原、牧谷川水なし、町屋村、千本村枝倉瀬（駅場）、字千本宿人家続百七十四軒、谷川石橋、左制札止宿前測所迄測り。此より仕越。栗柄川水無、千本下村枝茶屋、能地村打止。	一四一
27 ＊	昼休	觜崎村	同　たつの市	庄屋四郎右衛門	千本宿出立。能地村より、大屋村枝出茶屋、栗柄川、平野村枝茶屋（馬立場、右古街道追分）、揖東郡新宮村、新宮町（立場）、字坂本町、左に陣屋、左山崎道追分、右に一向宗蓮乗寺、横町左制札、左一向宗、又新宮村字立町、井ノ原村枝砂子、右竜野道追分、北村、觜崎村、揖保川渡場手前、姫路道・竜野道追分迄測る。此より竜野道を測。左側佐野村枝道下、右側觜崎村本村、右古街道、左右佐野村、栗柄川、北竜野村字坂、字新町、揖西郡竜野城下市中入口埋石に繋、曲角迄丑年重測。又觜崎村追分より、揖保川舟渡、觜崎宿（村、左制札、駅場問屋あり）、止宿前打止終。	一四一
	小休	竜野城下	同　たつの市	林田屋藤右衛門		一四一
	(16)	觜崎宿（村）	同　たつの市	本陣松原五郎右衛門 百姓松右衛門		一四一

宿泊日・旧暦	(西暦)	宿泊地	現・市町村名	宿泊宅	特記・天体観測	大図番号
28 ＊	(17)	飾西宿	同　姫路市	本陣助太夫 内海屋才助	鴨崎宿（村）止宿前より、大住寺村字出茶屋、奥村、左側北横内村、右側西横内村、横内村、右鵤道追分、上横内村、西鳥井村、上岡川水無、田中村、野部村字東横内新田、追分村、左林田道追分を歴て字追分坂峠、下伊勢村枝伊勢茶屋（立場）、石倉村、相野村、打越村、右に西池、飾西村、左右人家続、右飾西村駅場、左町田村、飾西村本陣前打止終。	一四一
29	(18)	姫路城下福中町	同　姫路市	本陣井上庄兵衛	飾西宿止宿前より、右側飾西村、左側町田村、左書写山道追分、左右飾西村、飾西川水無、安室郷九ヶ村持、街道地先計、小塩川水無、下手野村、西国街道に出、右因幡、中竜野、左長崎道追分碑に繋。当年測量打止終。それより西国街道を姫路城下福中町へ着。手分と出会一同一宿。恒星測定	一四一
30	(19)	同	同	同	姫路城下逗留。越年。	一四一

【支隊】　倉敷向測

12月16日		昼休	下倉敷村	同　美作市	庄屋儀兵衛	周匝町倉敷街道追分より、吉備川舟渡、中央郡界、和気郡塩田村、それより国界、美作国勝南郡高下村、右側英田郡奥村、左側勝南郡高下村、左右英田郡、上奥村枝天神、福本村枝小原、尾谷村枝小原、下倉敷村、枝樫村、枝畑沖、吉野川舟渡、郡界、勝南郡湯郷村、奥大谷川、湯郷本村（温泉あり、此温泉は貞観二戊年より湧始）人家中に打止。	一四四
		昼休	湯郷村	同　美作市	百姓清吉		一四四
17		昼休	楢原中村	同　美作市	庄屋清右衛門	湯郷村人家中より、左に名所塩垂山、右古城跡字林野、入田村、左三星山古城、梶並川土橋、郡界、英田郡倉敷村、江戸街道追分、三海田村枝宮ノ脇、楢原下村、沢村、分楢原中村、北山村、梶並川端津山より来る、江戸街道に出、字日ノ神迄測る、此より江戸街道の内別手の測分を少し測る。字日ノ神人家前、楢原中村、田殿道追分を歴て田殿道を測。楢原中村、右鞍懸古城、田殿村、同村内合田、同一色分人家中に打止終。	一四四
		（6）	田殿村一色分	同　美作市	百姓久治郎 次兵衛		一四四
18		昼休	馬形村	同　美作市	庄屋直助	田殿村一色分人家中より、字日谷、字四ノ谷、馬形村、馬形川小流、字上馬形、粟井中村本村人家中に打止。	一四四
		（7）	粟井中村	同　美作市	庄屋六郎右衛門		一四四

宿泊日・旧暦	(西暦)	宿泊地	現・市町村名	宿泊宅	特記・天体観測	大図番号
19	中飯	赤田村	同　美作市	組頭三郎右衛門	粟井中村人家中より、同所古城跡、鷺巣村、地蔵峠、五名村、関戸村、粟原村、野時村、赤田村、古城跡国木山、川上川、立石村枝長田、下庄村枝浜枝入野、枝中土居、枝半坂、枝大当、下町村竹林山、古城跡、枝土居、出張陣屋あり、吉野川土橋、辻堂村、右播州街道追分を歴て坂根通因州街道を測。辻堂本村（駅場、世に云長根）に打止。	一四四
	（8）	辻堂村（長根）	同　美作市	庄屋嘉右衛門		
20	昼休	影石村	同　西粟倉村	庄屋三郎兵衛	辻堂村より、下町村、渡川土橋、枝小河、常州土浦、古町村（駅場、世に小原とも云）、枝八幡、江ノ原村枝槙山、筏津村、長尾村枝引谷、影石村、字谷口、字猪ノ部、吉野川土橋、坂根村、人坂峠、駒返村より打出しに繋終る。	一二八
	（9）	坂根村	同　西粟倉村	柳屋嘉兵衛		一二八
21	（10）	古町村（小原）	同　美作市		坂根村出立。無測古町村へ帰宿	一二八
22	昼休	大畠村	兵庫県佐用町	百姓市左衛門	古町村出立。辻堂村播州街道追分より、今岡村、上庄村、宮本村枝高岡、中山村、釜坂峠、字釜坂、字妙見坂国界、播州佐用郡大畠村、字王子、豊福村、右側正吉村枝新田、左側友延村、白谷川土橋、又正吉村．平福村（平福市中、北新町、上町、中町、下町、南新町）、宗行村、金倉橋土橋、口長谷村に打止終。	一四四
	（11）	平福村上町	同　佐用町	本陣新右衛門		一四四
23	（12）	横坂村	同　佐用町	真言宗常光寺	平福町出立。口長谷村より、右上方・左宍粟道追分を歴て本道姫路街道測、下徳久村へ打出、長谷川土橋、横坂村枝谷口、口金近村字梨子河内（立場）、カマス峠、下徳久村字カマス峠、枝重久、枝大田井（立場）、右因幡・左津山道追分に打止。それより横坂村へ帰着。	一四四
24	（13）	下三河村	同　佐用町	庄屋金兵衛	横坂村出立。口長谷村、宍粟道追分より宍粟道を測、口長谷村、長谷川土橋、枝中島、奥長谷村枝横尾、枝中村、枝田坪、桜峠、郡界、宍粟郡中三河村、熊見川仮橋、下三河村人家中に打止終。	一四四
25	中飯	青木村枝比地町	同　宍粟市	庄屋与兵衛	下三河村人家中より、土万村、鷹巣川土橋、葛根村、切窓峠、青木村枝比地町、菅野川土橋、枝三田、菅野川、高下村字大谷、字吉藤、字皆森、字広岡、字保工、字谷、字米山、市場村、木谷村、加生村、門前村門前町、左古城跡、山崎村、左八幡宮、山崎町、外云宍粟、西新町本町、右の方大手、駅場、山田町、一ノ宮道追分に打止。	一四一
	（14）	山崎町本町	同　宍粟市	橋屋佐兵衛		一四一

宿泊日・旧暦	(西暦)	宿泊地	現・市町村名	宿泊宅	特記・天体観測	大図番号
26	昼休	杉ヶ瀬村	同　宍粟市	伝四郎	山崎町内山田町一宮追分より、一ノ宮へ打上、福原町、出水町、富土野町、山田村、庄能村、伊沢川仮橋、三津村枝観源寺、枝下三津、五十波村、五十波川仮橋、字寺ヶ市、田井村、伊保川仮橋、杉ヶ瀬村、左伊保川向与位村の式内与比神社遠測、木ノ谷村、神戸皮多村、安黒村、伊和村、須行名村字上り立、一宮神前に打止。須行名村一ノ宮、式内伊和座大名持御魂神社。	一四一
	(15)	須行名村	同　宍粟市	大庄屋春名庄兵衛	須行名村出立。無測にて山崎町内山田町迄戻り、一ノ宮追分より姫路道を測、左日蓮宗静明山青蓮寺、清水口木戸、山崎、山田村、右新宮道追分、中広瀬村、船元村、伊保川舟渡、川中央堺、須賀村、蟹ヶ沢村、安志町市中、西町（駅場并立場）、右姫路・左戸倉道追分にて打止。	一四一
27	(16)	安志町西町	同　姫路市	本陣清水平右衛門	安志町出立。無測、飾西郡野畑村より戸倉街道を安志町へ逆測。宍粟郡三森村枝春、安志町、安志川仮橋、右に大手門、西町、林田道追分に繋。此より林田通姫路へ測。長野皮多村、東塩野村、安志川、植木野村、安志川、狭戸村、揖東郡松山村枝井ノ口、枝茶屋、新田、上山本村枝西三軒屋、枝大谷、六九谷村枝高梨、六九谷村、下山下村、林田川向、奥佐見村内八幡八幡宮遠測、三村大和。それより林田町内市場町、本町の内にて打止終る。	一四一
28	昼休	松山村枝茶屋	同　姫路市	弥右衛門		一四一
	(17)	林田町本町	同　姫路市	姫路屋助太夫	林田町本町より、八軒町、林田構村川原町、林谷村枝河原垣内、野部村、追分村、因州街道・林田道追分に繋終。それより無測、姫路城下着。両手出会。	一四一
29	(18)	姫路城下福中町	同　姫路市	本陣井上庄兵衛		一四一

小説「伊能忠敬と四人の妻」を書き終えて

香取　淳（本名　樋口宗司）

数年前、孫娘の夏休みの課題に付き合って佐原の忠敬記念館や旧邸を訪問した。遠方からやってきた小学生のためにと思い立ったその行動が、私にとって伊能忠敬に強い関心を寄せる契機になった。それまでは忠敬について、「日本の地図を初めて作った人」といった程度の知識しか持っていなかったが、館内に展示された測量機器や絵地図などを見学するうちに素朴な疑問が生まれてきた。下総佐原の一商人に過ぎなかった忠敬が、何故、日本はもとより世界の人々が刮目するような偉業を成し遂げたのか？　その疑問は記念館を出た後も脳裏から離れず、むしろ膨らんでゆくばかり。そして、彼の幼少期が謎めいていて、青壮年期の生き様もよく分からない。とりわけ四人もの妻がいたらしいこと等を知ってゆくと、それらの空白部分を埋めてみたい……という願望が沸々と湧いてきたのである。

そのような折に、古書店で『新考　伊能忠敬』（伊藤一男著　崙書房）に出遭った。著者は故人であるが、忠敬が育った神保家に近い横芝光町の歴史研究家で、忠敬の生立ちや幼少期の様子を詳しく記述している。この著書が「伊能忠敬と四人の妻」を執筆する直接のきっかけとなったのだが、果たしてフィナーレまで書き上げることが出来るか否か、確たる自信はなかった。その不安を抱えながら、ｗｅｂ同人誌『文芸草の丘』の第17号に第1回（忠敬が伊能家に婿入りするまで）を発表した。幸いなことに、書き進む過程で多くの資料に遭遇。具体的には伊能忠敬翁顕彰会の酒井右二氏の研究報告、さらには伊能忠敬研究会誌の膨大な報文等々を参考に書き進め、今年6月に発行したｗｅｂ同人誌の第22号で無事に完結。同時に単行本としてオンデマンド出版を果たし、アマゾンと丸善ジュンク堂で発売する運びとなった。

執筆に当たっては、忠敬が生まれた九十九里浜の小関、育った小堤や多古そして佐原などの現地調査を何度も実施。さらに資料蒐集等の期間を合わせると四年以上もの歳月を要したが、その間に新たに見出したり気付いたりしたことが多々あった。それらの主な点を幾つか述べたいと思うが、歴史小説は言うまでもなく著者の想像による虚構であり、古文書等に基づいた史実ではない。その点を予めお断りしたうえで、物語の根幹になった本稿をお読みいただければ幸いである。

一．達（ミチ）の幼名について

伊能家9代目当主の長由に嫁いだ民が、夫長由の死により暇を出され、娘の達と共に南中村の実家に戻されたことは疑う余地がない史実であろう。民が実家に戻された理由は、日蓮宗に固執して伊能家の真言宗に改めようとしないことにあった。長由が逝去したとき、江戸から戻ってきた7代目当主の昌雄は、達を跡取り娘として乳母に預け、民だけを実家に戻そうとした。しかし、乳飲み子であった達を母から遠ざけることは無慈悲に過ぎるということで、母の民と共に多古藩南中村の実家平山家に戻されたようである。

一方、平山家は、日本（にちほん）寺の山門から南東に少し坂を下ったところにあり、兄の季忠（すえただ）が当主を務めていた。平山家は南中村を代表する名家であり、日蓮宗の高僧を数多く輩出してきた家柄でもある。加えて、日本寺の境内には中村談林という僧侶の学舎もあり、法華経一色の境遇に育った民が日蓮宗を深く信奉し、朝夕に法華経を唱えるのはごく自然な成り行きであろう。

私は執筆する前に多古町の日本寺や中村談林の跡地、平山家があったと思われる谷地などに足を運び、多古藩の陣屋跡に近い町の図書館も訪ねてみた。そこで手に取った多古の郷土史の中に、この地を長く支配した平山家の家系図を見出した。

平山家の祖先は武蔵平山（現東京都日野市）に始まる中世武士の末裔で、15世紀の中頃にこの地に移り住み、北中の壺岡城に居城したと伝えられる。しかし、天正18年（１５９０）以降、最後の城主となった平山季邦は武士の身分を捨てて郷士となり、その子息たちは郷内各地に分散・居住し、「平山五軒党」と称される草分け百姓になってゆく。その宗家である南中の平山家は、以来この地の指導者であり続け、領主から称氏帯刀も許されていた。

その平山家の家系図に、伊能長由に嫁した民には『みつ』という娘がいたことが記されている。この30代以上にもわたる家系図を見て、私は、彼女は平山家で『みつ』として育てられたものと確信するに至った。そして、みつが十四歳になったとき、佐原の伊能家に跡取り娘として呼び戻され、伊能家の血を引く景茂と結婚。その折に、父親代わりをも務めた伯父の季忠が餞に達という名を授けたものと推定したのである。いま振り返ってみると、『達（みち）』という名は常人には中々思いつかないが、林鳳谷に師事して漢学に長けていた季忠ならではのネーミングではなかったか……と独

り納得している次第である。

他方、近著『近世佐原伊能家の記録【伝家［　］】—忠敬前後の家と地域の諸相—』に、達の初名についての研究報告が発表されている。その報文によると、達は、出生時に石（いし）と命名されたという。この新説を採れば、達の初名は石が正しいのかも知れない。しかし、夫長由の急な死により婚家を追われた民が、伊能家に対して好ましい感情を抱くであろうか。まして、婚家が付けた石という名を、後生大事に守り続けたとは思いにくい。やはり達は、十四歳で佐原の伊能家に跡取り娘として戻るまでは、伯父の平山季忠の家で『みつ』として育てられた、と考えた方が自然に思える。

二．三治郎はギフテッドであった
～婿入り後の病も含め～

忠敬の幼少期のエピソードを知れば、彼が『ギフテッド』であったことはほぼ間違いないと思われる。とは言っても、ギフテッドという言葉や概念が、まだよく知られてはいないので、先ずギフテッドについて述べることにしよう。

ギフテッドとは天から与えられた優れた能力、日本古来の言葉では「天賦の才」を持った子供と言えよう。その特徴は、知能の発達がとびぬけて早く、独創的ではあるものの感受性が鋭いため、普通の子供のように育ててもうまくはゆかない。とくに、わが国の場合は義務教育により、すべての児童に画一的な教育を施すので、ギフテッドは学校や地域社会、家庭においてさえも居場所を失うことが多い。そのため、最近ではギフテッドの子を持つ親たちは、カナダ、アメリカ等のギフテッド教育の先進国に我が子を留学させて、天賦の才を伸ばすような取り組みを始めているようである。

とは言え、読者にはピンと来ないであろうから、もう少し理解しやすい実例をご紹介しよう。それは、私が大学を卒業して、製薬会社に就職して間もない頃のことである。営業職として仙台市に配属された私は、上司で大学の先輩でもある課長からから頼まれ、ご子息のF君にスキーを教えることになった。F君はその時中一であったが、小学校までは大阪で育ったためスキーの経験がまったくなかった。そこでF君を山形の蔵王温泉に一泊で連れて行き、スキーの初歩を教えたのである。F君はおとなしくてよく目の動く子であったが、スキーの修得度合いは早くもなく遅くもなく、ごく普通の中学生という印象であった。ところが父の転勤で大阪に戻った中三の秋に、突然「F君が自殺」という訃報が入ってきた。何が原因で自殺をしたのか、担任の教師や両親にも解からない、謎の自殺であったという話を、遠く仙台で聞くことになった。

後日、大阪に出張した折にF君の家を訪ね、彼の母親から詳しい事情を聞く機会があった。それによると、F君は頭が抜群に良くてテストの成績は全科目が満点。時間があれば丸善などの専門書店に行って、好きな哲学と天文学の書物を買って読み漁る。学校生活では、昼休みになると友人が「F君、今日はどんな話を聞かせてくれるの」と彼を取り囲む。先生以上に知識が豊富であったため、生徒たちに大変な人気があったという。ところが、ある秋の家族が誰もいない日に、自宅の梁にロープを掛けて首に結び、足台にした椅子を蹴って自殺を決行。原因を調べたが、学校でのいじめやトラブルは一切なく、遺書も残されていなかった。そのため、彼が何故死んだのか、両親や担任の教師、親しい級友たちも誰一人として分からなかったという。

今から50年も前に起こった悲劇であり、当時はまったく「謎の死」と言うほかはなかった。ところが、最近になってギフテッドに関する報告が幾つか出始めた。それらの報告によると、自殺は良く起こるケースで、ギフテッドは鋭い神経や感受性が災いして鬱（うつ）に陥りやすく、中には自殺に至るケースも珍しくはない、ということが解明されてきたようである。

ここで忠敬の幼少時に話を戻すと、三治郎が母の死後、小関家の叔父夫婦になつかなかったこと、神保家に戻されても家族、とりわけ父が後妻に迎えた義母とうまくいかなかったこと、知恵の発達が早く、大人が舌を巻くような和算などができる一方で、子供とは思えない突飛な行動や言動が多かったこと、興味があることには熱中するがそれ以外には命じられても目を向けなかったこと、さらに人使いがうまい、すなわち人の心が読めること等々、ギフテッドの特徴にぴったり当て嵌る。

それに対して、神保本家の伯父宗載が三治郎の資質を見抜いて、多古藩南中村の平山季忠に三治郎の将来を託す。湯島聖堂の学問所で林鳳谷に師事していた季忠は、三治郎の際立った資質に気付いて、色々な育成法を我慢強く試みるが、最終的には強引とも思える手法で豪家の伊能家に婿入りをさせる。そのプロセスは『ギフテッドの育て方』の手本となり得るもので、現代社会においても大いに参考になるように思われる。

もし仮に、神保宗載と平山季忠の連係プレーが

なかったとしたら、三治郎は下総のどこかで変死あるいは『変わり者』としてその一生を終えていたかも知れない……と私は、F君のことを想い起こしながら書き進めた。今となっては三治郎少年がギフテッドであったか否かを確かめる術はないが、少なくともそれに類した少年であったことは間違いないであろう。その様な観点から、偉人伊能忠敬を育んだ最初の支援者は平山季忠ではなかったか……というのが私の揺るぎない考えである。

また、これに関連した記録として、忠敬は伊能家に入婿して三年後に長患いで臥したとされている。当時の病としては先ず結核が想定されるが、経過から推測するとさほど悪性の病気ではなかったように思われる。であれば、一体どのような病気であったのか？　と自問しながら書き進むうちに、『ギフテッドは鬱に陥りやすい』ということに気が付いた。恐らく、若かった忠敬は、入婿により伊能家の当主として重責を担い、家業等に束縛されたことから鬱に陥ったのではないか……と考えれば流れはスムーズになる。鬱の症状は多くの場合、恢復に半年ほどを要するとされるが、忠敬が陥った長患いは鬱によるものと想定して、拙著では、「お前様は心の病だと思いますよ」と看病する妻の達に言わしめた。

三．少年三治郎の知的遍歴と義父平山季忠
～婿入りだけでなく、後々まで影響～

十歳時に父のもとに戻っても、三治郎は小堤村の家で過ごすことは少なく、親戚の家などを転々としたとされる。そして、和算に長けた和尚のいる常陸の寺や多古藩の藩医、さらには土浦の医者にも弟子入りしたとの記録が残されている。しかし、十歳を過ぎたばかりの少年が、自らそのような先を見つけ出し、弟子入りすることが可能であろうか？　やはり、誰かが修学先を見つけて三治郎に言い含め、お膳立てをしてやらなければ少年三治郎の遊学は成り立たない。だが、三治郎の父貞恒は婿入り先から離縁されて兄宗載の元に身を寄せていたため、とても三治郎の遊学を支援するような財力も社会的地位もなかった。しからば、誰が、三治郎を遊学させたか、と問えば南中村の名主で多古藩の下役人でもあった平山季忠しか思い浮かばない。

神保家の宗載から三治郎の育成を託された季忠は、先ず、僧侶への道を考える。この時代には、豪家の次男や三男は僧侶か医者になるしか道はなかったのである。しかし、三治郎は仏法にはまったく関心を示さなかった。そこで、「和算に長けた住職がいる」と少年が得意とする和算にかこつけて常陸にある寺に向かわせる。しかし、その寺から「僧侶として大成する見込みはない」と差し戻され、次は医者への道を模索。平山家の親戚に多古藩の藩医がいたので、そこに弟子入りさせたものの、なかなか食いつかない。そこで平山季忠は、次に当時の最先端の学問である「蘭学が学べる」というニンジンをぶら下げて三治郎を動機づけたと想定した。

そのきっかけは、伊藤一男氏の著書で、氏は、三治郎は常陸の「アソン」という学者の下で修業したというエピソードを述べている。その出所は、神保家を取材したある研究者が、昭和63年（１９８８）に分家の12代目に当たる長老から伝承を調査した結果であるという。このアソンを、小川氏は「麻生氏」ではなかったかと推論しているが、私は「阿蘇氏」と想定した。「肥後熊本の名家阿蘇氏の血を引く者で、長崎で蘭学・西洋医学を修めてきた」という触れ込みである。「阿蘇氏のところに弟子入りをすれば、蘭学や西洋医学が学べる」と言えば、三治郎は目の色を変えて飛びつくこと間違いなし、という筋書きである。

この展開については、小説的なテクニックに止まらず、私はもう少し深い意味を込めたつもりである。というのは、平山季忠は前出のように林鳳谷に師事しているが、この林家には平賀源内も入門している。源内が長崎に遊学をしたのは宝暦２年から一年間、林家に入門したのは４年後の宝暦６年、三治郎が十一歳の時のことになる。平山季忠は源内との交流があり、源内が主宰する物産会にも地元下総の物品を幾つか出展している。これらの史実から推定すると、源内が長崎に遊学して蘭学を学んできたことは季忠を介して少年にも伝えられたに違いない。知的な刺激を求めていた三治郎が、その最先端のオランダ語や医学、本草学等の話に目を輝かせたことは想像に難くない。すなわち、世界が刮目するような偉業を成し遂げた陰には、忠敬が少年時代から西洋の文化や自然科学に目を向け、強い関心を抱いていた……ということを暗に表現したかったのである。

また、一説によると、忠敬は伊能家に婿入りした後に、学問が好きで江戸湯島にある学問所まで通ったとされるが、これは現実的な話ではない。何故なら、佐原から江戸までは直線距離でも80キロ以上もあり、徒歩では片道三日ぐらい掛かる。江戸で１日だけ学問をして翌日にすぐ引き返したとしてもたった１日の修学に７日を費やしてしまう。伊能家に婿入りして日が浅い忠敬が、学問恋

しさに江戸に向かうとしたら10日近く家を空けなければならない。それが、伊能家の分家や親族が監視する中で出来るかと問えば、答えは否としか言えないであろう。

　そうなると「若い頃に学問にこころざし……」というのは、伊能家に婿入りする前と推定され、三治郎を我が子のように遇した季忠が、短期間ではあっても林鳳谷のところに連れて行き、季忠の実子季孝と共に学んだと推測した。忠敬という諱は、平山季忠の第4子として鳳谷から授かっているが、それは伊能家に婿入りするための急ごしらえの父子関係ではなく、季忠が長きにわたって『育ての親』の役目を果たしていたと考えた方が自然であろう。

　さらに、「林鳳谷から諱を授かった門人」という忠敬の肩書は、当時としては最高レベルの学歴に相当する。鳳谷から諱を授かった理由は、三治郎が伊能家に婿入りするための『箔付け』とされるが、この肩書は義父季忠が考えた以上の好影響を忠敬にもたらした。季忠の没後に刎頸の仲となる仙台藩医の桑原隆朝も、恐らく鳳谷の門下生であったという経歴に親近感をいだいたであろうし、まして愛娘お信を嫁がせることもなかったのではないか。また、隠居後に高橋至時に弟子入りしたいと願った折も、忠敬の高い学歴がプラスに働いたことは否定できないと思われる。その裏付けの一つに、忠敬は隠居後も欠かさず年始の挨拶等に大学頭の林家を訪問しているが、忠敬自身も林家との繋がりを大事に保っていたことを挙げることができよう。

四．桑原隆朝にまつわる疑問

　伊能測量のキーマンとなった桑原隆朝については、安藤由紀子氏や前田幸子氏の研究報告（本研究会誌16～18号および80号）に詳しい。具体的には蝦夷地に向かう第一次観測の実現から伊豆を起点とする第2次観測に至る過程等で、忠敬・高橋至時と幕府との間に立って精力的に動いたり、アドバイスをしたりする記録が克明に紹介されている。しかし、忠敬が隠居して江戸に居を構える前については資料が乏しく、前出の安藤氏は『ノブさんの墓と過去帳の記載と忠敬の書簡以外に、伊能家に桑原関係の史料が一切残されていないのはどうしてだろうか』と疑問を述べ、その理由を『この家を再興した伊能一族に、桑原家の影響を排除したい情念があったのではないか』と想像を述べている（同誌18号）。しかし、この安藤氏の想像に、私は抵抗を感じた。遺族とは言え偉人忠敬が残した文書を軽々に処分することは憚られるであろうし、夥しい文書から隆朝に関するものだけを選び取ることも容易ではないと思われるからである。

　私は拙著を書き進む過程で、『忠敬が記録に残さなかったのでは』と考えてみた。さらに、この仮定を推し進めると、隆朝は伊達家の番医者であり、藩主・大名や重臣たちの脈をとるかたわらその家族の診療にも当たる。それに伴い他者に知られてはならない大名等の病気や病状はもとより、極秘事項をも知る機会が増えてくる。必然的に「番医者は口が堅くなければ」ということになるが、医者の守秘義務は古今東西を通じて普遍的な鉄則である。その鉄則が身についている隆朝が、忠敬に「私と交わした話は一切口外無用、日記等にも書かないでくれ」と予め釘を刺した……ということは十分に考えられる。

　忠敬は若い時に医の道に進もうとしたこともあり、隆朝の言い分がよく理解できたであろうし、その約束を頑なに守り通したと思われる。また、妻のお信や妻の実家のことなども極力、口外や記録することを避けたであろう。しかし、それはメモ魔の忠敬にとっては苦しいことであり、努力を要することであったに違いない。その証左となるか否かはともかく、香取市佐原の観福寺にあるお信の墓碑に刻まれた2行を見たとき、私は忠敬の叫びを聞いたような感覚に陥った。

苔むしたお信の墓碑

左側面に刻まれた２行

　忠敬の墓の斜向かいにあるお信の苔むした石碑には、『浄蓮院成實妙貞大姉』と戒名が記され、その左側面には、『伊能忠敬妻／桑原隆朝女（むすめ）』の2行が刻まれていたのである。

恐らく忠敬は、最愛の妻を亡くしたときに、これまでのうっ憤を晴らすかのように、お信が自分の妻であったことと義父桑原隆朝の名を墓標に書き連ねたのではなかろうか。

五．桑原隆朝と堀田正敦との出遭いは？

忠敬を佐原の一商人から一躍幕府の天文方へと引き上げ、世界中が刮目するような偉業を成し遂げてゆく過程には、桑原隆朝と若年寄堀田正敦が大きく関与したことは疑う余地がない。であるならば、隆朝と正敦はどのようにして刎頸の仲ともいえるほど親密になったのであろうか？　「二人が共に伊達藩の出であった」というだけではとても納得のゆく説明にはならない。しかも、父の跡を継いだ二代目桑原隆朝純は江戸生まれの江戸育ち。堀田正敦は伊達藩主宗村の8男で、1万石の大名中村村由として、三十歳を過ぎるまで仙台を出たことがない。同じ伊達藩所属と言っても、両者は遠くかけ離れた地に生まれ育ったので、交流の機会はまったくなかったと思われる。

そのような疑問を抱きながら書き進むさなかに、本研究会報の第82号に掲載された前田幸子氏の研究報告『伊能忠敬 周辺の人⑦ 堀田摂津守正敦』の記述が目に飛び込んできた。その報文によると、常々「公方様にお仕えしたい」と言っていた村由は、外様では夢が叶わないので、譜代大名か旗本家の婿養子になることを望んでいた。そのため、妾（側室）二人と子供三人がいたものの、正室は娶っていなかった。彼の大きな望みが叶ったのは天明6年3月。村由三十二歳の時であり、堀田正富の婿養子に入り、その娘ともその月に婚約を取り交わした。

村由は「もう二度と帰ることもあるまい」と胸塞がる思いで故郷を後にしたが、江戸に着いても堀田家の屋敷に住むことは出来なかった。幕府から正式に婚姻の許可を得なければならなかったからである。そこで村由は、仙台から連れてきた妾や子供と共に伊達の下屋敷に仮寓することになる。村由は浪々の身を伊達の下屋敷で過ごすことになるが、その下屋敷には藩医の桑原隆朝が出入りをしていた。隆朝は日頃から大名や旗本たちの不甲斐なさを嘆き、気骨のある人物を探し求めていた。その隆朝の眼前に「公方様に仕えたい」と1万石の大名を捨てた村由が現れる。隆朝が村由に強い関心を抱き、急接近することは極めて自然な成り行きであろう。

私は、報文のこの個所を目にしたとき、思わず声を上げ飛び上がるほど嬉しかったことを今でもよく覚えている。入府した村由は、恐らく公方様や幕府の内情について何も知らず、仙台弁で周囲との会話さえ不自由であったに違いない。その村由が知りたい情報に隆朝は精通していて、何事も包み隠さず話してくれる。一方、気脈の通じた要人を幕府内に持ちたい隆朝が、才気溢れる村由を「この人物なら」と見込んで距離を縮めてゆく。二人の間には互いに強く引き付け合う理由や根拠があるし、そのような交流を重ねるうちに二人の仲は次第に深まってゆく。

村由の堀田家への婿入りが幕府に承認されたのは天明7年の5月。彼は名を堀田正敦と改め、伊達の下屋敷から麻生白金の堀田邸に移り住むが、それまでの1年と2ヵ月余りの期間、二人はかなり自由に交流する機会があったことになる。これを契機に二人の関係はますます深まり、伊能忠敬をも巻き込んで揺るぎないものになってゆくが、その端緒、出遭いは「伊達下屋敷にあった」と想定して、私はストーリーを書き進めた。

六．「エイとの至福の暮らし」を捨てて、何故、地図作りを？

私は四十歳前後から小説を書き始めたが、常にプロローグからフィナーレまで、同じ密度やテンポで描くことに気を配ってきた。今回の小説においても、そのスタンスに変わりはないが、四人目の妻女『エイ』を書く段になって壁に突き当たった。彼女については確たる史料が見当たらず、他の妻女と同じように描くことが難しかったのである。

その様な折に、私のパソコンに一通のメールが飛び込んできた。本研究会の戸村茂昭氏からである。氏は、「黒江町の隠宅でエイに助けられながら天体観測に没頭する情景を描いては……」という助言と共に、貴重な冊子『伊能忠敬の科学的アプローチ～星を鏡に瑞穂の国を写し取り、地図に仕上げた天文学学士 伊能勘解由～』を添付して下さった。氏が送ってくれた冊子は83頁にもおよび、忠敬が夜を徹して観測した星々の赤道緯度を中心に、天文学の専門的な記述の連続である。一度や二度では理解不能であったが、何度か読み返しているうちに忠敬が如何に天文学に魅せられ没頭したか、その真摯な姿だけは熱く伝わってきた。

この戸村氏からの助言と冊子は大変有難かったが、同時にショックでもあった。よく知られる忠敬のイメージは、あくまでも『歩く人』。地球を一周するほどの距離を歩いて日本を測量した人であり、私もそのような認識で小説を書き始めた。と

ころが、戸村氏の史料では、忠敬が究めようとしたのは天文学、当時の暦学であって地図作りではなかった！　主な登場人物のプロフィールが途中で大きく違っていたとなると、作者は出発点に立ち戻って文章全体を見直さなければならない。幸い、大きな書き直しを要することはなかったが、思っていた忠敬像が途中で覆されたことは精神的に大きな衝撃であった。

忠敬像の見直しで少し躓いたが、混乱した頭をすっきりさせて、さあ執筆を！　と思ったものの、今度はその場面が書けない。様々な史料から、隠宅には圭表儀や望遠鏡が付いた象限儀、子午線儀などがあったことは想像できる。しかし、そこで夜空を観測する忠敬とエイの姿が浮かんでこないのである。仕方がなく私は、忠敬が揃えたであろう測器の中でも馴染みが薄い『子午線儀』のミニチュアを試作して、実際に夜空を観測してみようと思い立った。

試作したミニ子午線儀

夜空を子午線儀で2分して眺める経験は、むろん初めてのことである。1月末に外灯一つない高台に出向いての観測であったが、寒さはまったく気にならない。児童向けの星座表を片手に、澄んだ夜空に展開する星座の美しさを満喫することになった。

このような疑似体験を経て、忠敬とエイが黒江町の隠宅で夜空を観測する場面を描くことになった。戸村氏からの資料により、星の呼称も古い中国名で表記し、リアリティを醸し出すことにも成功。当時の江戸には高い建物もなければ街灯もなかったであろうから、さぞかし見事な星の輝きを忠敬とエイは観測していたであろう……と推測しながら書き進めた次第である。

かくして忠敬は子供の頃から好きであった天文暦学を、当時の第一人者であった高橋至時に師事し、しかも才媛エイに支えられながら学究することになった。長いあいだ抱き続けた夢がやっと叶い、隠居後はまさに至福の日々を過ごしていたと思われる。その忠敬が、何故、好きな天文暦学に見切りをつけ、前途多難な地図作りに矛先を変えたのであろうか？

その理由は、「緯度一度の距離は？」という暦学上の疑問から「江戸から蝦夷地ぐらいを測らなければ……」という師弟間のやり取りがきっかけになったことを挙げることが出来よう。諸国を跨ぐ測定を実施するためには幕府の許可が不可欠であったため、北方領土の緊張にかこつけた『蝦夷地の測量』を口実に地図作りの話を持ち掛けた。幕府は既に蝦夷地対策を講じていて、最上徳内や堀田仁助、村上嶋之丞等を蝦夷地に送り込んでいる。そこに測量家としては無名であった勘解由（忠敬）が名乗り出ても幕府は見向きもしない。義父の隆朝から若年寄の堀田正敦に頼み込んで、やっと自前の金でやるのであればと、『測量試み』の許可が出た。天文暦学に夢中であった勘解由は、喜び勇んで江戸から津軽の三厩までを歩いて距離を測量。そして、子午線一度の長さは「27里余り」（正確には28．2里）、と距離を導き出したのである。

しかし、尊崇する師の至時は勘解由が苦心して導き出した数値を認めてはくれなかった。莫大な金と半年にもわたる蝦夷地までの測量に限らず、至時は勘解由の熱心さは認めても、天文暦学のレベルは初心者、常に素人の域を出ない隠居として軽視していた節が間重富と交わした書簡などに見られる。

一方、蝦夷地に行く口実でしかなかった地図作りについては、その出来栄えが高く評価され、幕府は遠い蝦夷地よりお膝元の江戸周辺の地図をと期待を寄せてきた。恐らく予想もしなかった展開であったろうが、勘解由の心は大きく地図作りの方へと傾いてゆく。幾ら努力を重ねても師匠のレベルには届きそうもない天文暦学。しかも師の至時からは隠居の慰み事と軽視される暦学より、幕府から評価され期待される地図作りの方が、忠敬にとっては遣り甲斐があるように思えてきた。若い時から「後世に残るような仕事を」と思い願ってきた忠敬が、どちらを選ぶかは、答えを待つこともないことと思われる。

以上、長文になってしまったが、伊能忠敬の前半生を小説に描いたとき気付いたことや感じたことの幾つかを列挙してみた。歴史には疎い素人が書いた拙文であるため、笑止千万と言われるかも知れない。しかし、『岡目八目』という諺もある。伊能忠敬に興味を持ち、研究されておられる方々の一助になればこれに勝る喜びはない。

※本小説は、次のＵＲＬから読むことができる。
文芸「草の丘」第17号～22号
http://bungeikusano-oka.raindrop.jp/

会員通信

忠敬を詠ふ（二）

東京都　伊能　洋

富岡八幡宮除幕式
　秋高し一歩を踏み出す忠敬像

富岡八幡宮再訪
　秋思あり二昔経し忠敬像

忠敬旧宅
　ふるさとの上がり框の秋思かな

秋祭
　旧宅の前で山車止め踊り出す
　忠敬の四人の妻や彼岸花

忠敬さん二首

北海道　齊藤　サダ

春潮や　竜飛の岬を背に負ひて
　蝦夷地見遥かすは忠敬像

儺衣（おにごろも）纏ひて居並ぶ面々を
　忠敬さんの見守りをりぬ

新入会員自己紹介

東京都　土居　正博

はじめまして。

今年（２０２２年）６月に入会させて頂きました。

幼少の頃に「最初に正確な日本地図を作った人」と教わってから数十年経ち、昨年還暦を迎えました。

年齢を重ねる毎に「正確な地図」を作ることの難しさ、江戸時代にそれを成し遂げた事の偉大さを知り、「伊能忠敬」という偉人について非常に興味を持っておりました。

また、江戸時代に50歳を過ぎてからの取り組みということで、そのバイタリティに勇気付けられております。

映画「大河への道」を観て、周辺の人々の活躍や技術についても興味深く思っていたところ、「伊能忠敬研究会」を知り、さっそく入会させて頂きました。

先日、会報を送って頂きました。

私の知らないことばかりで目が回りそうでしたが、興味深く読ませて頂きました。

毛穴から吸収していく気持ちで少しずつ学ばさせていただきたいと思いますので、今後ともよろしくお願いします。

神奈川県　兒玉　晴子

はじめまして。兒玉晴子と申します。職業は会社員、神奈川県在住です。

昨年、勤務先の仕事のなかで伊能図を調べる機会があり、本を読み進めていくにつれ興味が湧き、自身の関心の方が勝って危うく本来の仕事から脱線しそうになりました。なんとか仕事を全うできましたが、伊能忠敬と伊能図のことをもっと知りたいという思いから、今年の春に、入会いたしました。

伊能忠敬が生まれた九十九里町は、我が家の菩提寺の近くであることを、先頃知りました。私が幼い頃は、墓参の帰りには海水浴、潮干狩りに九十九里浜へ寄るのが常で、その時は忠敬出生の地のそばを通っていたのだなと思うと、なんとも不思議な気持ちです。

趣味は、神社仏閣めぐり、美術鑑賞です。写真は、伊藤若冲ゆかりの石峰寺（京都市伏見区）で数年前に撮ったものです。卒業論文以来、若冲をウン十年追いかけ続けています。加えてもうひとり、伊能忠敬を追いかけていくこととなり、あれこれ心配ではありますが、楽しんで勉強してまいりたいと思います。

伊藤若冲ゆかりの石峰寺
（京都市伏見区）にて

この数年はコロナ禍で旅行や展覧会にも行けず、書棚の地図やガイドブックを引っ張り出して眺めながら旅行気分に浸ることもしばしば。今夏は、会報でご紹介のありました神奈川県立歴史博物館「地図最前線」展へ行き、地図の世界に癒やされました。

伊能図の尽きない魅力を楽しみながら、みなさまと交流できましたらと思います。伊能図初学者でございますが、どうぞよろしくお願い申し上げます。

兵庫県　中島　正太

初めまして。兵庫県のほぼ中央部、山に囲まれた丹波市在住の中島正太と申します。

明智光秀が丹波攻めを行い、福知山城を築いた京都府福知山市とは車で約15分で行ける所です。丹波栗、丹波松茸、丹波の黒豆、大納言小豆などの特産物があり、一度は耳にされた方もあるかもしれません。

私は現在71歳ですが、土木技師として22歳から建設会社に勤め、主に高速道路、橋梁、トンネルなどの施工に従事し、父が亡くなってからは、実家を継ぎ、地元の建設会社に勤め、70歳にて退職いたしました。

実は私の家が、伊能忠敬の測量隊の脇本陣だったらしく、また同じ町内の本陣になった屋敷には、当時の伊能忠敬にお出しした献立表が残っており、献立を再現したイベントもあり、興味を引かれておりました。

また職業がら測量士を持っており、近年はドローンを使っての測量をしておりましたが、なぜ伊能忠敬の測量技術が現代の日本地図と変わらないほど正確にできたのか、当時の測量技術にも興味があります。

伊能忠敬は測量と同時に天体観測もしていたので、高校時代天文班に所属していた私にとってはさらに興味深く、親近感を抱かずにはいられませんでした。

大阪の伊能忠敬研究会の方が、去年家に訪ねてこられ、話を聞く内にもっと詳しく知りたいと思い、会員になろうと思った次第です。

講演会などのいろいろな会場に出席し、見識が深められたらと思っております。よろしくお願い致します。

【趣味】

・スキー（全日本スキー連盟1級）
・ロードバイク（去年は淡路島1周・しまなみ海道往復）
・魚釣り（チヌ釣り・海上釣り堀）
・京都神社・仏閣めぐり（京都観光・文化検定2級）
・旅行・ドライブ（世界遺産検定2級）
・野菜作り

岡山県　水田　清志

はじめまして。岡山県瀬戸内市在住の水田清志と申します。68歳になります。

地元に新しくできた図書館でボランティア団体の事務局長をしています。今年度の活動として、伊能忠敬に関する講演会やフィールドワークも計画しています。

私が伊能忠敬に興味を持ったのは、図書館で『伊能忠敬日記』を読んだ時に始まります。偉人としての忠敬が人間忠敬になったような気がしました。また、１８０５年11月には、瀬戸内市の海岸線と島々を測量し、瀬戸内市に5泊していたことが分かりました。

今年度のフィールドワークは、図書館のボランティア団体主催で、宿泊地の街周辺を歩き、歩幅で距離を歩測するゲームを行いました。

この9月24日には、伊能忠敬研究会の副代表河崎倫代さんによる「現代の地図作りにつながった伊能忠敬の足跡～全国の顕彰活動とその魅力～」という講演会も計画しています。大変楽しみです。

伊能忠敬について調べていくうちに、いろいろな困難が有りながらもなぜ実測による日本地図を完成することができたのかに興味を持ちました。

どうぞよろしくお願いします。

【97号正誤表】（誤→正）

17頁　図10
江戸府内図（南）→江戸府内図（北）
32頁　上段　8行目
送らせる→遅らせる
75頁　2段　16行
（大阪府）→（兵庫県）
75頁　2段　23～24行目
トランジット→トランシット
75頁　2段　27行目
私だけ!?→私だけ!?
75頁　3段　13行目
あるのには→あるのでは

「伊能忠敬笹山領測量の道」刊行

京都府の「伊能忠敬笹山領探索の会」が今年で12年目を迎え、これまでの活動記録「伊能忠敬笹山領測量の道」が8月1日に刊行されました。

12年の歩み ごあいさつ

江戸後期、国土を実測して日本地図づくりに貢献し、「人生二山」を実践された伊能忠敬は、17年をかけて全国を測量する中、笹山領には二度にわたる緻密な測量を行っております。その足跡を後世に伝えようと、平成23年（２０１１）３月から笹山領の測量道を探索し、まず、市内小学校に郷土の歴史・文化を育む生きた教材づくりに、また、高齢者には身近な歴史に触れる「忠敬の歩いた道」をウォーキングコースとして案内してきました。

伊能忠敬測量２００年の節目にあたる平成26年（２０１４）３月には、伊能図を披露するミニフロア展と講演会を催すことができました。

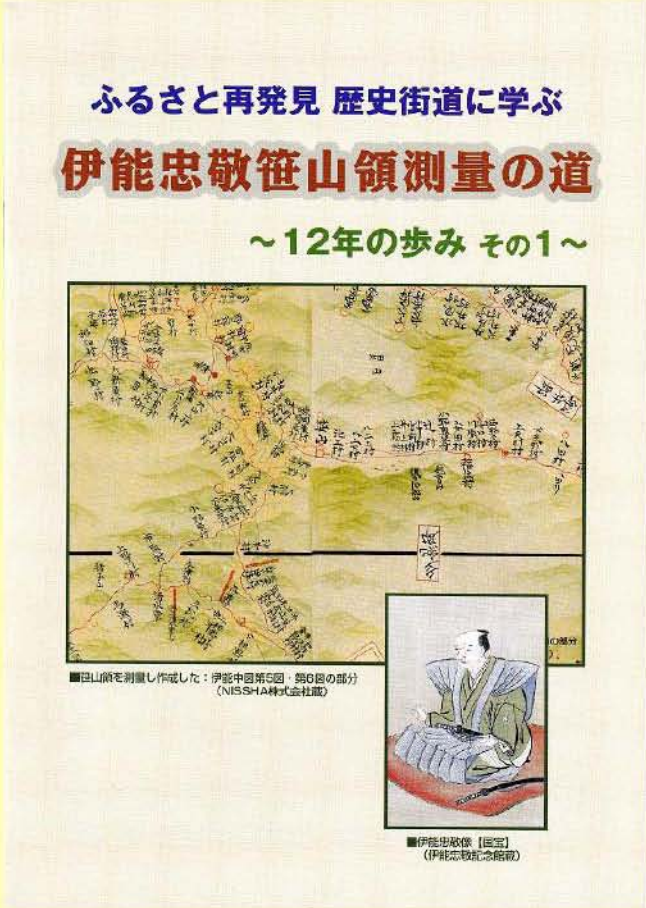
そして、後世に残す形づくりには、伊能忠敬の歩いた証として、平成27年（２０１５）10月からその街道筋にあたる12地区のまちづくり協議会に賛同いただき、12基の標柱を建てることができました。

これら活動に関心が高まり、平成30年（２０１８）９月、県内の忠敬ファンが集うフォーラム開催へと発展いたしました。

このたび、12年の活動を取りまとめ、書き留めることで、当地が忠敬ゆかりの地として、いつまでも郷土に語り継がれることを念じております。

ここに、今日までの活動にご教示、ご支援いただきました方々に感謝申し上げ、衷心よりお礼申し上げます。

伊能忠敬笹山領探索の会
会長 加賀尾 宏一



事務局からのお知らせ

会員交流ページ

伊能忠敬研究会会員は、現在約百六十名です。北海道から九州にまで広がっていますが、コロナ禍の中で相互交流もままなりません。

そこで、忠敬さんにちなんだ短歌・俳句・川柳、エッセイ、近況報告など、ちょっと気軽にご投稿いただき、相互交流のきっかけにしませんか！

ご投稿をお待ちしています。

・投稿先（電子メール添付の場合）
kaiho@inoh-ken.org
・手書きでも受け付けています。

会報バックナンバーあります！

会報バックナンバーの在庫があります。新入会員や執筆者、一般会員の皆さまからの注文に応じます。

ご自分の執筆号を地元の図書館等にご寄贈いただいて、伊能忠敬研究会の広報活動にご協力いただくと有り難いです。

ただし、在庫切れの号もありますので、あらかじめ事務局にメール等で在庫の有無をご確認ください。

・会員価格一冊五百円（送料込みです）
・入手方法希望する号と冊数、氏名・〒住所を記し、事務局に申し込んでください。会報と代金振込書をお送りします。
・事務局メール mail@inoh-ken.org
・郵便振替口座
００１５０-６-０７２８６１０

幹事の選任について

９月に開催された２０２２年度第３回理事会において、会則第13条に基づき、左記の４名が幹事に選任されました。

（北海道） 中塚徹朗
（埼玉県） 井上 健
（神奈川県） 狼 芳明
（石川県） 室山 孝

『伊能忠敬研究』投稿要領

①原稿の長さ
論文、報告、紹介、などは、本文・写真・図などを含めて一件につき刷り上がり八頁まで、年
各地のニュース・お知らせなどは刷り上がり一頁以内を原則とします。
＊刷り上がり一頁に入る文字数は約2000字（704字×三段または480字×四段）です。長い原稿の場合は連載として分割していただくこともあります。

②原稿のかたち
・本文（テキスト）　原則として、マイクロソフト社のワードなど一般的なワープロソフトで作成された電子ファイルとします。
・写真　一般的なJPEG形式またはTIFFまたはフォトショップのPSD形式でフォーマットされた電子ファイルとし、印刷サイズで350ppi程度の解像度のよい鮮明なものを用意してください。
＊印刷サイズが100mm×75mmで350ppiのカラー写真の場合、1MB前後のファイルになります。通常のデジタルカメラやスマートフォンによって5Mモード以上で撮影された画像ファイルで問題ありません。
デジタルカメラのデータ仕様がわからない場合は、L判（127mm×89mm）程度にプリントアウトした鮮明な写真でも結構です。
・図　写真に準じます。原図をコピーする場合は、なるべくスキャナで撮った電子ファイル（JPEG形式またはTIFF形式）にしてください。

③原稿の送り方
左記まで電子メール添付か、CDなどのメディアにコピーしたものを郵送してください。その際、挿入する写真・図がある場合はその位置、およそのサイズを本文中に編集者がわかる形で記入しておくか、概略を記入した割付用紙を添付してください。また、題名、著者連絡先、原稿区分、刷上り見込みページ数などを記入したメモ、または原稿整理カードも同時に送付してください。（詳しくはホームページ　http://www.inoh-ken.org/　を参照）

送り先
・電子メール添付の場合　kaiho@inoh-ken.org
・郵送の場合　〒153-0042　東京都目黒区青葉台4－9－6日本地図センター2階
伊能忠敬研究会「伊能忠敬研究」編集部

④注意事項
・編集途中での大幅な追加修正はお受けできません。完成原稿として投稿してください。
・図や写真の引用について、必要な場合は投稿する前に執筆者が責任を持って会誌及びホームページ掲載の許可を取っておいてください。
・引用した文献等については本文末尾にリストや注記等で出典を明らかにしてください。
・原稿内容を編集委員会で検討し、不明な点や内容的に不備な点があった場合には執筆者に連絡し、修正または掲載を見送る場合があります。
・受理した原稿は原則として執筆者にお返しいたしませんので、必ずコピーをとっておいてください。本誌に掲載された記事の著作権は、伊能忠敬研究会に帰属することとします。他誌等へ転載する場合は、事務局に連絡して許可をとってください

次号（第99号）は2023年2月発行、原稿締切は12月31日です。
皆様の投稿をお待ちしております。

伊能忠敬研究会入会の御案内

一、本会は伊能忠敬に関心をお持ちの方はどなたでも入会できます。

二、つぎのような活動を行っております。
①会報の発行　研究成果・会員活動情報など　原則として年三回発行
②例会・見学会の開催
③忠敬関連イベントの主催または共催
④その他付帯する事業

三、入会方法等
入会を希望される方は郵便振替で住所、氏名、電話番号、通信欄に専門、趣味、入会の動機、御意見などを書き添えて、年会費五千円を左記にお送り下さい。
会計年度は、四月から翌年三月ですが、年度途中より御入会の場合は、当該年度の会報のバックナンバーをお送りします。

四、伊能忠敬研究会事務局所在地
〒153-0042　東京都目黒区青葉台4－9－6　日本地図センター2F
電話・FAX　03-3466-9752
（留守の場合は録音テープに吹込んでください。）
事務局メール　mail@inoh-ken.org
郵便振替口座　〇〇一五〇-六-〇七二八六一〇
ホームページ　http://www.inoh-ken.org/

編集後記　◇平成7（1995）年1月1日に、伊能日本図探究会が発足し、「伊能図探究」第一号が発行されている。◇その一年後には、会の名称を現在の「伊能忠敬研究会」に改め、機関誌も平成8年3月発行の第7号から、「伊能忠敬研究　史料と伊能図」となった。◇その機関紙も今号が98号となり、来年には100号を迎える。◇先日の理事会では、100号を記念して、1号から100号までの総目録の作成や会誌の記念号を発行することが決まった。◇発行時期は、100号が来年6月、総目録は100号を含めるため、機関紙から少し遅れることになるだろう。◇100号記念号は、現時点では初期の会誌や別冊の記念誌などの中から貴重な記事を抽出して再録することや最近注目されている伊能図の下図の小特集が考えられている。◇100号記念号に向けて会員の皆さんのご要望などありましたら編集担当（メール：kaiho@inoh-ken.org）にご連絡いただきたい。H

「伊能忠敬研究」第98号© 2022年10月30日発行　編集　髙安克己　発行　菱山剛秀
〒153-0042 東京都目黒区青葉台4-9-6　日本地図センター2F　伊能忠敬研究会　TEL&FAX 03-3466-9752